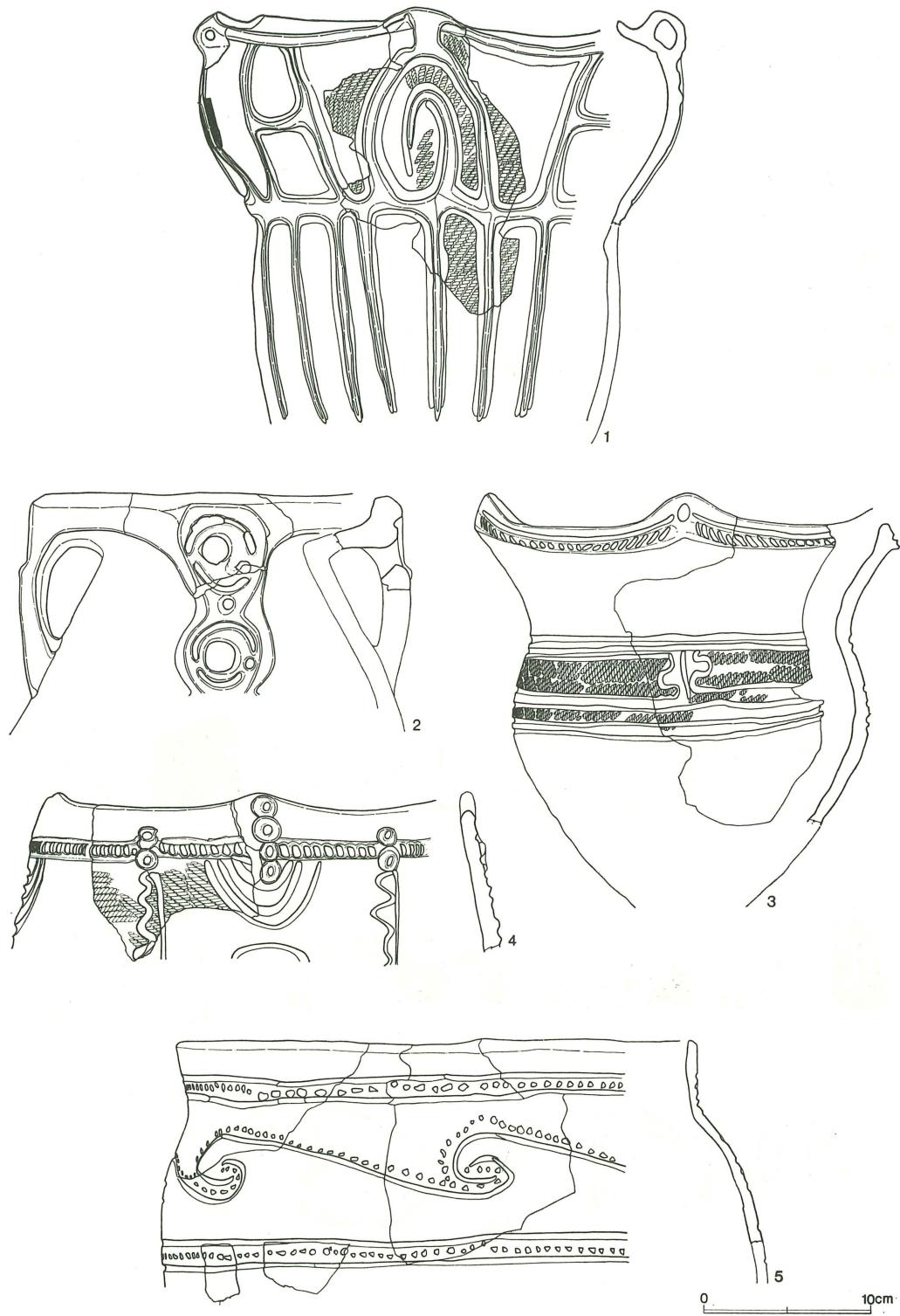


第121図 グリット出土土器拓影図 (13)



第122図 グリット出土土器実測図（1）



第123図 グリット出土土器実測図（2）

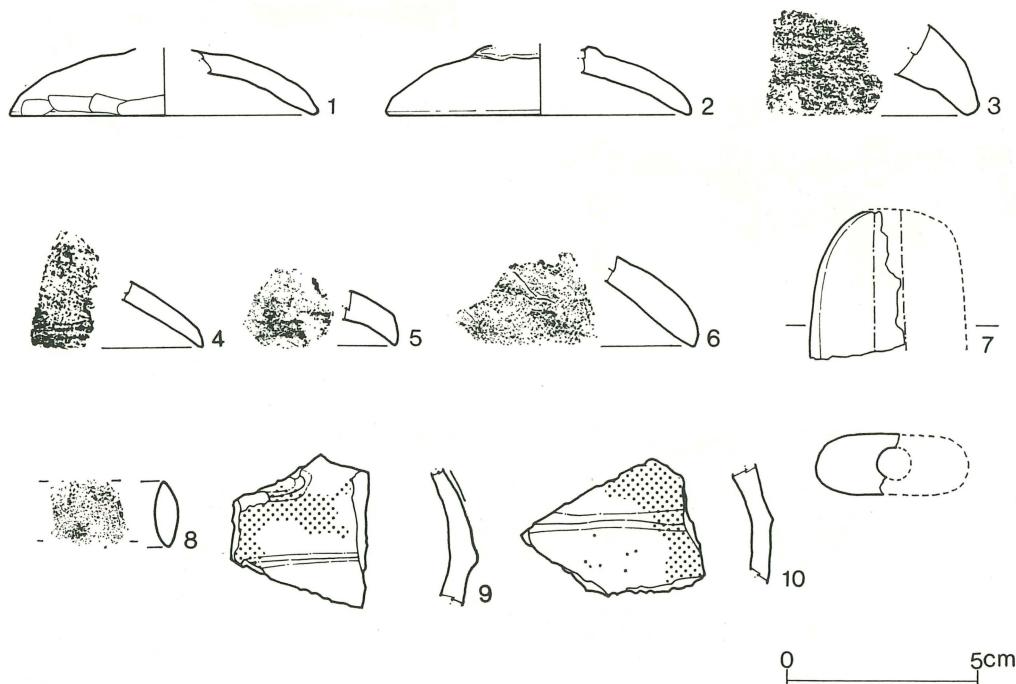
2—4 土 製 品

蓋（第124図1～6） 1は口径—8.2 cm、現器高—1.7 cmでつまみ部を欠失する。口縁端部にケズリが認められる。2は口径—8.1 cm、現器高—1.8 cmでつまみ部を欠失する。3～6は復元し得ないが1、2とほぼ同様の形状を示すものと思われる。

土錐（第124図7） 短径—3.2 cm前後の楕円形を呈するものと思われる。厚さ—1.6 cmで中央部に円形の貫通孔がある。

耳鉗（第124図8） 径は復元し得ない。器高—1.8 cmで両端が尖がる。

朱彩土器（第124図9、10） いずれも第1類土器で小型壺である。



第124図 土製品実測図

2—5 石 器

久台遺跡において出土した縄文時代に属すると思われる石器の他に先土器時代と相定される石器が含まれ、先土器、縄文いずれとも判断しかねる石核が検出された。I区については出土地点を中心に、III区ではかなりの密度でブラックバンドまで下げたが検出には到らなかった。当初にこれらの石器を説明し、次に縄文時代の石器を述べる。なお、石核は、一応縄文時代としておく。

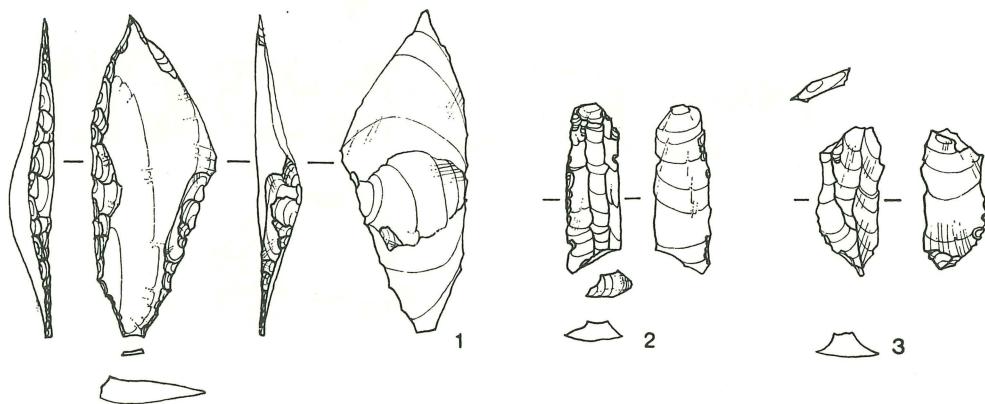
A 先土器時代の石器

ナイフ型石器（第125図1）

出土地点は9B区で第16号住居跡覆土からの出土である。石質はメノウ製である。かなり薄手の横長剝片を素材とし、右位右刃である。調整加工は両側面に施されている。

細石刃（第125図2、3）

裏面と表面の剥離方向は一致する。両者ともに折れ面が認められ、17は表面から、18は裏面から力が加わっている。17、18とも側面に微細な剥離痕が認められる。17、18とも黒曜石製で、12C区で出土している。



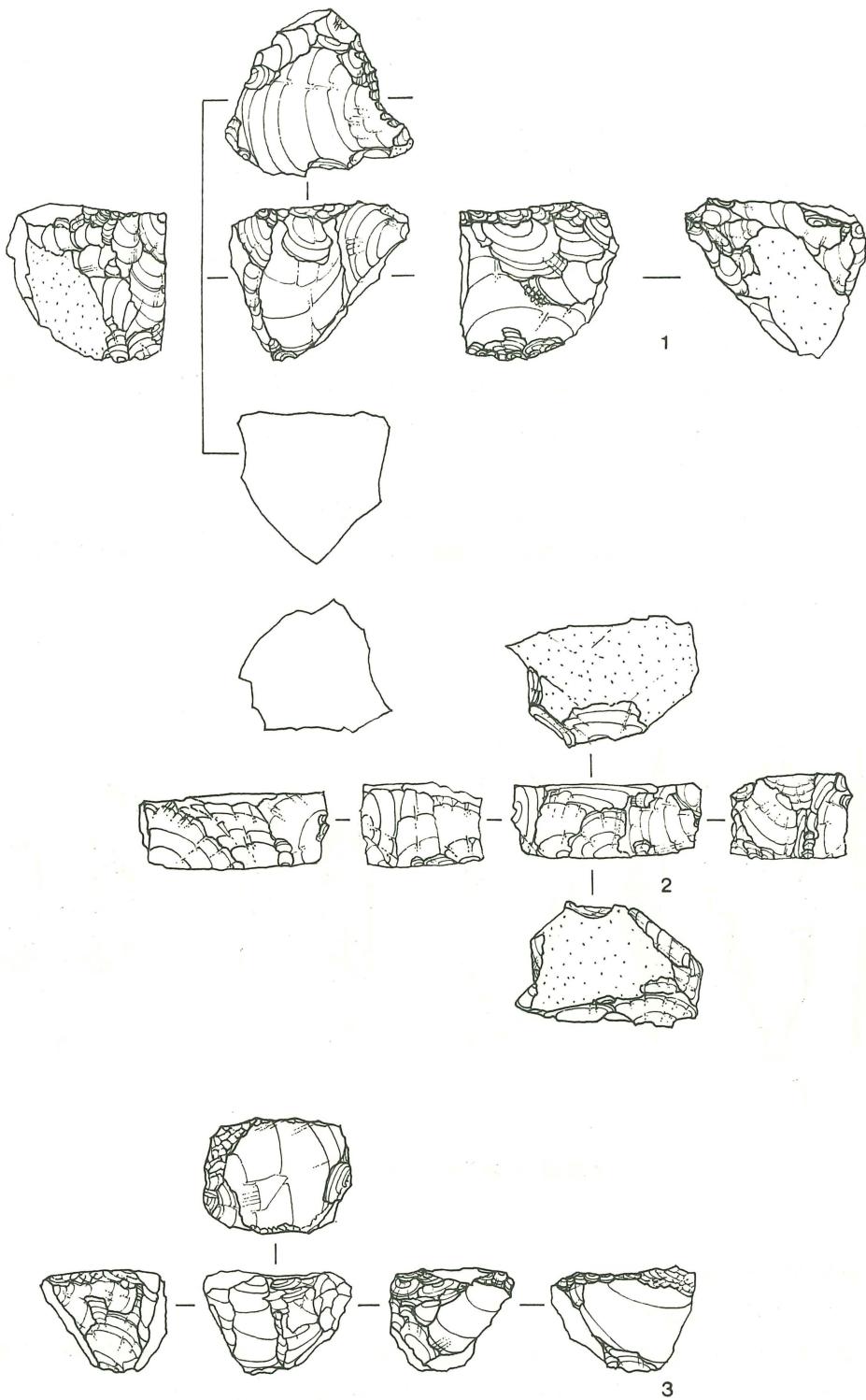
第125図 石器実測図 (1) (S 1/1)

B 縄文時代の石器

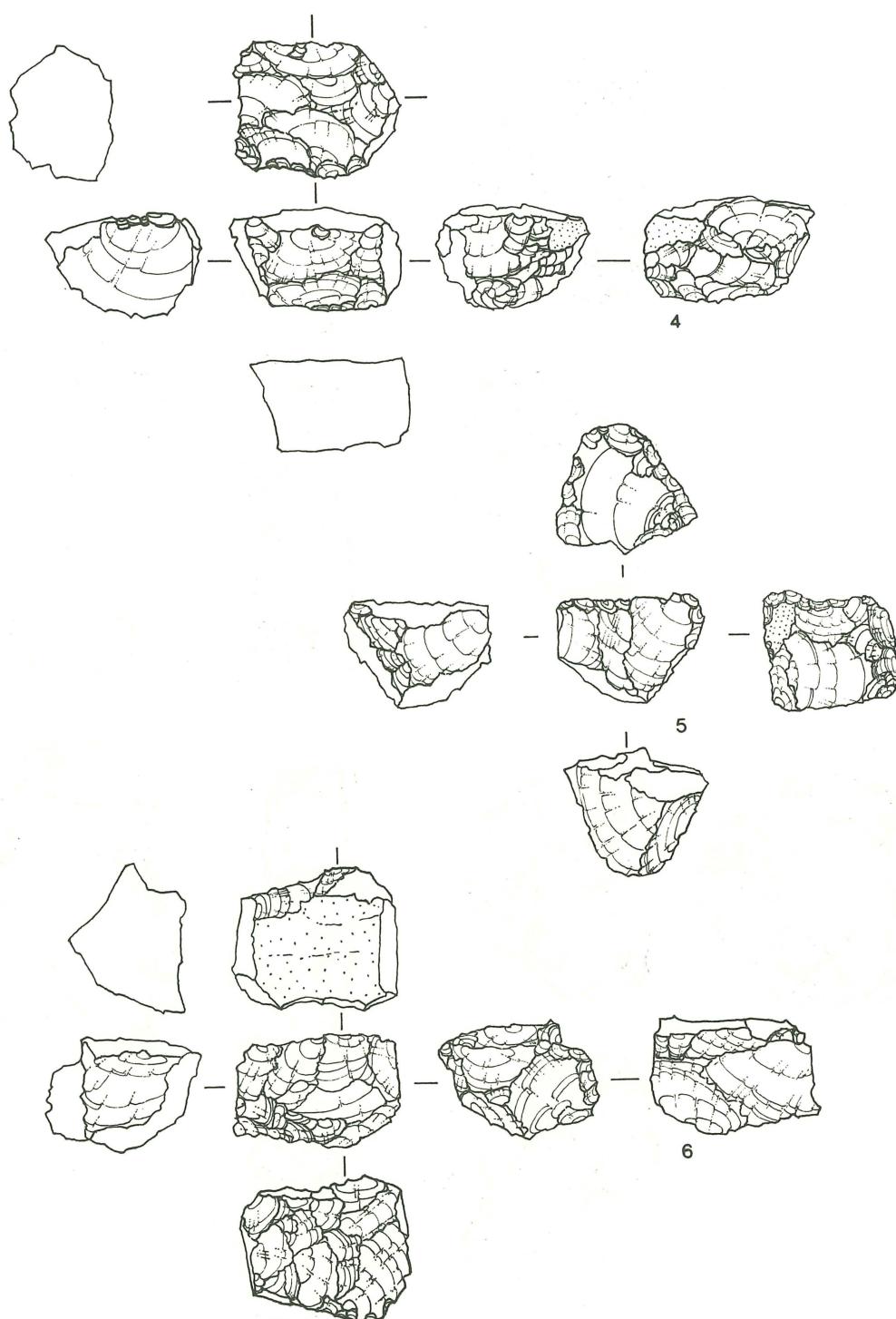
石核（第126図～第129図）

1は側面部に原材面を残す。上下両面から剥離が認められる。上面はほぼ一回の剥離で剥離面打面とされるが、周辺部にかり再調整が施される。剥離工程が進み円錐状を呈する。

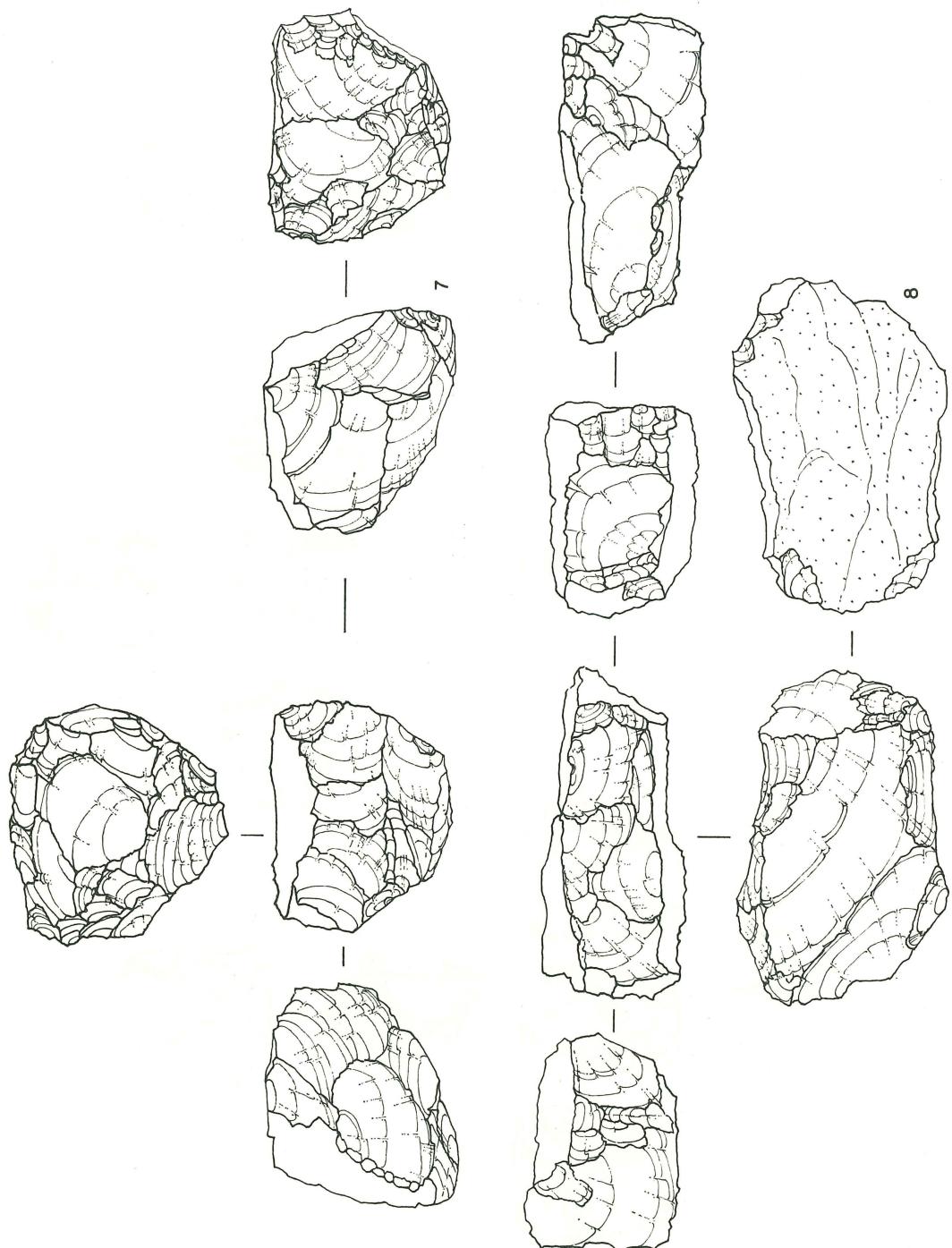
2は上下両面に原材面を残す。原材面周辺に調整剥離を行ない打面とする。上下両面から剥離が行なわれる。



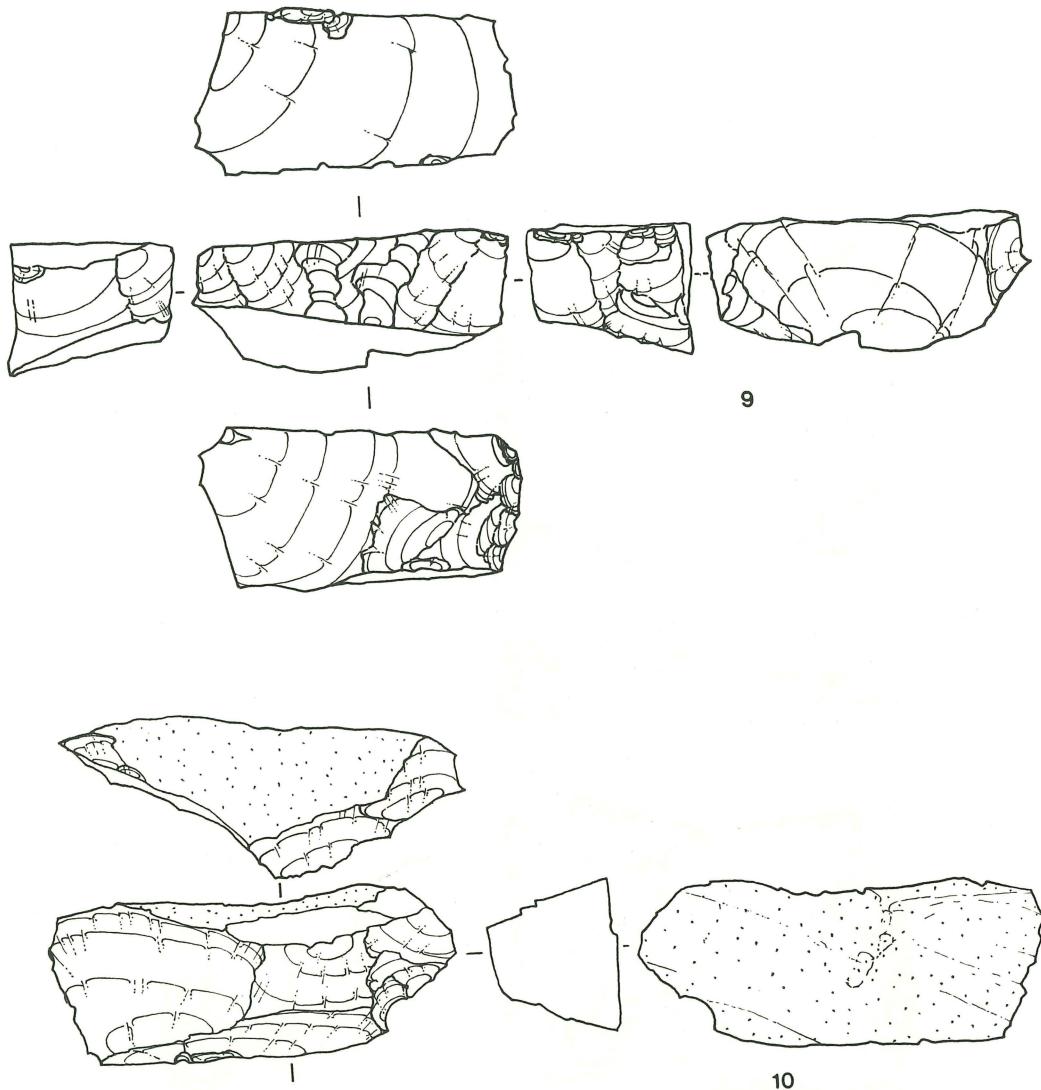
第126図 石器実測図 (2) (S 1/1)



第127図 石器実測図（3）（S 1/1）



第128図 石器実測図(4) (S 1/1)

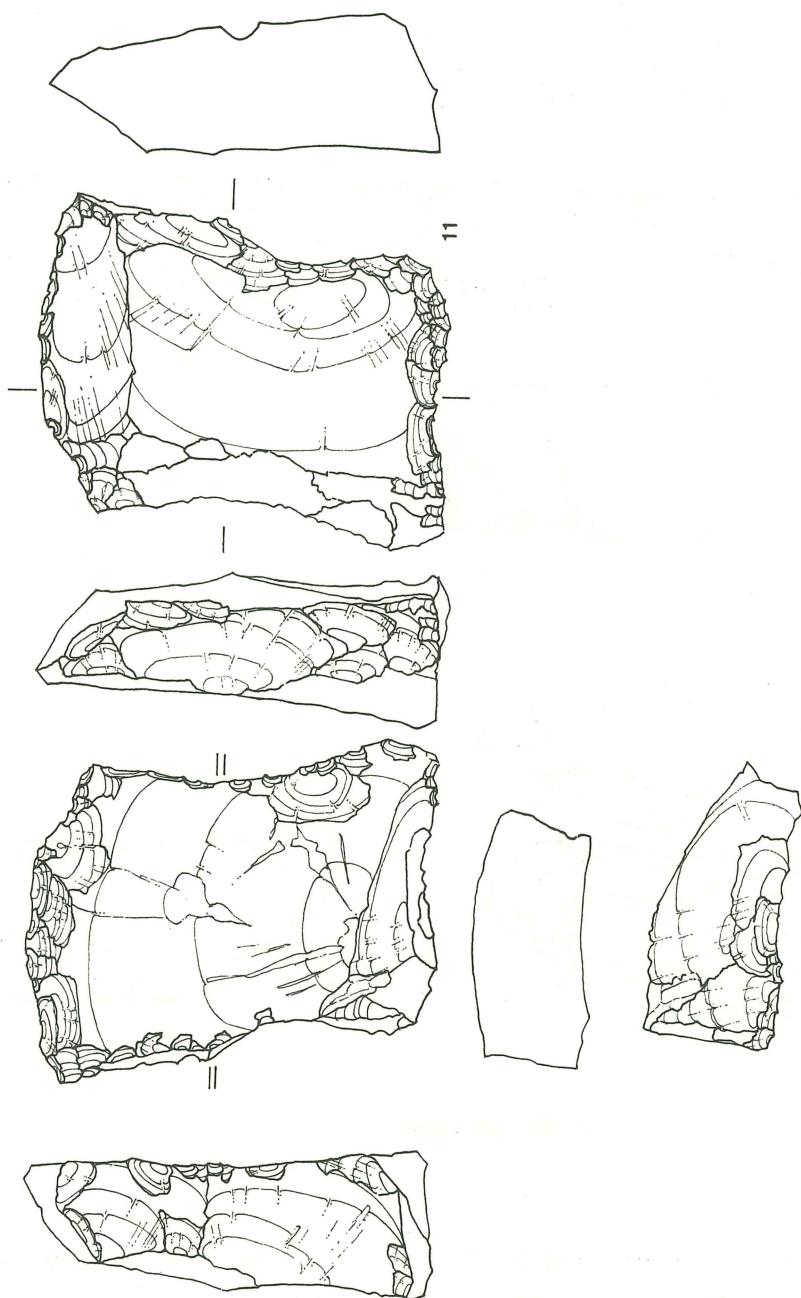


第129図 石器実測図（5）（S 1/1）

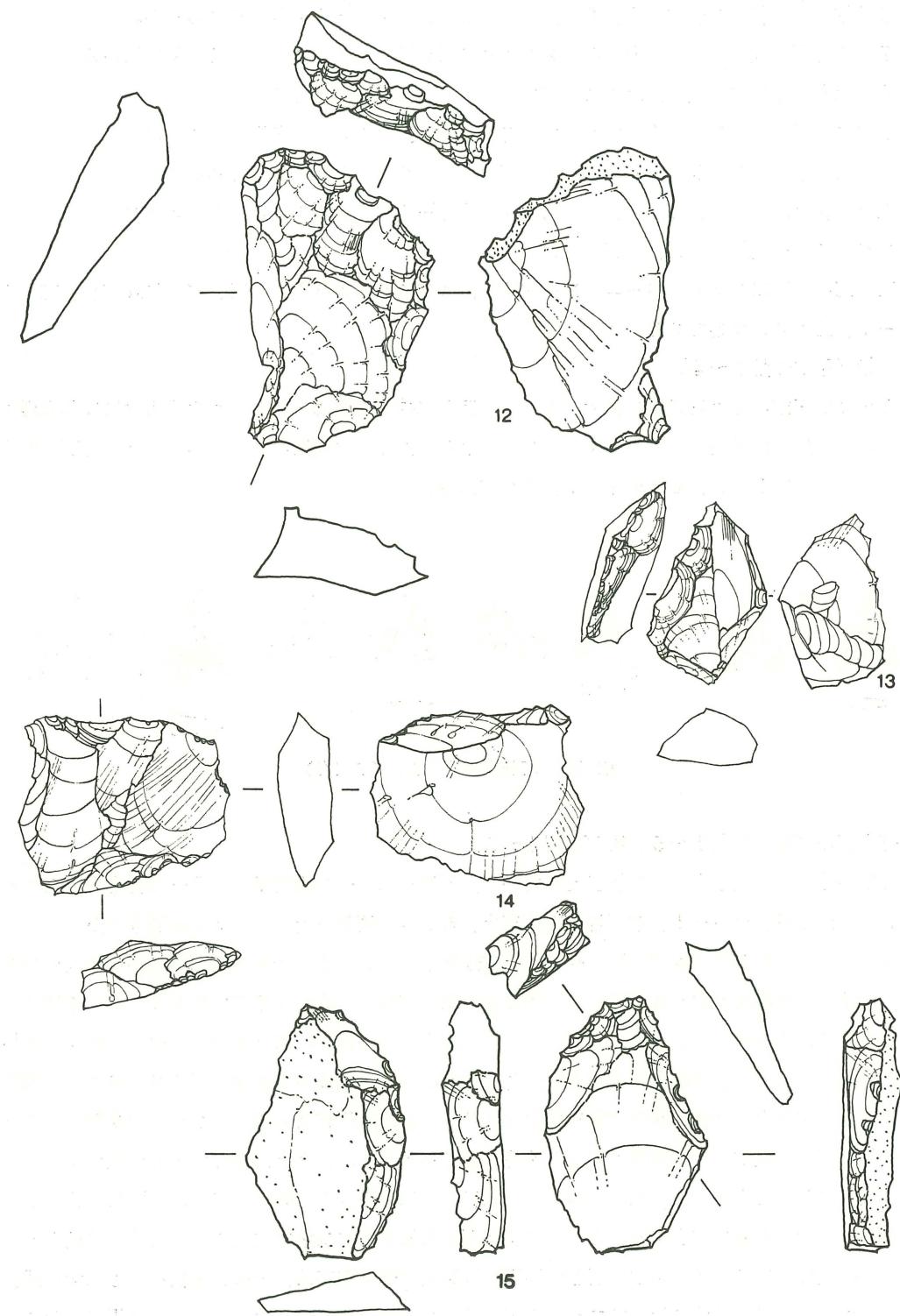
3は原材面を残さない。一回の剥離で打面とする。打面の周辺部にはかなり再課整が行なわれている。下面からの剥離も認められる。剥離工程が進行して円錐状を呈する。

4は側面部にわずかに原材面を残す。上下両面から剥離が行なわれる。打面は多くの剥離面から成る。

5は側面部にわずかに原材面を残す。一回の剥離によって打面とする。打面周辺部にはかなり再調整が行なわれる。側面からの剥離も認められる。円錐状を呈する。



第130図 石器実測図（6）（S 1/1）



第131図 石器実測図 (7) (S 1/1)

6は打面に原材面を残す。原材面を打面とするが、下面からの剥離も認められる。

7は原材面を残さない。各面から剥離が行われている。1つの面には多くの剥離面が入る。

8は上面に原材面を残す。上下面を打面として両方向から剥離される。

9は原材面を残さない。1つの剥離面で打面とする。下面よりの剥離もわずかに含む。

10は石核素材、あと数回の剥離によって石核として整えられるものと思われる。

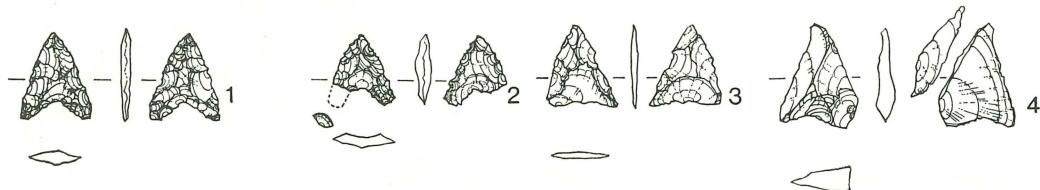
以上、材質は1、2、4～6、8～10までがチャートで大部分である。3がメノウ。

スクレイパー（第130図、第131図）

11、15は端部にスクレイパーエッジを作る。11は石核からの転用か。13、14は黒曜石製、15はチャート、11はメノウ製である。

石鏃（第132図1～4）

1～3が石鏃。4が石鏃素材剥片。1、2は基部に抉りが認められる。かなり入念に成形剥離される。2は脚部が裏面側から欠失する。3は、かなり大まかな剥離によって作られる。基部の抉りはない。石質は1、2、4がチャート、3が安山岩。



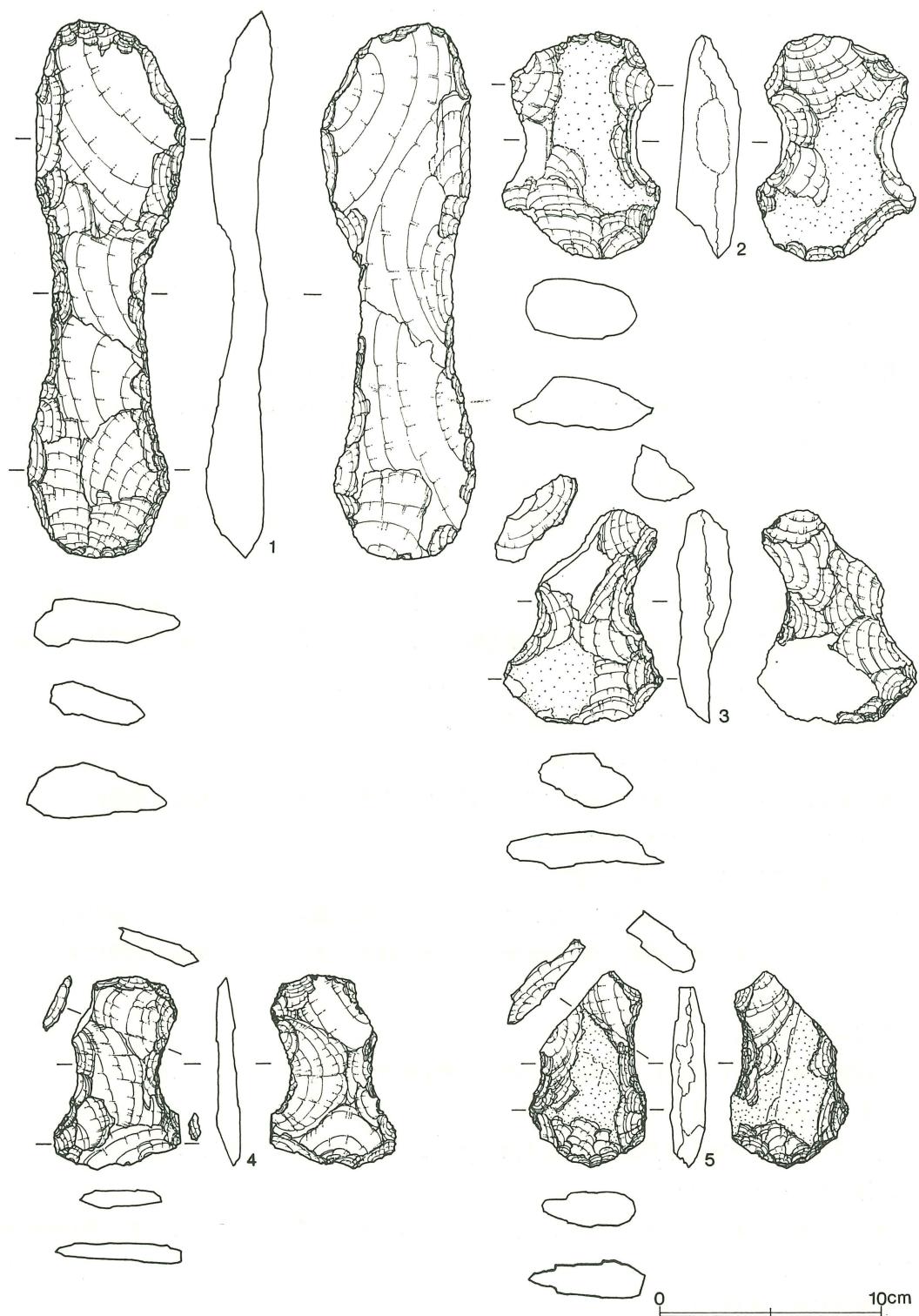
第132図 石器実測図(8) (S 1/2)

打製石斧（第133図1～5、第134図1～5）

打製石斧は破損品を含めて11点出土している。形態的にA一分銅型7点、B一短冊型3点である。石質は、砂岩系、チャート、粘板岩、石英斑岩、安山岩、硬質頁岩等であるが砂岩系が多い。

A 分銅形打製石斧（第133図1～5、第134図1、2） 1は全長—24.3cmでかなり大形である。両面とも原礫面を取り去っている。側面着柄部、刃部を入念に調整で作出している。第27号土壙出土。2は完存品、全長—10.3cm、厚さ—2.7cmとかなり厚い。表裏両面に原礫面を残す。着柄部の調整は非常に入念で敲打成形状を呈する。刃部はかなり大まかな剥離で形成され裏面から調整する。3は左側上部が裏面からの加撃で欠失する。表面部に原礫面を残し、2～3の剥離で刃部を形成し裏面に調整する。着柄部も入念な調整が施される。4は、3と同様左側上部が裏面からの加撃で欠失する。両面ともに原礫面を残さない。刃部はほぼ1回の剥離で形成し、裏面で調整する。着柄部も入念な剥離で作出する。5は、左側上部を表面からの加撃で欠失する。刃部、着柄部とも入念な調整で形成される。第134図1は裏面に原礫面を残す完存品。刃部、着柄部とも入念な調整で形成される。刃部は他に比してフラットである。2は原礫面を残さない。刃部は破損後入念に再調整が施される。

B 短冊型打製石斧（第134図3～5） いずれも破損品。3、5は製作工程時の破損と思われ



第133図 石器実測図 (9)

る。3、5は両面とも原礫面を残す。4は刃部が両面ともに1～2回の剝離で形成される。

礫器（第134図6～8）

石材は砂岩系、粘板岩である。いずれも表裏両面に原礫面を残す。6は他に比して調整が入念である。7は周辺部に調整を施して刃部とする。8は上半を欠損する。当初の剝離だけで調整はあまり行われない。

磨石・敲石・凹石（第135図、第136図）

石材は安山岩、砂岩系、花崗岩であるが安山岩が多い。対象物をたたいたり、つぶしたりして加工する動的石器である。A. 自然のままの原礫を用いるもの。B. 加工され円形、楕円形を呈するもの。C. Bに平坦部敲打、凹みが加わるものに分けられる。

A（第135図1～4、第136図8、9） 楕円形の原礫を用いる。側辺部に敲打痕が認められる。3は平坦部にも敲打痕が認められる。第136図8は平坦部に敲打痕が認められる。9は軽い敲打痕が全面に認められる。

B（第135図7、第136図3、4） 円形、楕円形等に整形されているもの。7は下半を欠損する。左側部に敲打痕が集中する。第136図3は右半分欠損する。側辺部に敲打痕が認められる。4は円形にきれいに成形されている。

C（第135図5、6、第136図1、2、5～7） 円形、楕円形に成形し、平坦部中央に敲打による凹部を有するもの。第135図5、6、第136図1、2、6～7は、長楕円形状の成形、第136図5は円形に成形される。欠損は凹部中心から短軸方向に分離するものが多い。

石皿（第137図1～5、7、8、第138図1～5）

石材は安山岩、花崗岩、砂岩等より成る。

A（第137図2、3） 偏平で比較的密な材質のものを使用するもの。外周部、使用面とともに、フラットで裏面に凹みがないものが多い。

B（第137図1、7、8、第138図1、5）

荒い材質のものを使用し、使用面が皿状に凹むもの。裏面に凹みがある事が多い。第138図1は皿状のなめらかな使用面と裏面に凹みが集中する。他は破損品であり、若干彎曲した使用面を有する。

砥石（第137図6）

砂岩製。両面に使用痕が有り、中央部に溝状の使用痕を有する。

石錘（第138図6、7）

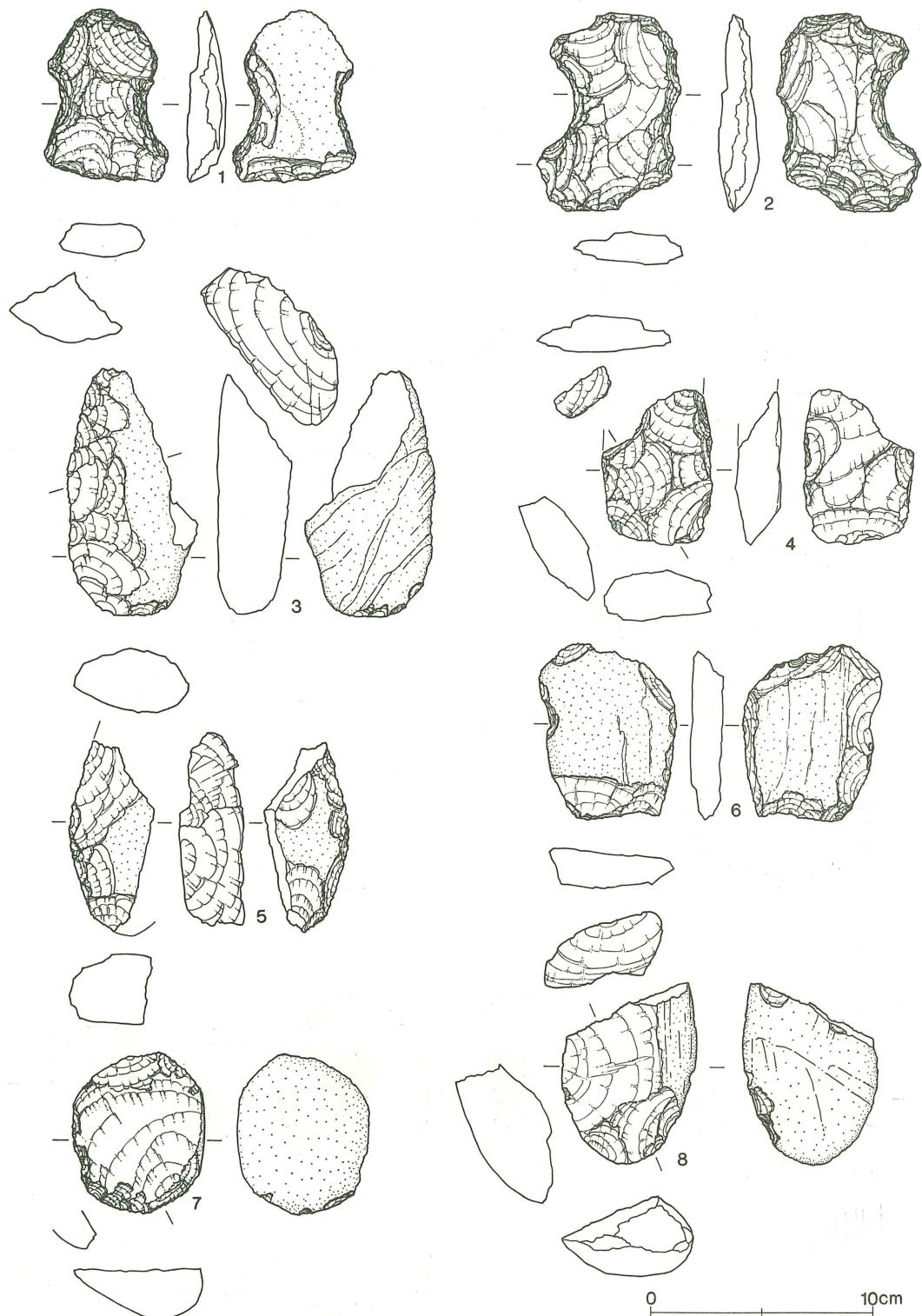
楕円形の原礫の長軸部両端に剝離を加え抉りを作出している。6が4.20g、7が3.10g。

石棒（第138図8～11）

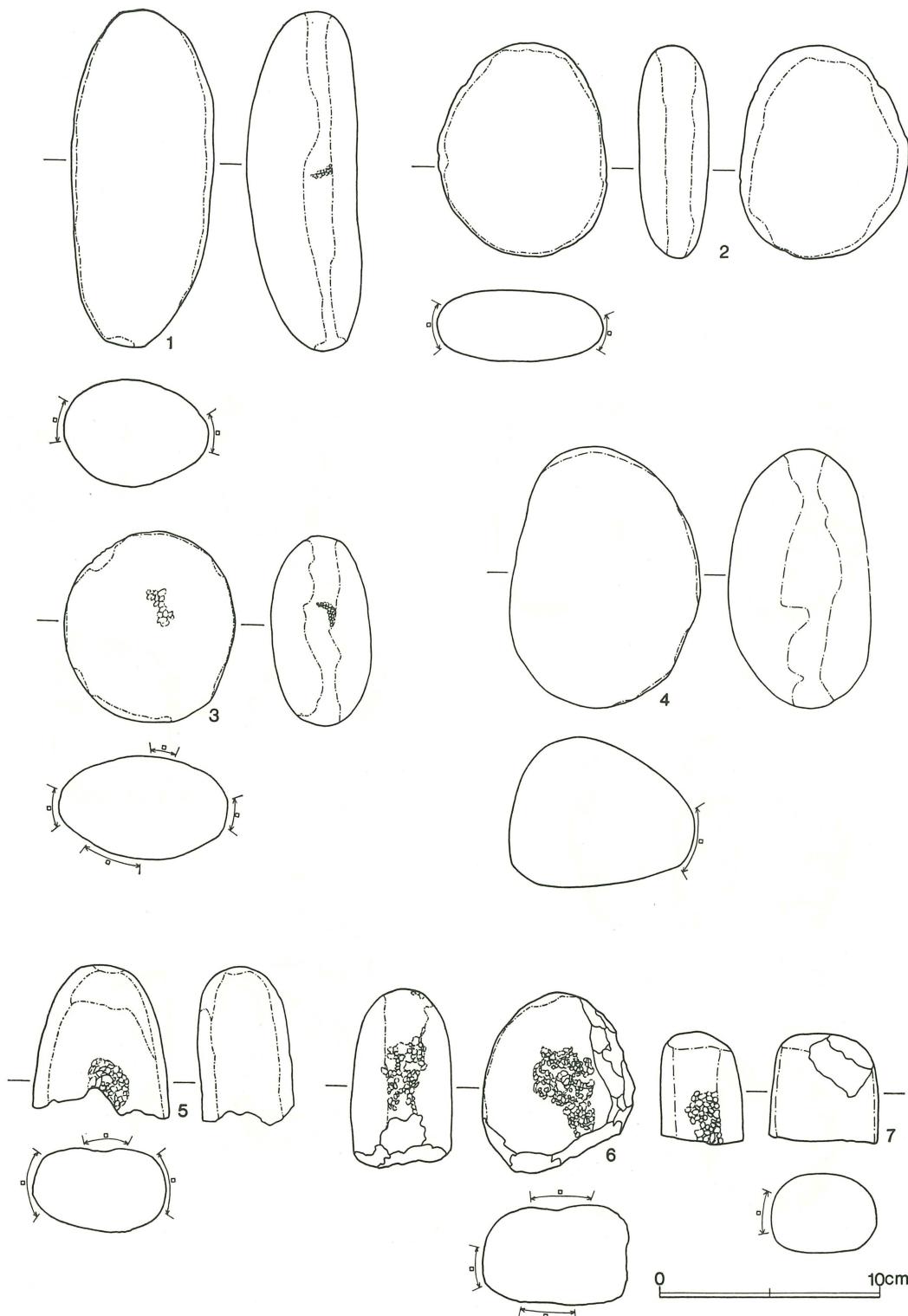
縁泥片岩製でいずれも両端が欠損する。両者ともそれほど入念ではないが敲打による整形後磨整形によって仕上げている。

円盤状石器（第138図12）

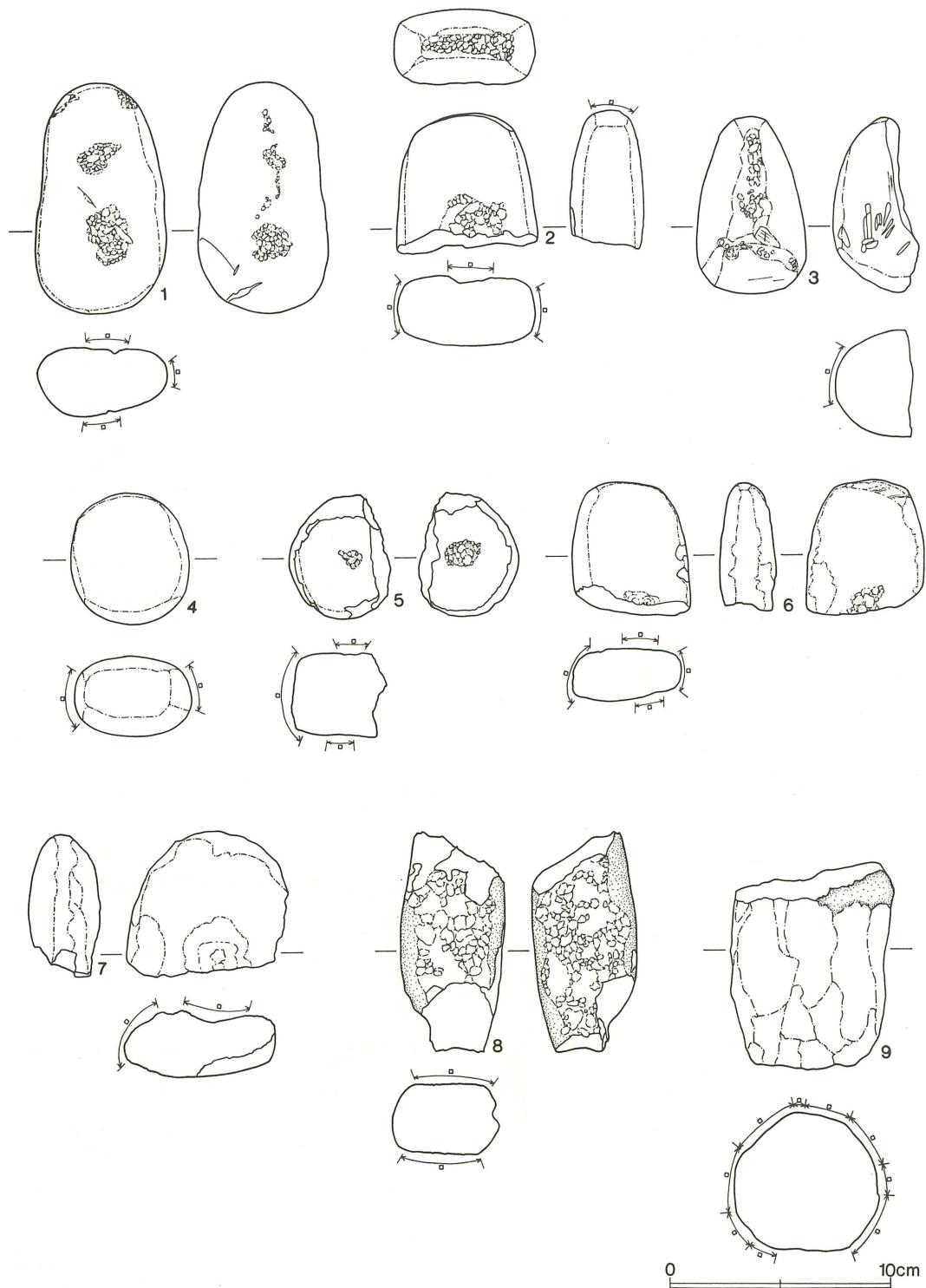
中央に貫通孔を有する偏平な円形の石製品である。突孔は表裏両面から行なわれる。磨整形される。第44号土壙出土。



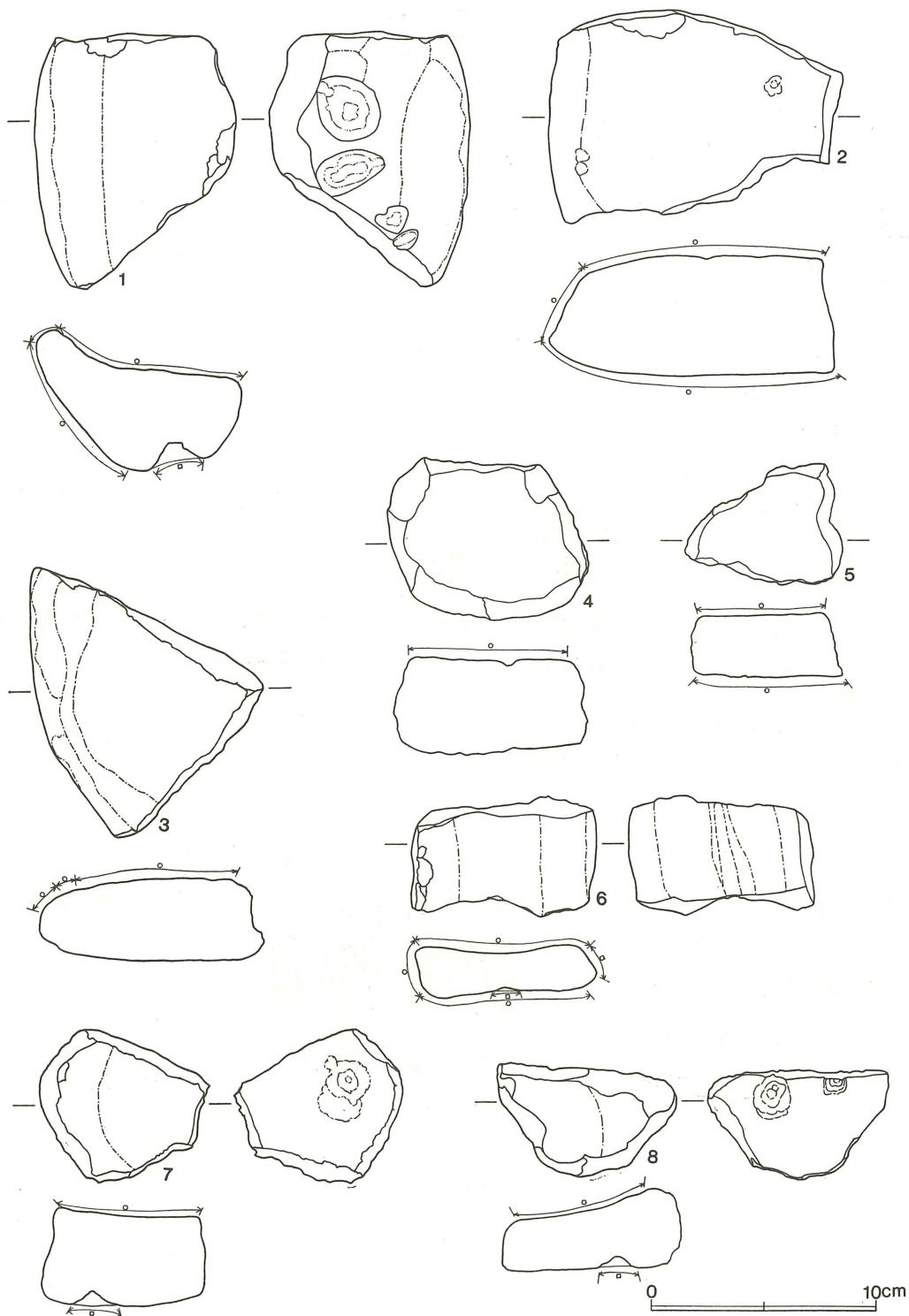
第134図 石器実測図 (10)



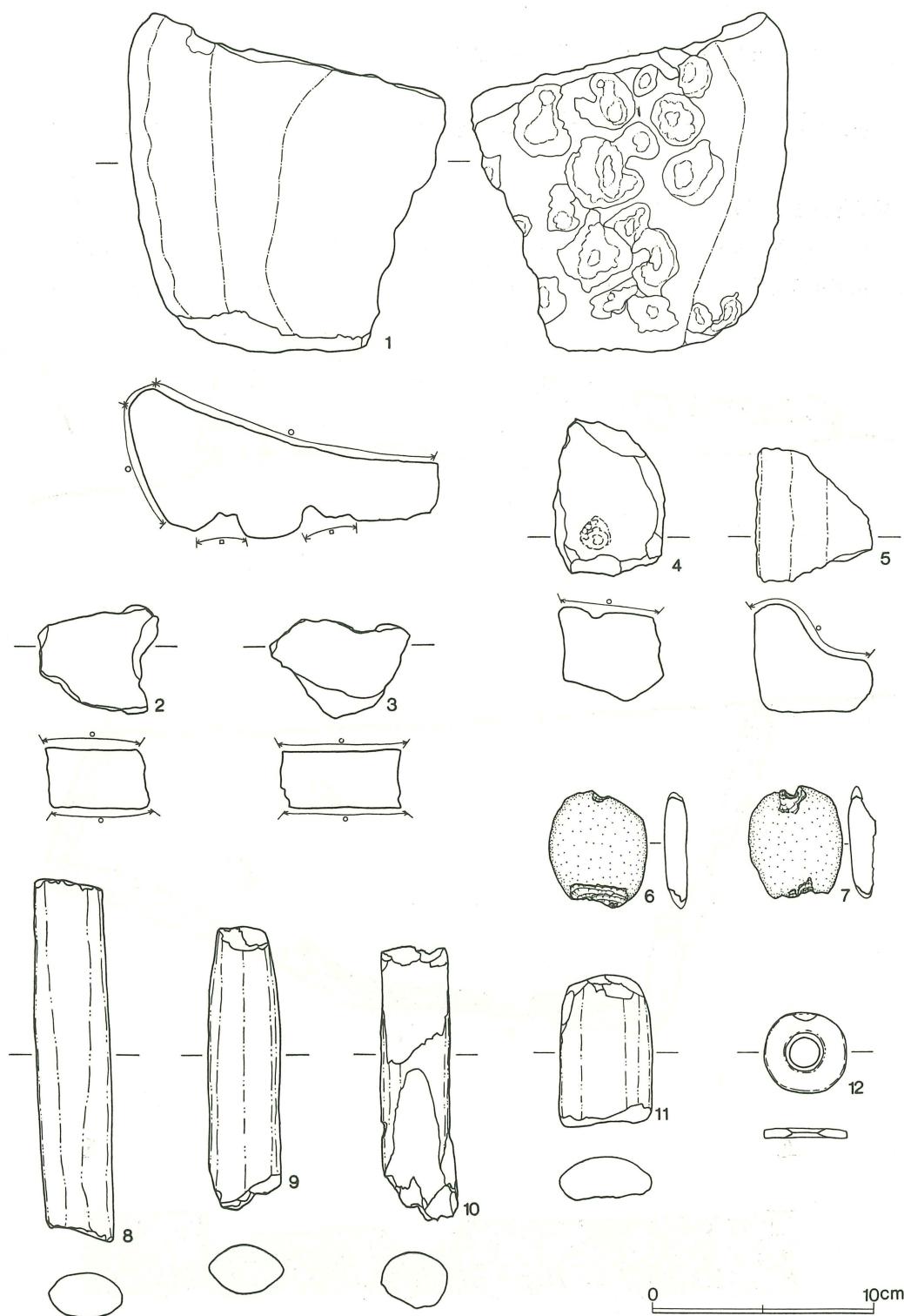
第135図 石器実測図 (11)



第136図 石器実測図 (12)



第137図 石器実測図 (13)



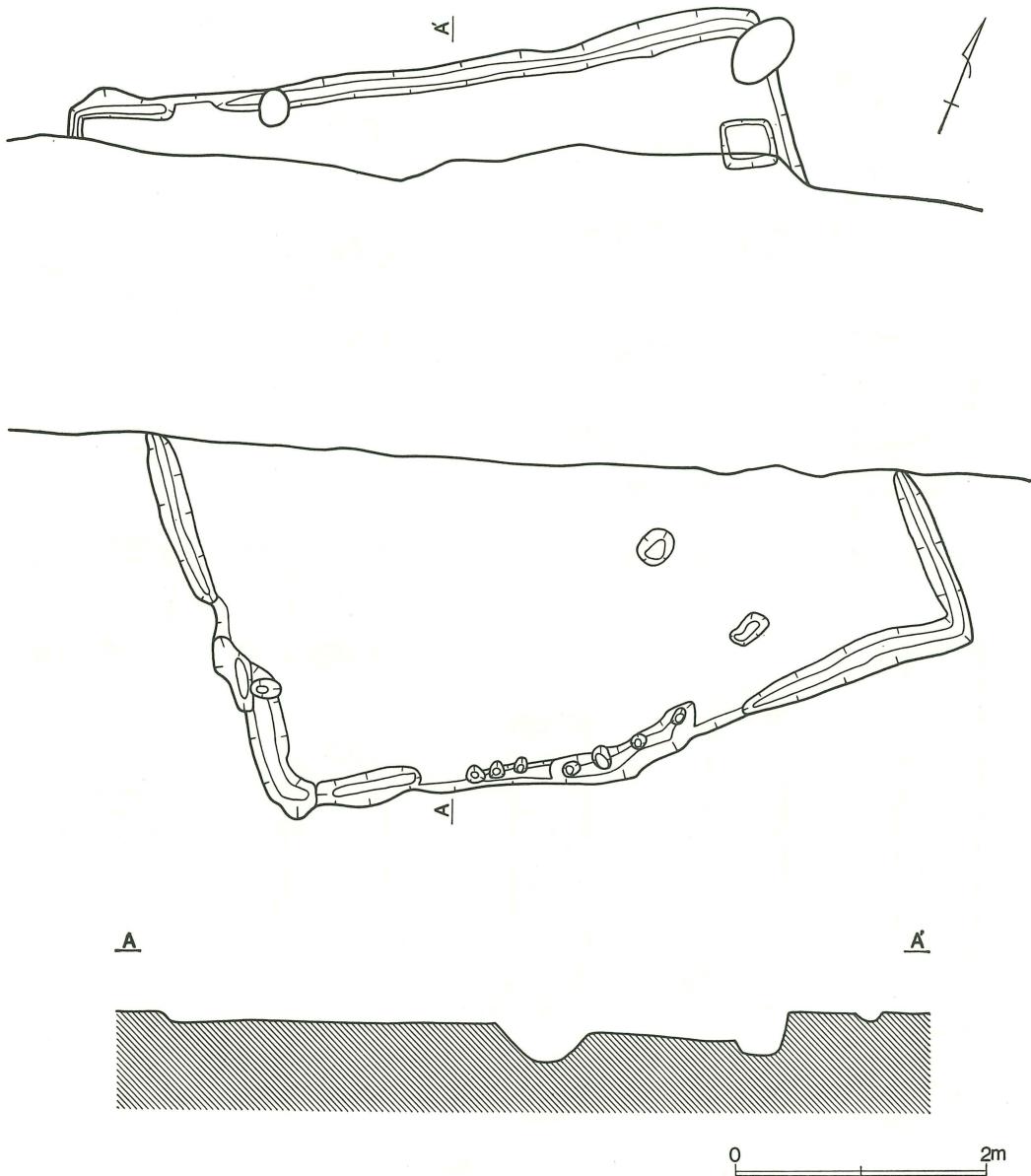
第138図 石器実測図(14)

3 古墳・歴史時代の遺構と遺物

久台遺跡からは、3基の住居跡・住居跡状遺構が検出された。遺物は皆無であり時期決定し得ない。

第9号住居跡（第139図）

12C—13C区状遺構に位置する。径—5.80m前後の方形を呈する。中央部を I・SD 1 に切られる。壁溝が全周する。床面は軟弱であり、柱穴は検出されなかった。遺物は皆無であり、時期は不



第139図 第9号住居跡

明である。

第17号住居跡（第140図～142図）

層位	色調	内容物
1	Hue 7.5 Y R 4/1 灰褐色	白色パミス
2	Hue 7.5 Y R 2/2 黒褐色	橙色スコリア
3	Hue 7.5 Y R 4/4 褐色	ロームブロック、カーボン粒子
4	Hue 7.5 Y R 5/4 鈍い褐色	ロームブロック
5	Hue 7.5 Y R 4/4 褐色	焼土粒子

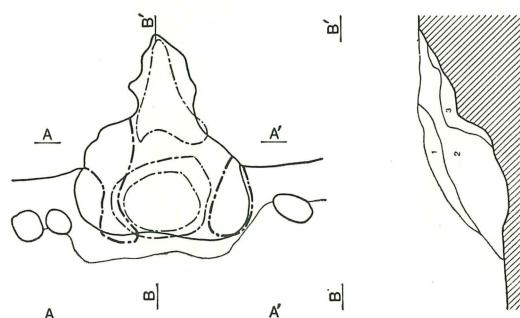
28A—28B区に位置する。西側は、調査区外である。長径—2.85m、短径—2.70mの方形プランを呈する。掘り込みは、0.40m前後と深く、覆土は黒褐色系で、床面は固く南側に焼土の薄い堆積が認められた。柱穴は、中央部に一本だけ検出された他、未検出であった。壁溝は、北西部を除いて全周し、比較的密に壁孔が配される。カマドは北西壁中央に位置する。煙道部が壁外に大きく張り出す。煙道部と燃焼部に段差を有し、燃焼部は、橢円形状のピットを有している。ソデは、わずかに残存している。

遺物は、鉄製鎌を除いてほとんど出土していない。鎌は、北側壁下で検出された。着柄部を欠くが遺存状態は良好、全長—12.0cm、幅—3cm前後で先端部に従って幅を減じる。全体がわずかに彎曲しており背面は平坦である。着柄部に近い部分で若干彎曲している。

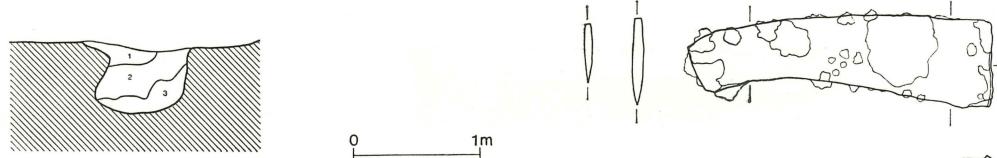
第28号住居跡状遺構（第142図）

層位	色調	内容物
1	Hue 7.5 Y R 4/1 灰褐色	白色パミス
2	Hue 7.5 Y R 2/2 黒褐色	橙色スコリア
3	Hue 7.5 Y R 4/3 褐色	ロームブロック

27A・B—28A・B区に位置する。西側は調査区外である。規模は不明であるが、短径—2.20m



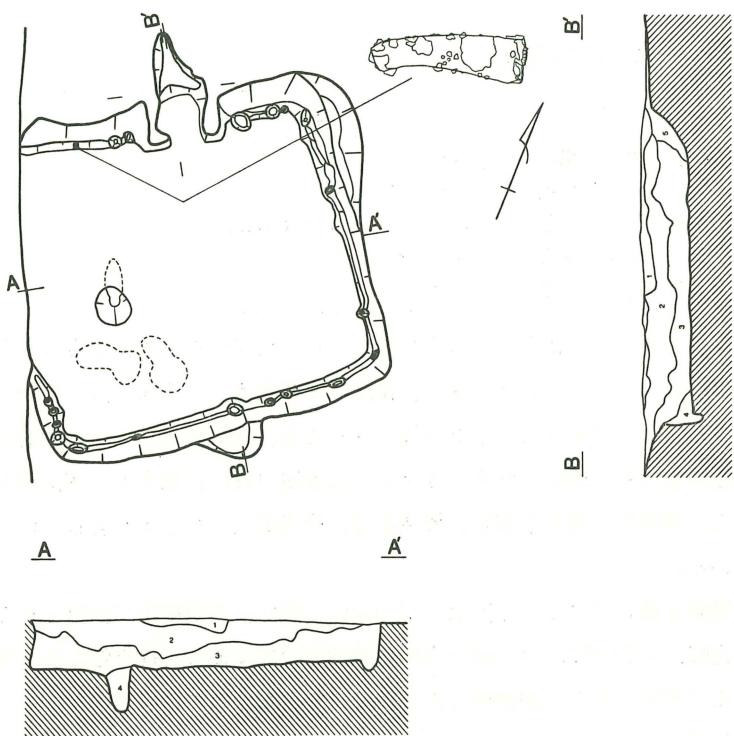
前後の長方形状のプランを呈するものと思われる。掘り込みは、0.25m前後、覆土は黒褐色系で床面は軟弱である。柱穴、壁溝等は検出されなかった。第17号住居跡と同様、遺物はほとんど出土していない。



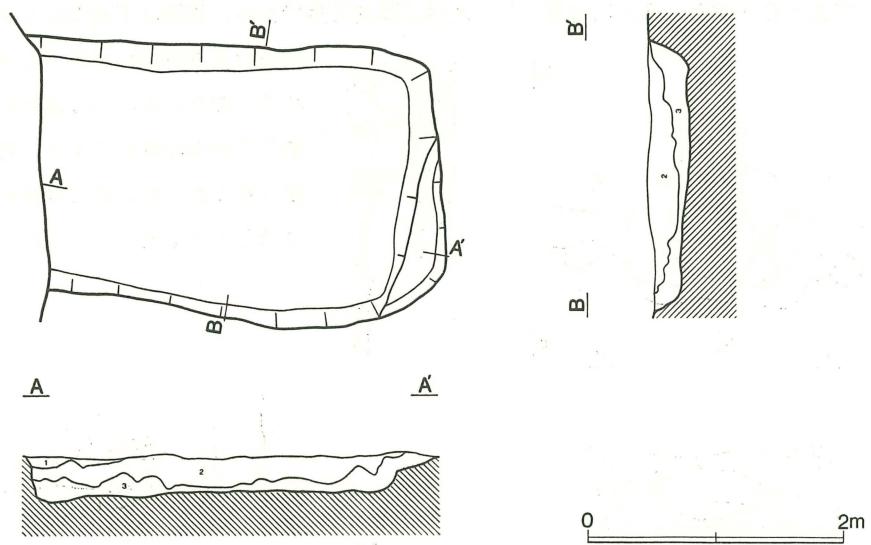
第140図 第17号住居跡カマド

第141図 第17号住居出土鉄製品実測図

第17号住居跡



第28号住居跡状遺構



第142図 第17号住居跡、第28号住居跡状遺構

4 近世期の遺構

4-1 近世期の遺構

近世に関する遺構は、Ⅰ区～Ⅲ区まで、Ⅱ区の北側の一部を除いて全面に分布している。検出された遺構は、溝(S D)、建築跡(S B)、井戸(S E)、土壌・地下式壙(S K)、性格不明土壙(S X)、柵列状遺構(S A)であり、いずれも、ロームブロックを含む黒色土を覆土としており、他の時期の遺構とは明瞭に分別される。全面に分布するS Xについては、遺物をほとんど含まないので子細は省略し、各遺構は、最初に区の名称であるⅠ、Ⅱ、Ⅲを付して説明する。

柵列状遺構

I・S A 1 (第143図、第168図11)

8C-12B区に位置する。径-0.50m前後のピットがほぼ南北方向に連なっている。覆土は、ロームブロックを含む黒色系でかなりしまりのないものである。Ⅱ区には確認されなかった事から北側で屈曲するものと思われる。各ピットは、12.00m前後連続した後、若干の空白部を設けている。遺物はほとんど出土していないが、第168図11の板石塔婆片が出土している。

溝

I・S D 1 (第143図)

13B-13D区に位置する。東側は道路下に、西側は調査区外である。方向は、N-22°-E、現長13.00m、幅-2.40mを測る。深さ-0.45mである。断面が浅い「U」字状の溝が2本複合している。遺物は少なく陶磁器細片が少量出土しているが時期不明である。Ⅱ・S D 1と略平行することから関連性が考えられる。

II・S D 1 (第144図、第145図)

15A-15D区に位置し、N-22°-E方向に走る。東西両端とも調査区外に延びている。現長-27.00m、幅-4.70m前後で西側で細くなる。深さ-0.70m前後である。断面形状は、浅い「U」字状を呈する2～3本の溝で形成されている。遺物は、比較的多く出土しており、内耳土器、擂鉢、陶磁器、砥石等である。染付茶碗は、近世末期の大量生産品が多く認められ、時期は、近世末期と想定される。

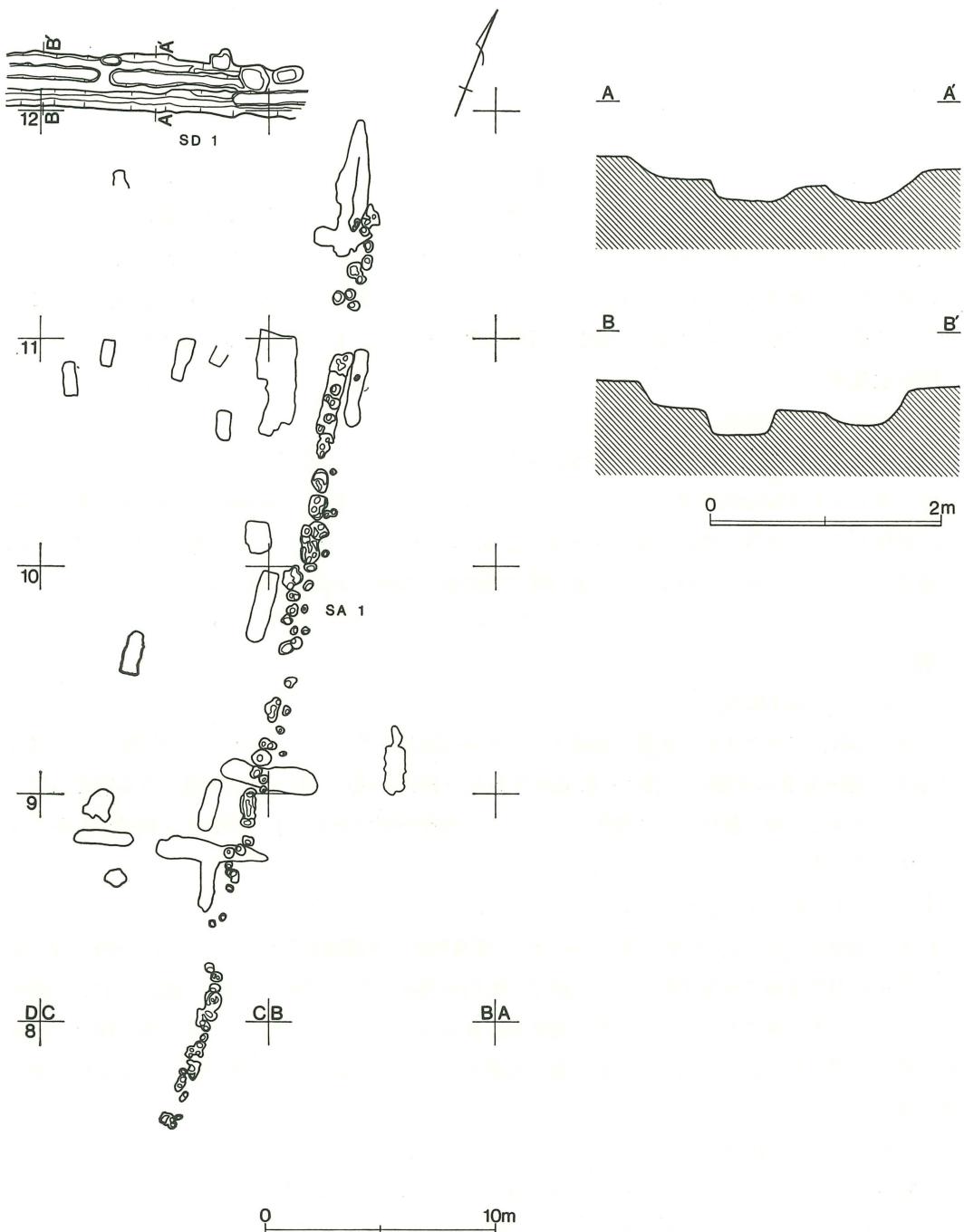
II・S D 2 (第144図)

14B-14C区に位置する。長さ-9.40m、幅-約1.00mで、略東西方向に延びている。掘り込みは浅く「U」字状を呈する。遺物等は出土していないので性格、時期とも不明である。

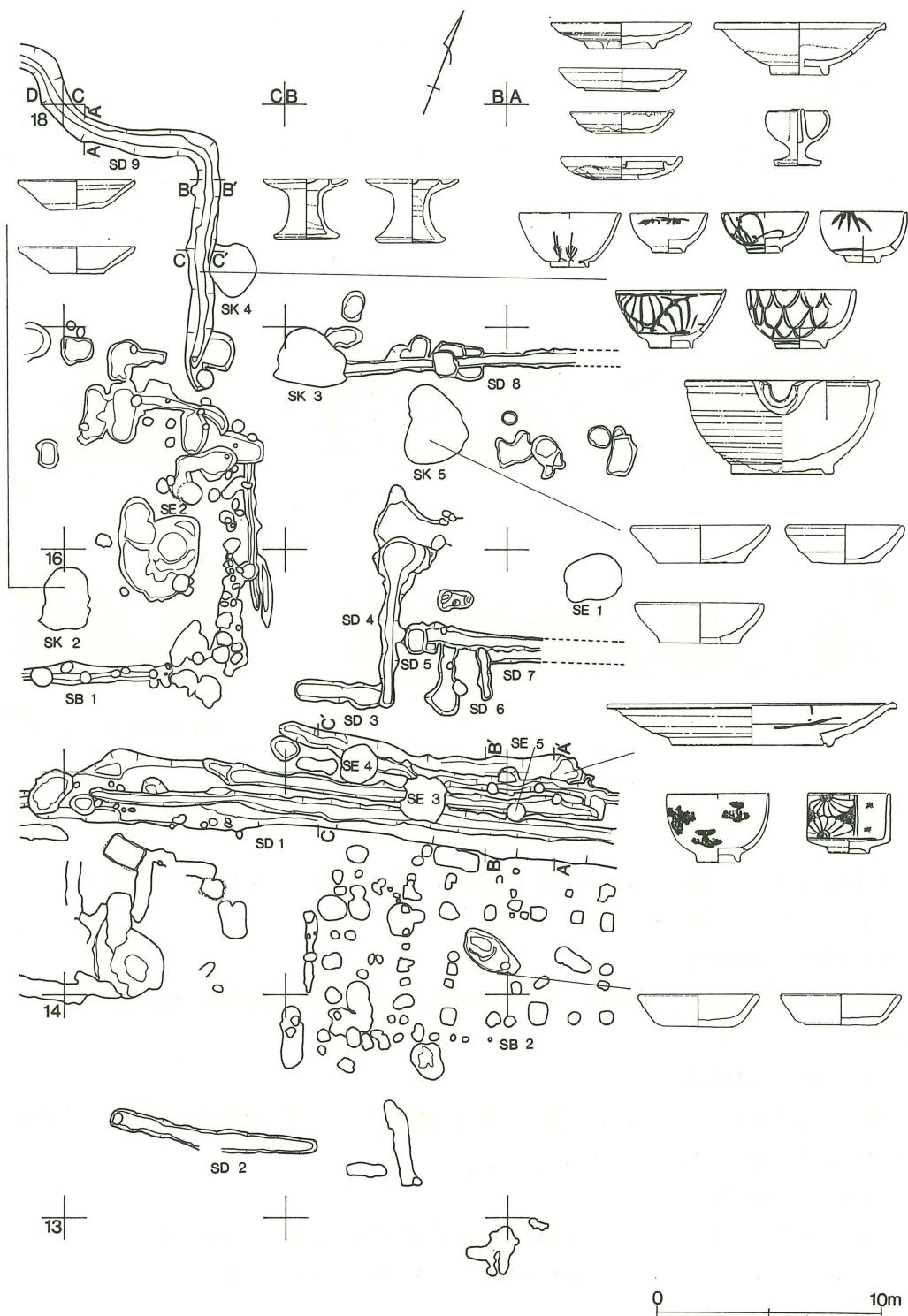
II・S D 3 (第144図)

16B区に位置する。長さ-3.80m、幅-1.00m前後で略東西方向に延び、Ⅱ・S D 6に直角に交叉する。掘り込みは浅く、遺物は出土していない。

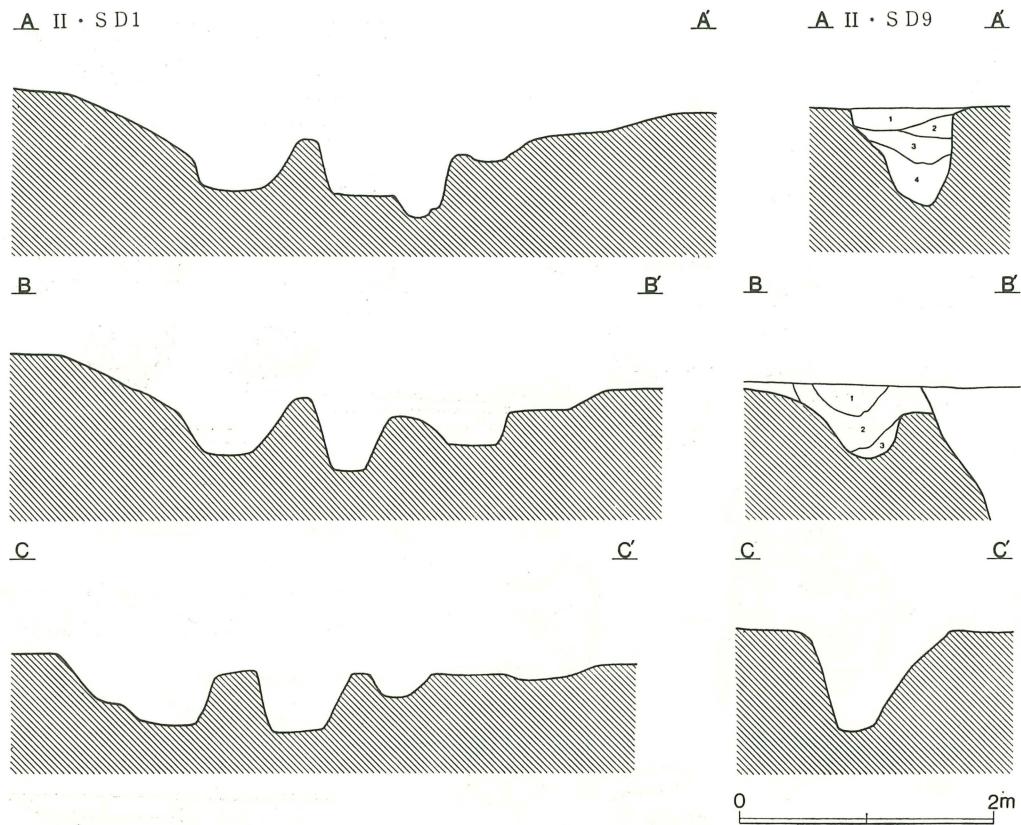
II・S D 4 (第144図)



第143図 I 区近世遺構図



第144図 II区近世遺構図



第145図 II・SD 1、II・SD 9断面図

16B区に位置する。長さ—3.10m、幅—0.80mで、II・SD 7に直交する。「U」字状を呈する浅い掘り込みである。遺物等は出土していない。

II・SD 5 (第144図)

16B区に位置する。長さ—2.40m、幅—0.60mで、II・SD 7に直交する。浅い掘り込みであり遺物等は出土していない。

II・SD 6 (第144図)

16B区に位置する。長さ—7.70m、幅—0.80mで略南北方向に延び北側でかなり膨らむ。断面長方形状に垂直に掘り込まれる。遺物等は出土していない。

II・SD 7 (第144図)

16A—16B区に位置する。現長—6.10m、幅—0.80m前後で、略東西方向。東へさらに延びるものと思われる。掘り込みは浅く、断面長方形状に垂直に掘り込まれる。遺物は出土していない。

II・SD 8 (第144図)

17A—17B区に位置する。現長—10.30m、幅—0.60mで、略東西方向、東へさらに延びる。掘り込みは浅く、断面長方形状に垂直に掘り込まれる。遺物は出土していない。

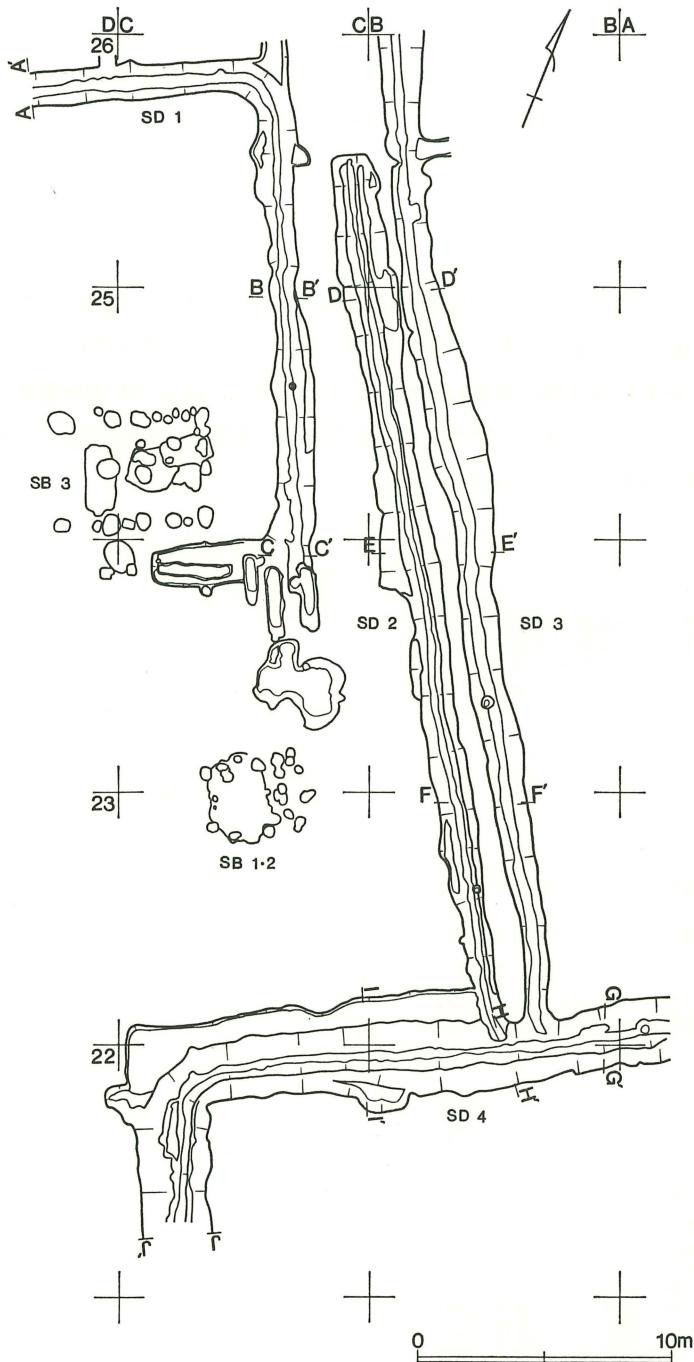
Ⅱ・SD 9 (第144図、
第145図)

17C—18C、19D区に位置する。17C区から略南北方向に延び、クランク状に屈曲して東西方向に延びるものと思われる、幅一約1.00mであり、深さ—0.80m前後で断面「V」字葉研状に掘り込まれる。遺物は、かなり多量に出土しており、内耳土器、染付、陶器、片口鉢、皿、燈明皿、等が出土している。時期的には2時期の遺物である。全体としては、近世末期と思われる染付茶碗の時期と思われる。

Ⅲ・SD 1 (第146図、
第147図)

24C、25C、26C区に位置する。24C区から北方向に延び26C区で西方向に90度屈曲する。幅一1.40m前後、深さ—0.40mで「U」字状の掘り込みを有し、南側に従って浅くなる。Ⅲ・SB 3を開むように位置しており、建築跡との関連が想定される。遺物は陶磁器片が少量出土しているが時期決定資料はない。

Ⅲ・SD 2 (第146図、
第147図)



第146図 III区近世遺構図

23A、24A、25A、26B区に位置する。26B C区から南下して、Ⅲ・SD 4に結合する。長さ一35.50m、幅一1.50m前後、深さ一0.50mの規模を有する。断面形状は、浅く掘り込まれ、中央部で「U」字状に深くなる。遺物は、陶磁器細片が出土しているが、時期不明である。

Ⅲ・SD 3 (第146図、第147図)

23C—26C区に位置する。26C区から南下してⅢ・SD 4区に交わる。北側は未調査であり、さらに延びるものと思われる。現長—50.00m、幅—1.00m~2.00mを測る。深さ—0.35m~0.50mで「U」字状の掘り込みを有する。大略Ⅲ・SD 2と平行に走る。遺物は、陶磁器細片が出土しているが、時期不明である。

Ⅲ・SD 4 (第146図、第147図)

22A、23A~22C・22C区に位置する。23A区から西側に走り、22C区で南側に直角に屈曲する。道路部分が未調査であるが、21C区には検出されていないので、道路下でさらに直角方向に屈曲して、クランク状を呈するものと思われる。幅—最大4.00m、最少2.00mで、深さ—0.90m前後である。断面形状は、ゆるく掘り込まれ、中央部が一段深く掘り込まれる。遺物は、陶磁器細片、砥石等が出土している。明確な時期決定資料とはなり得ない。

Ⅱ・SD 9

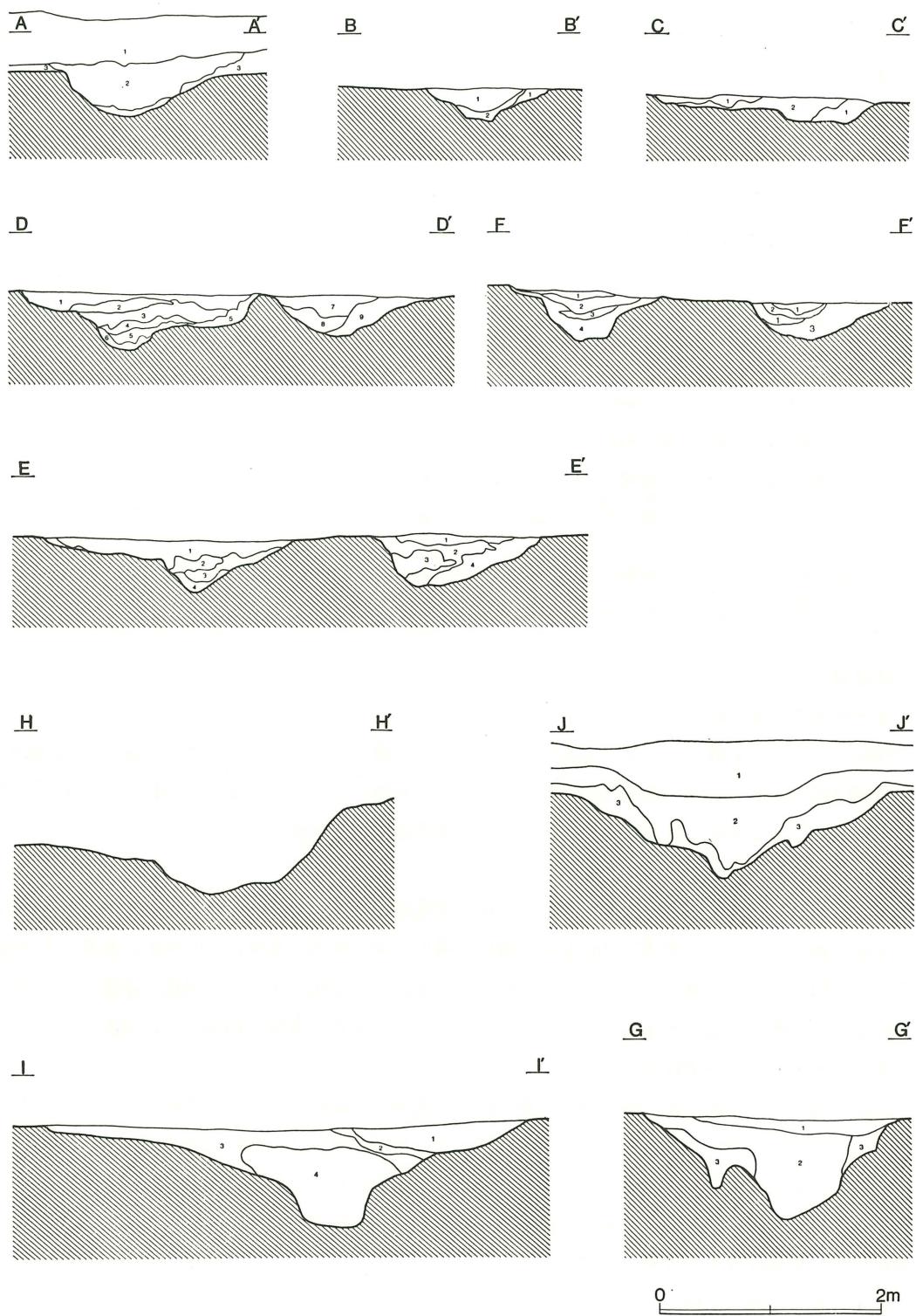
層位	色 調	内 容 物
1	Hue 7.5 Y R 3/3	暗褐色 ローム粒子(少)
2	Hue 7.5 Y R 3/3	暗褐色 ローム粒子(多)
3	Hue 7.5 Y R 3/2	黒褐色 ローム粒子(多)
4	Hue 7.5 Y R 3/2	黒褐色 ローム粒子(少)

Ⅲ・SD 1

層位	色 調	内 容 物
A-A' 1	Hue 7.5 Y R 4/2	褐色 ロームブロック(少)
2	Hue 7.5 Y R 4/6	褐色
3	Hue 7.5 Y R 5/6	明褐色 ロームブロック(多)
B-B' 1	Hue 7.5 Y R 5/6	明褐色 ロームブロック(多)
2	Hue 7.5 Y R 4/3	褐色
C-C' 1	Hue 7.5 Y R 4/3	褐色 ロームブロック(少)
2	Hue 7.5 Y R 5/6	明褐色 ロームブロック(極多)

Ⅲ・SD 2・3

層位	色 調	内 容 物
D-D' 1	Hue 7.5 Y R 7/6	橙色 ロームブロック(多)
2	Hue 7.5 Y R 4/4	褐色
3	Hue 7.5 Y R 5/3	明褐色
4	Hue 7.5 Y R 3/2	黒褐色
5	Hue 7.5 Y R 5/3	明褐色
6	Hue 7.5 Y R 4/4	褐色
7	Hue 7.5 Y R 4/4	褐色 橙色ローム粒子(多)
8	Hue 7.5 Y R 3/3	暗褐色 橙色ローム粒子(少)
9	Hue 7.5 Y R 4/4	褐色 橙色ローム粒子(多)
E-E' 1	Hue 7.5 Y R 5/6	明褐色 ロームブロック(多)
2	Hue 7.5 Y R 3/3	暗褐色
号 3	Hue 7.5 Y R 4/6	褐色 ロームブロック(多)
溝 4	Hue 7.5 Y R 4/3	褐色



第147図 III・SD1~III・SD4断面図

E-E' 1 3 2 号 3 溝 4	Hue 7.5 Y R 4/2 Hue 7.5 Y R 3/3 Hue 7.5 Y R 5/6 Hue 7.5 Y R 4/3	褐色 暗褐色 明褐色 褐色	白色パミス ロームブロック（多）、橙色ローム粒子（少） ロームブロック（多） 橙色ローム粒子（少）
F-F' 1 2 2 号 3 溝 4	Hue 7.5 Y R 4/2 Hue 7.5 Y R 4/4 Hue 7.5 Y R 3/2 Hue 7.5 Y R 4/3	灰褐色 褐色 黒褐色 褐色	白色パミス（少）、火山灰層 ロームブロック（多） ロームブロック（少）
F-F' 1 3 2 号 3	Hue 7.5 Y R 2/2 Hue 7.5 Y R 4/3 Hue 7.5 Y R 5/4	黒褐色 褐色 鈍い褐色	橙色ローム粒子（少） 橙色ローム粒子（少） 橙色ローム粒子（少）

III・SD 4

層位	色調	内容物
J-J' 1 2 3	Hue 7.5 Y R 3/3 Hue 7.5 Y R 3/3 Hue 7.5 Y R 3/2鈍い褐色	
I-I' 1 2 3 4	Hue 7.5 Y R 3/3 Hue 7.5 Y R 5/6 Hue 7.5 Y R 4/6 Hue 7.5 Y R 3/2	暗褐色 明褐色 褐色 黒褐色
G-G' 1 2 3	Hue 7.5 Y R 5/6 Hue 7.5 Y R 3/2 Hue 7.5 Y R 4/6	明褐色 黒褐色 褐色

建築跡

II・SB 1（第148図）

16C、17C区に位置する。溝、溝底にある小柱穴より構成され、略方形に廻る。南北—12.60mで西側は調査区外である。溝の外側が若干削平され、溝内がわずかに高まる。小柱穴は、溝底、及び溝に沿って、多数配されている。とりあえず消極的意味で建築跡としておきたい。

II・SB 2（第149図）

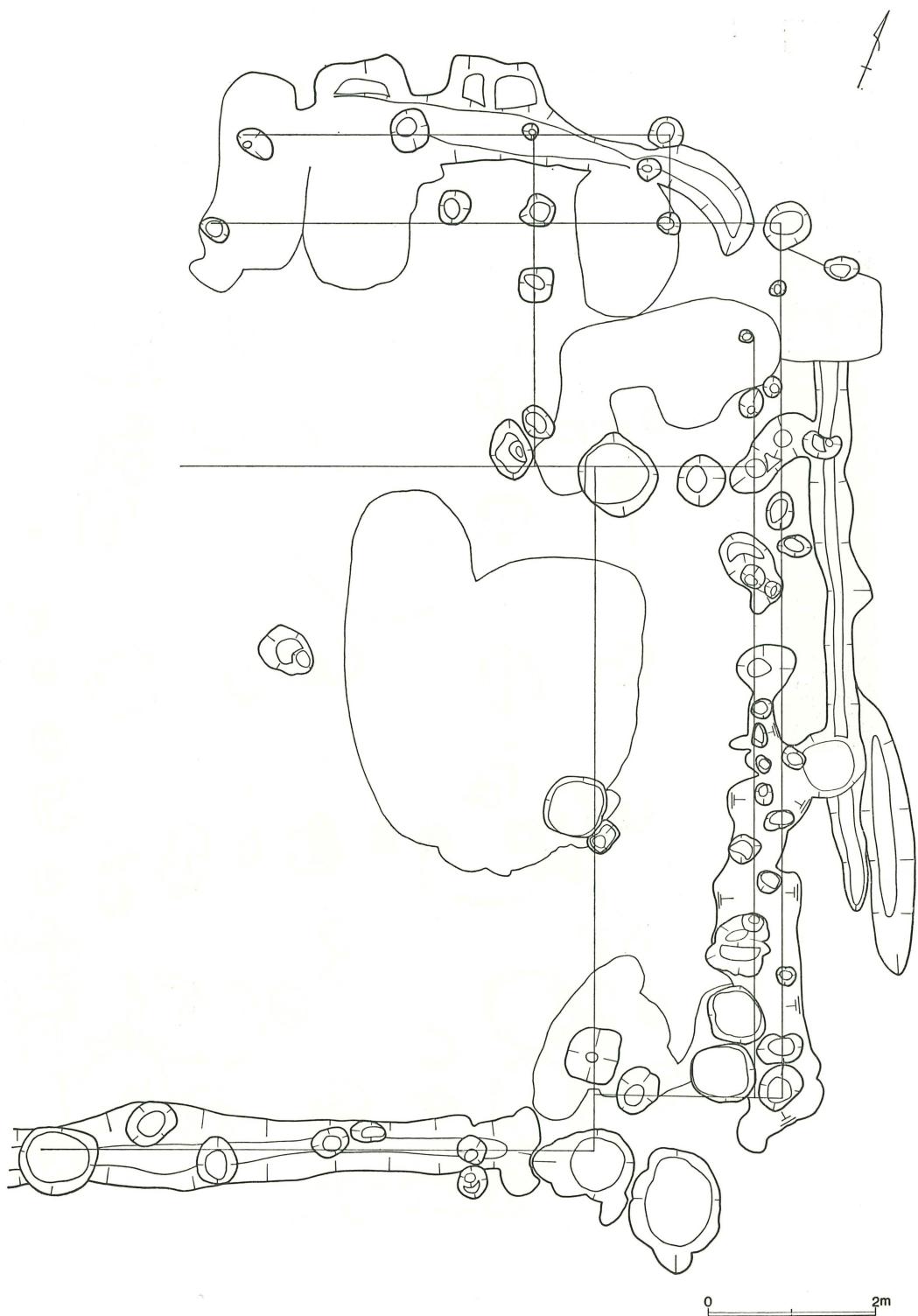
14A、14B、15A、15B区に位置する掘立柱の建築跡である。周辺部が削平され建築跡部分が高くなる。南北—7.00m、東西—14.00m前後の右勝手の家である。東側にかなり広い台所があり中央部に任切り、北側に勝手、みそべや風の区画がある。中央北側が板の間、西側に座敷が2室有る。入口は中央南側である。勝手がかなり広くしっかりしている点、東側に増築された可能性が強い。

III・SB 1・2（第150図）

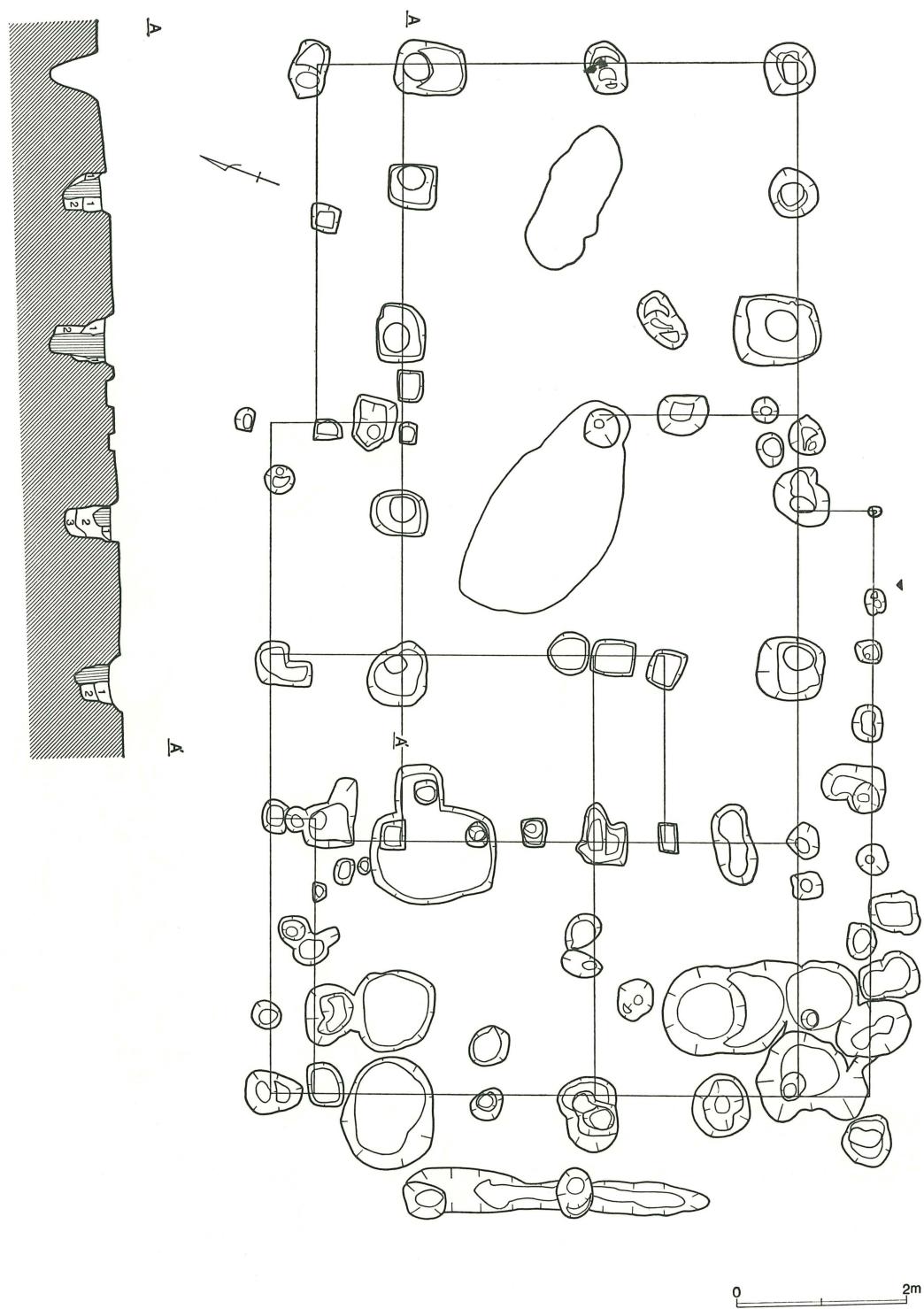
23C、24C区に位置する。建て替えと思われる。長径—3.00m、短径—2.20mの長方形状の浅い掘り込みを有し、埋めもどした後柱穴を掘り込んでいる。SB 1は、東西—約3.00m、南北—約2.10mを測り、東西側1間、南北側2間の柱穴である。北東側に張り出しがある。SB 2は、東西—約2.70m、南北—約2.75mで、東西側2間、南北側1間で、北西側で若干の張り出しを有するものと思われる。遺物はほとんど出土していない。

III・SB 3（第151図）

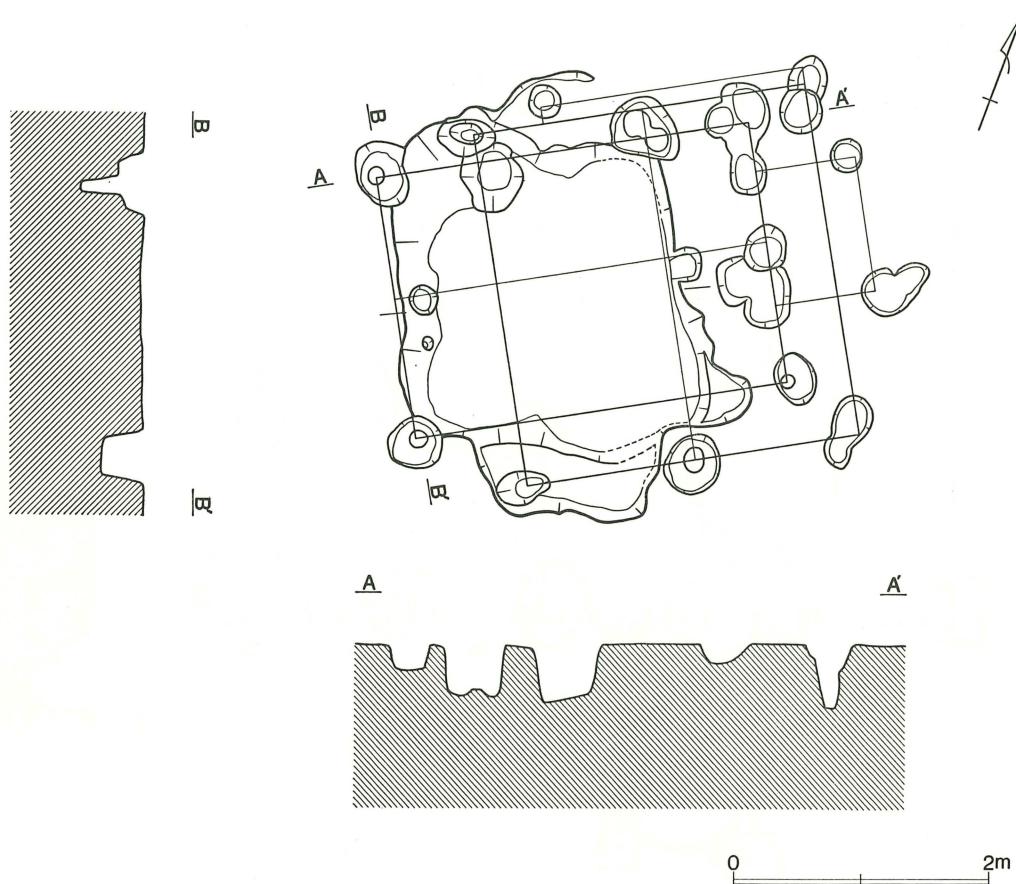
25C、25D区に位置する掘立柱の建築跡である。東西—5.70m、南北—4.20mを測る右勝手の家である。東側に台所、東側中央部に「あがりはな」、北側に勝手が配される。西側に座敷が一室有



第148図 II · S B 1



第149図 II・S B 2



第150図 III・SB1・2

る。座敷南側に用途不明の小張り出しが付する。全体に小型である。

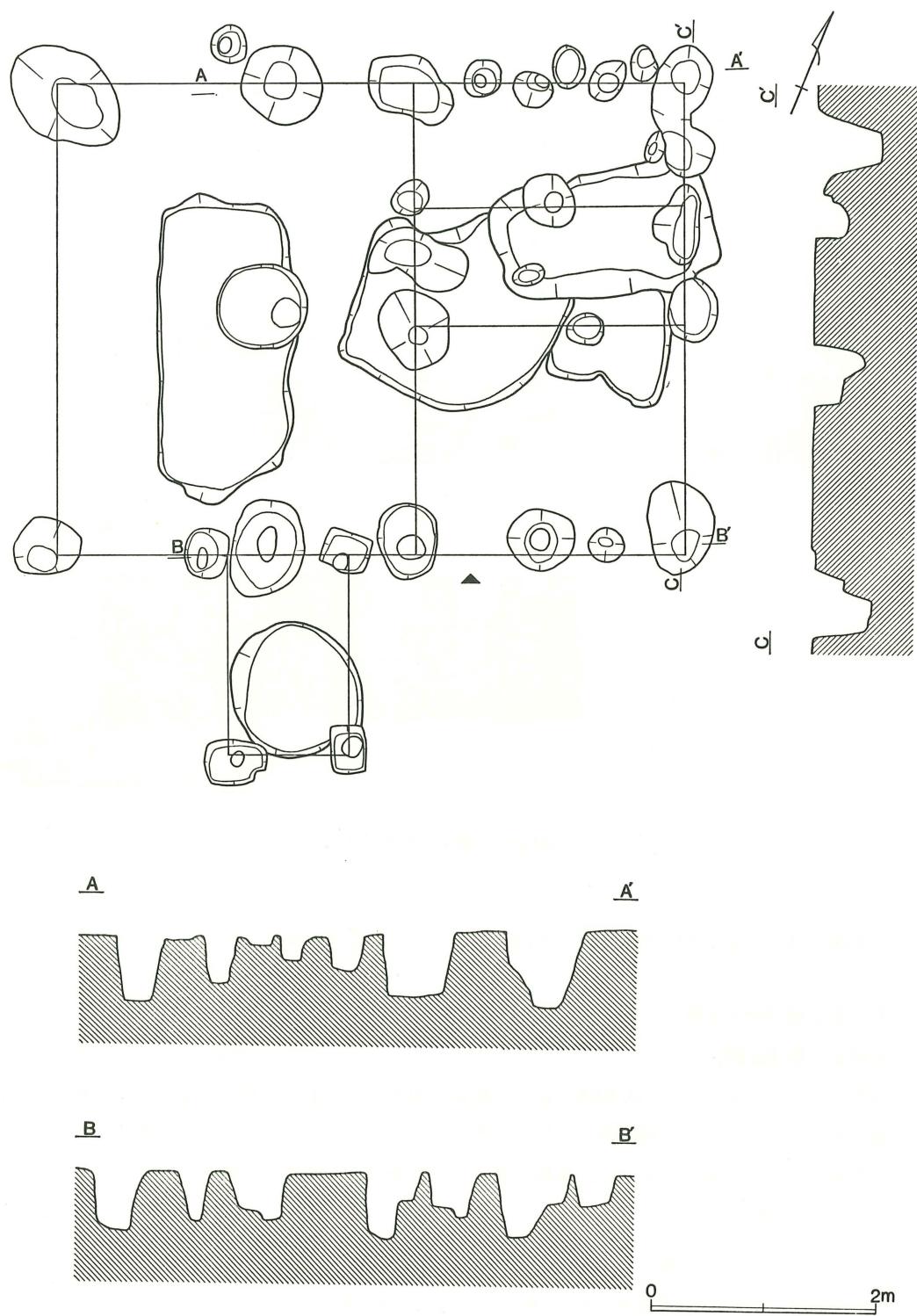
1—5 土壙（地下式壙）

S K 1 (第152図)

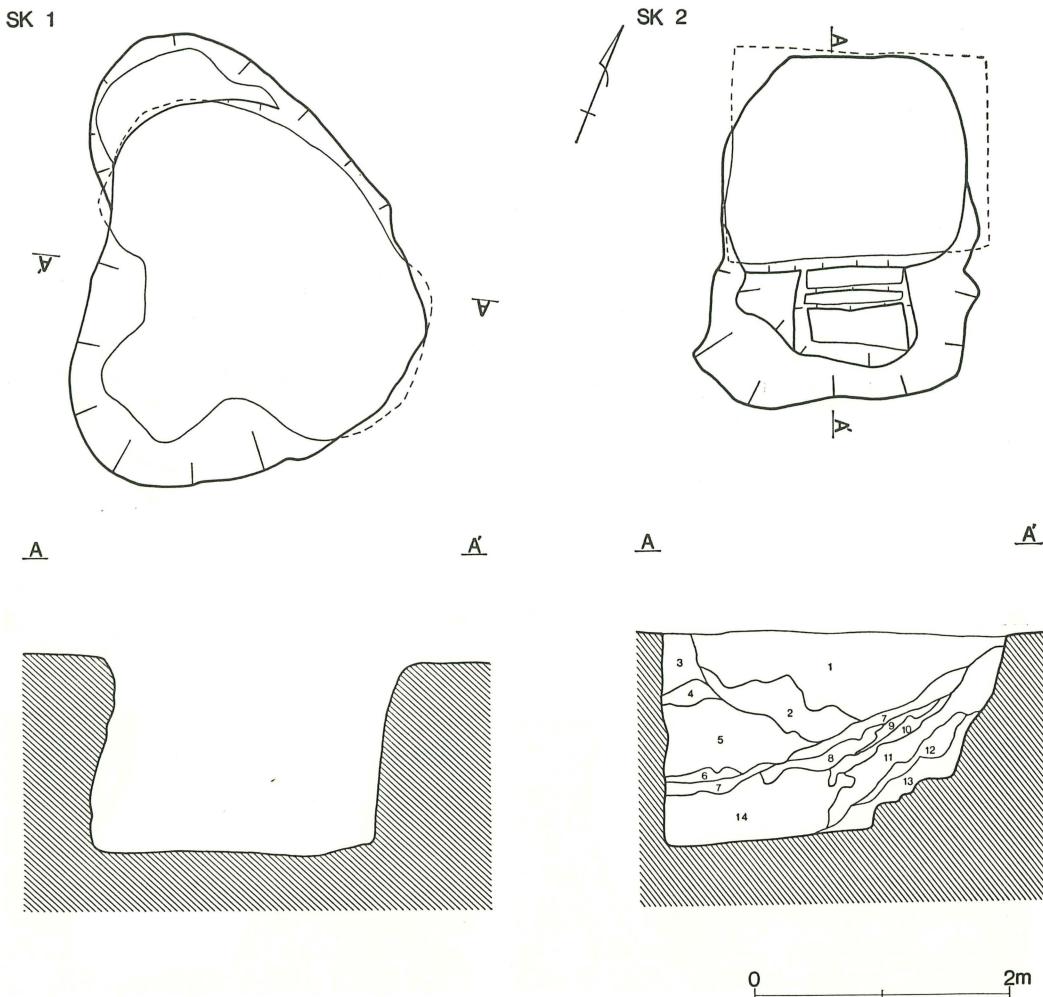
17B区に位置する。長径—3.40m、短径—3.00m前後の楕円形を呈する。深さ—1.57mであり、底面はフラットである。南側に張り出し部が有り入口部分と思われる。東側、西側でオーバーハングするが、他の地下式壙に比して、崩壊が著しい。遺物は、土師質土器皿が出土している。

S K 2 (第152図)

層位	色調	内容物
1	Hue 7.5 Y R 3/2 黒褐色	ローム粒子（少）、カーボン粒子（少）
2	Hue 7.5 Y R 3/2 黒褐色	ローム粒子（少）
3	Hue 7.5 Y R 3/4 暗褐色	ローム粒子（少）
4	Hue 7.5 Y R 4/4 褐色	ローム粒子（少）



第151図 III・SB3

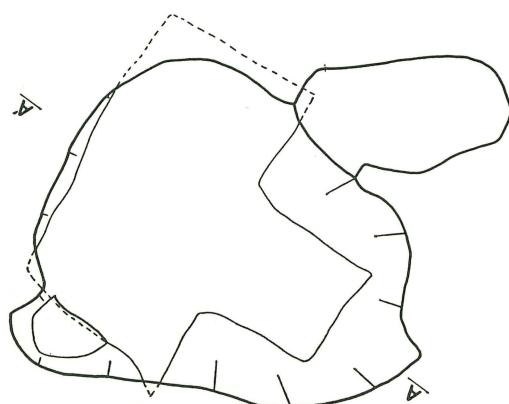


第152図 SK 1、SK 2

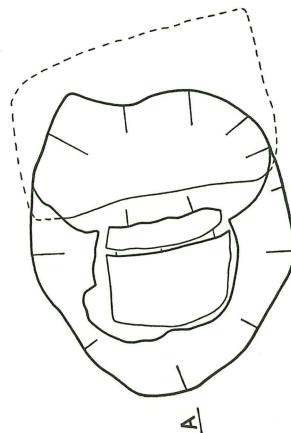
5	Hue 7.5 Y R 4/4	褐 色	ローム粒子 (少)
6	Hue 7.5 Y R 4/4	褐 色	ローム粒子 (多)
7	Hue 7.5 Y R 3/2	黒褐色	ローム粒子 (少)
8	Hue 7.5 Y R 3/3	暗褐色	ローム粒子 (少)
9	Hue 7.5 Y R 3/2	黒褐色	ローム粒子 (少)
10	Hue 7.5 Y R 3/3	暗褐色	ローム粒子 (少)
11	Hue 7.5 Y R 4/3	褐 色	ローム粒子 (少)
12	Hue 7.5 Y R 4/4	褐 色	ローム粒子 (少)
13	Hue 7.5 Y R 3/2	黒褐色	ローム粒子 (少)
14	Hue 7.5 Y R 3/4	暗褐色	ロームブロック

16C、16D区に位置する。長径一約2.70m、短径一2.10m、深さ一1.70mを測る。南側に入口部が有り、階段状の掘り込みを有する。底面はフラットで、全体にオーバーハングし、整然とした長

SK 3



SK 4

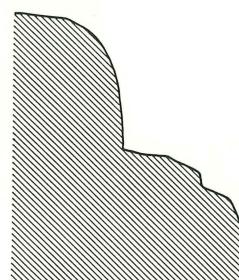
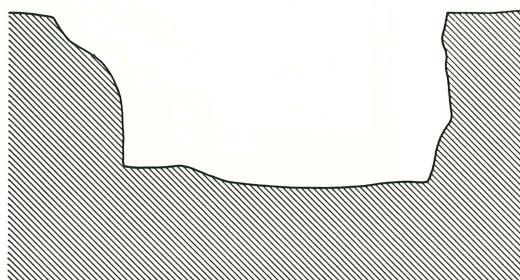


A

A'

A

A



第153図 SK 3、SK 4

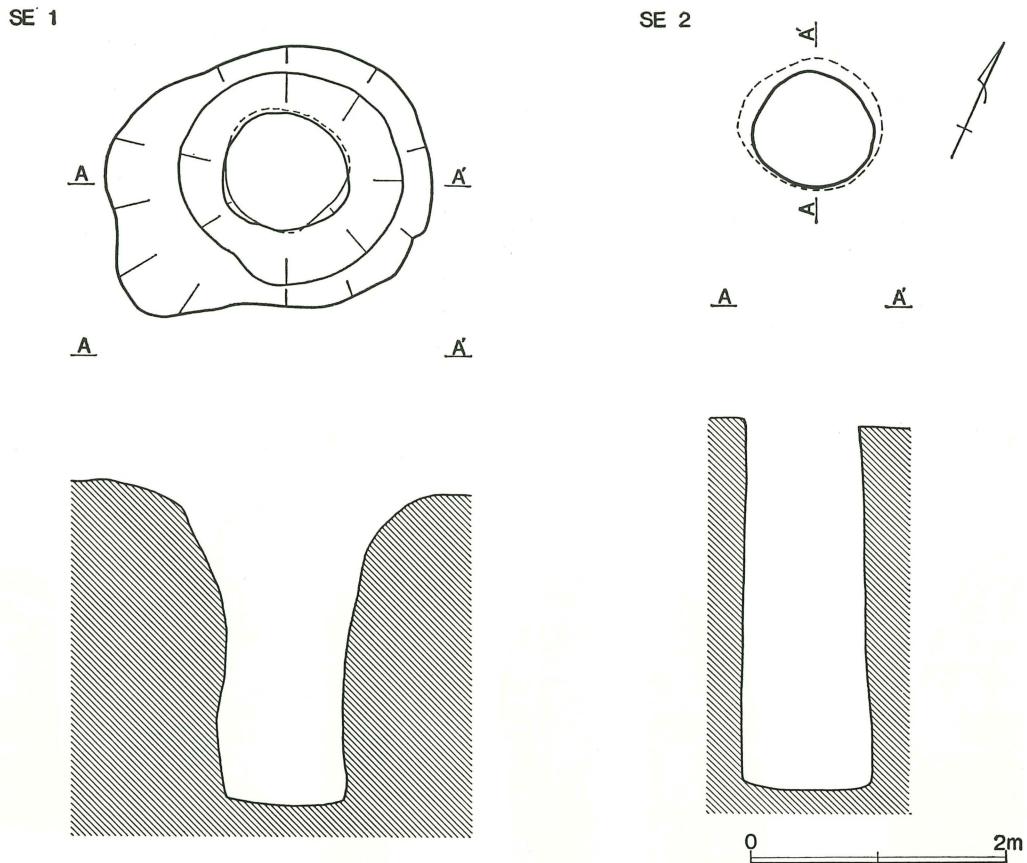
方形状を呈する。遺物は、多量の混入縄文式土器の他、土師質土器皿が出土している。

SK 3 (第153図)

17B区に位置する。長径—3.24m、短径—2.90m、深さ—1.40mを測る。南側に張り出し部があり入口と思われる。西側でオーバーハングし、端正な長方形を呈する。底面は、若干凸凹のある。遺物の出土はない。

SK 4 (第153図)

18C区に位置する。Ⅲ・SD 9を切って構築される。長径—2.70m、短径—2.06m、深さ—2.03mを測る。南側に張り出し部を有し、階段状の入口部が配される。北側でオーバーハングし、底面



第154図 S E 1、S E 2

は長方形状を呈しフラットである。遺物は少ない。

1—6 井戸跡

S E 1 (第154図)

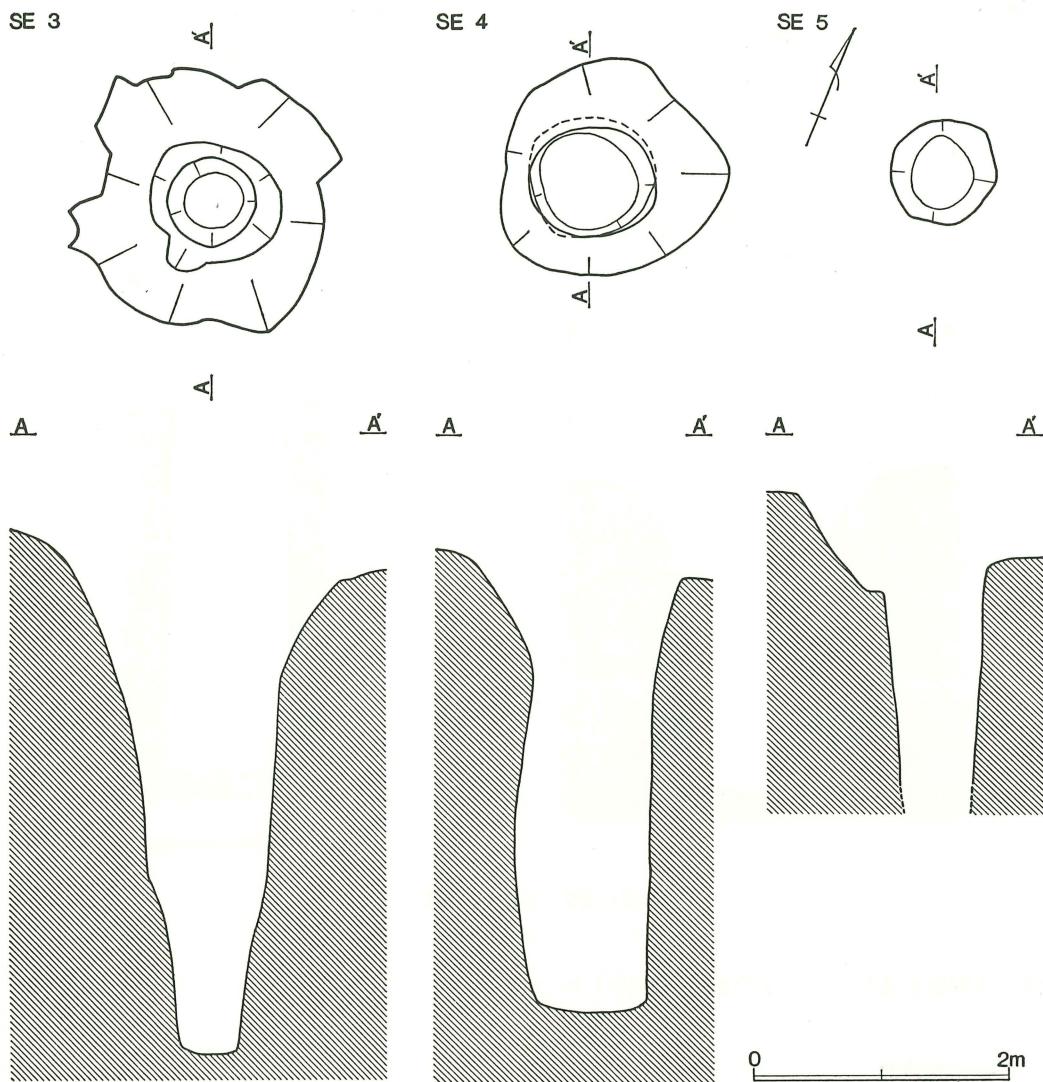
16A区に位置する。長径—2.55m、短径—2.10m、深さ—2.50mを測る。開口部は、西側にやや膨らんだ楕円形を呈し、底面は円形である。開口部下でロート状に開き、底面までストレートに掘り込まれる。遺物はほとんど出土していない。

S E 2 (第154図)

17C区に位置する。開口部は直径—0.96m、底面は1.15mの円形を呈し、底部にかけて若干オーバーハングしている。開口部から底面まではほぼストレートな掘り込みである。遺物はほとんど出土していない。

S E 3 (第155図)

15C区に位置する。II・SD 1底面で確認された。II・SD 1より古い。開口部直径—2.00m前後の円形プランを呈する。深さは確認面より3.95mとかなり深い。底面は、直径—0.45mとかなり



第155図 SE 3 ~ SE 5

小径である。開口部付近でロート状に掘り込まれ、径を減じて底面に至る。遺物の出土はほとんどない。

SE 4 (第155図)

15C、16C区に位置する。II・SD 1底面で検出された。開口部直径—1.70m、深さ—3.50m、底面径—0.85mを測る。開口部付近でロート状に掘り込まれ、以下ほぼストレートに底部に達する。遺物はほとんどない。

SE 5 (第155図)

15B区に位置する。II・SD 1の底面で検出された。開口部長径—0.82m、深さ—2.00m以上である。開口部からほぼストレートに掘り込まれる。遺物はほとんど出土していない。

5 近世の遺物

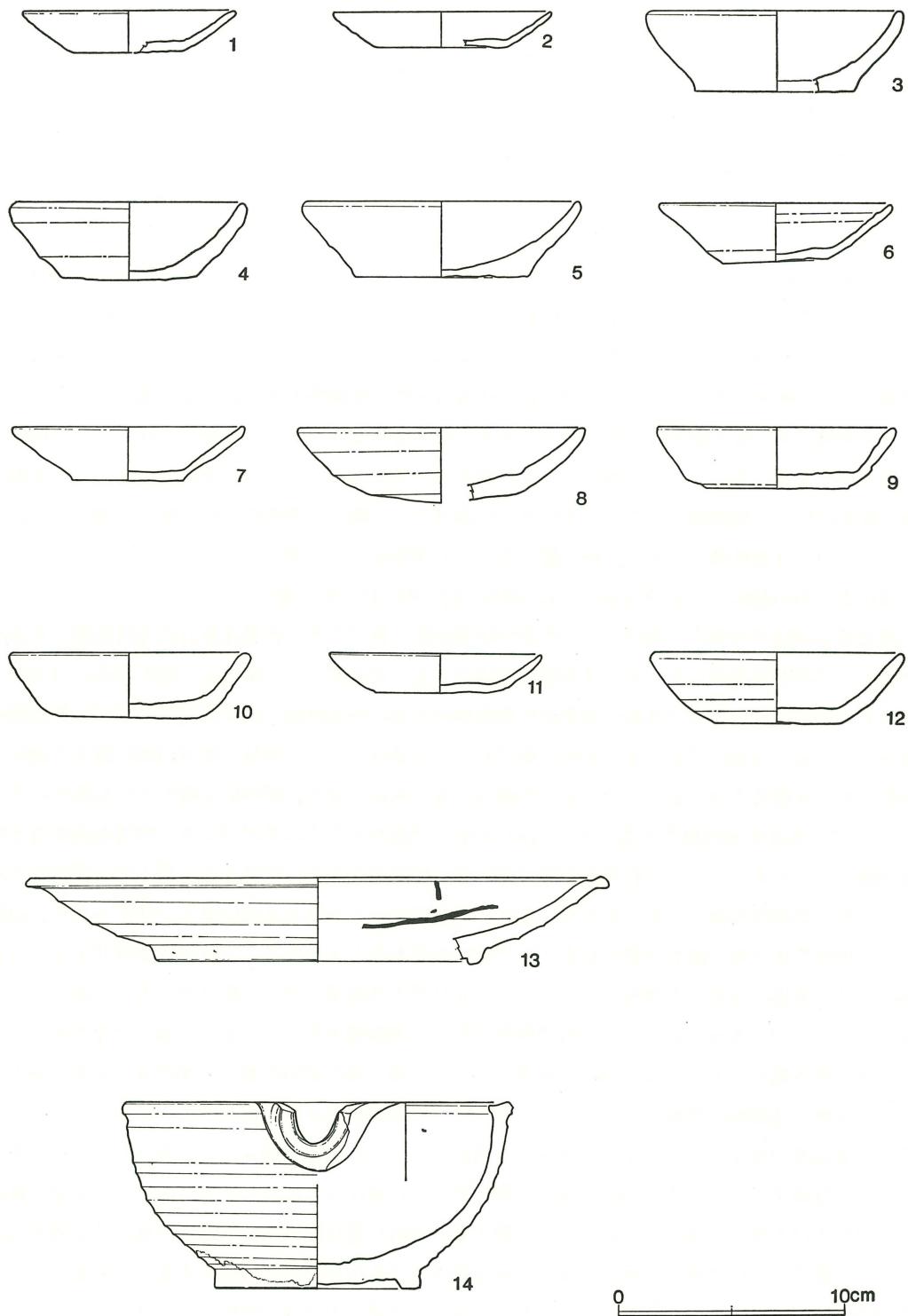
5-1 土 器

土師質土器皿（カワラケ）（第156図1～12）

1、2、11は小型のもので推定口径約10cm程である。器厚も0.3cmと薄く色調は明赤褐色で胎土はきめ細かく雲母と赤色粒をわずかに含む、内面底部周縁がやや厚くなり体部との境に窪みを有する。体部は直線的に外傾する。11は表採品である。3、4、5は厚手の作りで口径はほぼ11cm内外である。色調はにぶい橙色で胎土に赤色粒を多量に含む。底部と体部の境目が極端に厚くなり、口縁部内側がやや鋭くなるのが特徴である。6、7はほぼ同様の胎土で砂粒、赤色粒をわずかに含み色調はにぶい褐色である。口径約10cm。6は内面に明瞭に轆轤痕を残し、7は体部の立ち上がりが大きく外彎する。8も厚手のものであるが底部周縁が丸味をもつ。底面はやや荒れているが糸切りの後ケズリを行っている。9、10はともに口縁部の一部を欠くのみでほぼ完形である。口径は10.5cm、体部は短く、比較的きつく立ち上がる。色調はにぶい褐色で黒色粒と赤色粒を多量に含み、比較的粗い。12は表採品であるが、切り離しのあと底部全面をスリ消している。

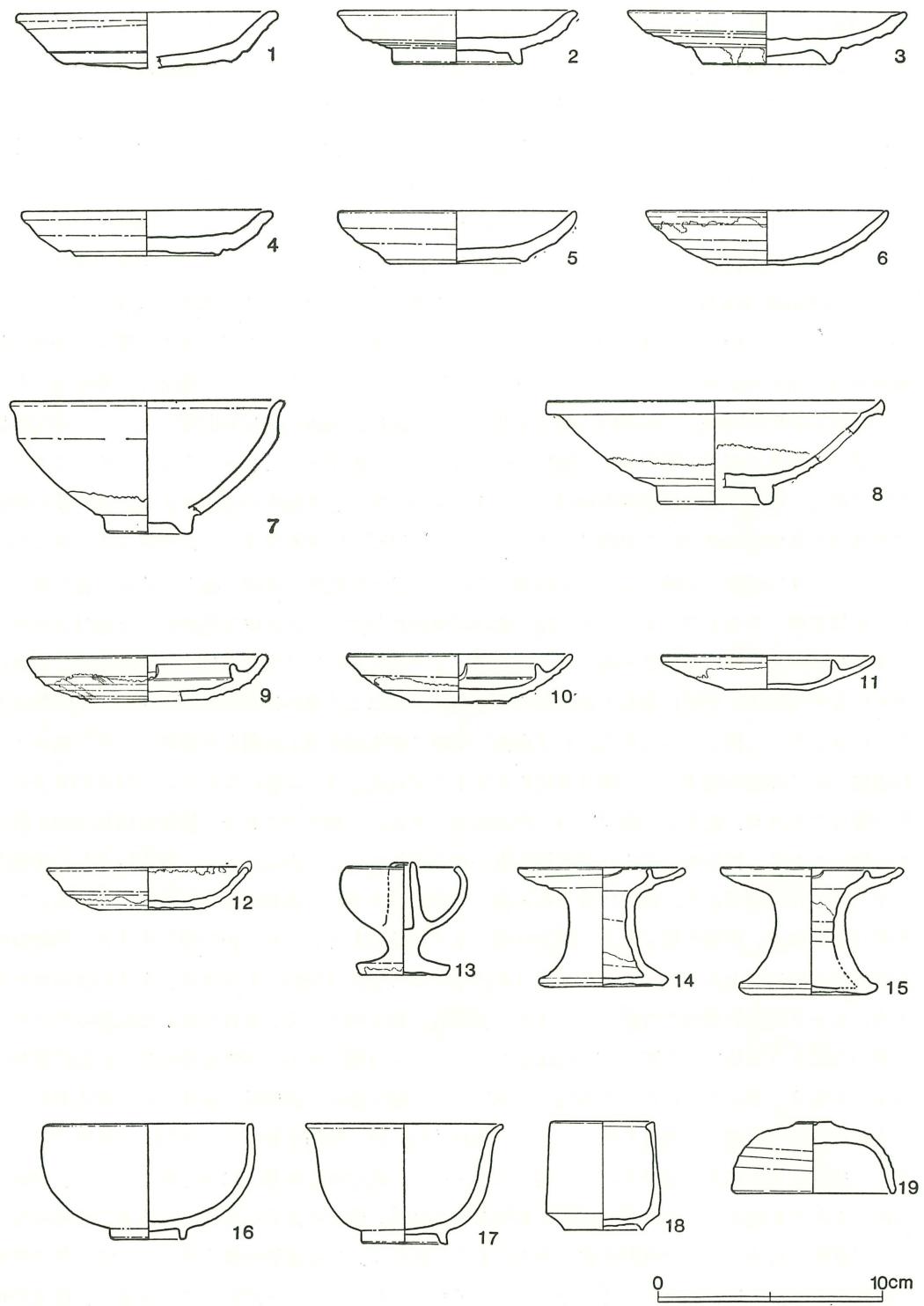
陶磁器（第156図13、14、第157図、第158図、図版40、41、43～46）

第156図13はやや強引に復原したが推定口径25cm程の皿である。色調は黄白色で内面及び外面高台近くまで透明釉が施され内面には鉄釉で模様が入る。18世紀ころの瀬戸産と思われる。14は片口である。胎土は黄白色で内外面に淡黄緑色の釉がかかる。内面底部には重ね焼の目痕が2ヶ所残る。瀬戸産である。第157図1、4は志野の皿である。口径はともに11cm程で釉は内面に厚く外面は比較的うすく底面まではかかる。4は内面の一部が灰色になる。16世紀末頃のものと思われる。2、3、5、6は灰釉の皿である。2は灰白色的胎土で底部を中心に黒斑がある。釉は内面全面と外面口縁下までかかる。3は灰色の胎土で内面に重ね焼の痕が残る。釉は外面体部まで一部高台に流れている。高台は断面三角形を呈する。6は灰白色的胎土で内面と外面口縁部に釉がかかる。口縁から外面中位まで厚く煤が付着し灯具として使われたものと思われる。7は天目茶碗である。高台部を欠くが体部は外傾した後大きく立ち上がり外反する口縁部に続く。釉は溶け方が一様でなく口縁下の立ち上がり部以下において斑状に褐色になる。図版41上1～6も天目茶碗の破片である。1、5は灰白色的胎土でその他は黄白色である。いずれも18～19世紀頃の瀬戸・美濃産のものであろう。8は淡緑色の透明釉が内外面とも中位までかかる。釉は比較的あらい貫入が入る。口縁部が大きく開き口縁端部が厚くなる。胎土は黄白色できめ細かい、これも18～19世紀頃の瀬戸産と思われる。9～15は灯明皿である。9、10は上釉に鉄釉を使った普通にみられるものである。この種類の製品は同種のものを重ねて焼いたと見られ9、10ともに内面の受け部先端は不規則に釉がはがれ外面も殆んど一周するように重ねの痕跡が残る。11は表採品であるが胎土は灰色で非常によく焼きてしまっている。透明釉がかけられ薄手のものである。12は口縁部の1ヶ所に豆粒大のツマミをつけたもので口縁端に煤が厚く付着し外面釉のかからない部分も煤で黒くなっている。釉は内面全面及び外面にかけられる。飴色の釉であるが風化のためか一様でなく下の白色釉が斑状にでている。内面には

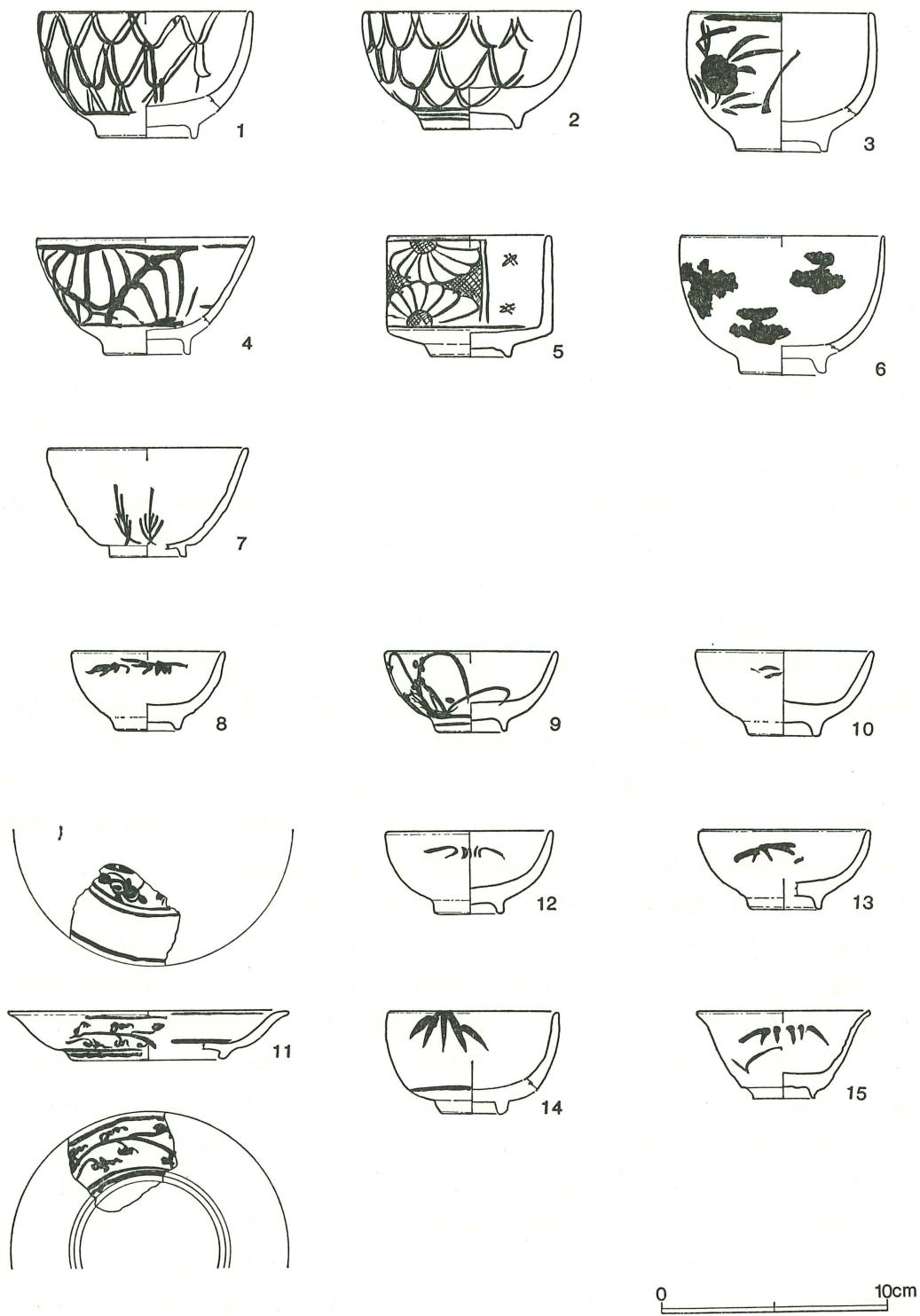


第156図 土師質土器皿、陶磁器実測図（1）

3ヶ所目痕が残る。底部は削り込んでいる。13は「ひょうそく」鉄釉を比較的厚く施してあり釉には光沢がある。胎土は灰色で底部は回転糸切りのあと棒状のものにさしたあとが深さ 1.7 cm 程あいでいる。14、15はセットで出土した。わずかに黄色味をおびた白色の胎土で焼成はきわめてよい。釉は透明釉で貫入が入る。特に15は貫入が細かく釉も厚く、ところどころ赤味を帯びる。内面受け部は1ヶ所に切り込みが入る。14は脚部と底部の接合部で剝離している。16は半球状の体部に小さく底い高台がつく碗である。胎土は灰色で透明釉が内面及び外面高台近くまで施され、口縁端部のところどころあるいは外面の一部に点状に鉄釉がうたれる。17は黄白色の胎土で透明釉が同じように施されるが全面に貫入が入り口縁端部は白濁している。18は灰白色の胎土で透明釉が体部外面にかかる。内面は口縁部から流れた釉がわずかにかかるのみで素地のままである。底部は削り込んで高台状につくっている。19は類例を知らないがおそらく蓋になるものと思われる。外面に明瞭に轆轤痕を残し透明釉が施される。ツマミ部はわずかに盛り上がる程度で、この部分だけ釉が施されない。直径 1.6 cm で中央部に径 0.6 cm の窪みをもつ。第 158 図、図版 41 下に染付類を示した。第 158 図 1、2 は伊万里の綱目茶碗である。釉は青灰色でいずれも底部が厚く、がっしりしたものである。3 は草花文であるが外面口縁部の釉はコバルトの発色が悪く、黒褐色のままである。4 は淡い黄色味を帯びた青灰色の釉で絵の発色はうすくぶい。5 は花文に井桁で見込みに穴が入るが黒くつぶれています。6 は刷絵の茶碗である。7 は淡い黄白色の胎土に鉄釉で絵付を施したもので瀬戸産のいわゆる柳茶碗に入るものである。8、10~13 は同種の絵付であるが 8 は発色がにぶく 13 はコバルトがよくでている。9 は草花文が描かれるもので、この種のものには大きさに大小があるが、これは小さいものである。やや白濁した青灰色の釉を施す。14 はごく薄めに染付を行っている。文様は基本的には 13 などと同じものである。15 は内面に明瞭に轆轤痕を残し外傾した体部から更に広がって口縁部へ続く陶器の碗である。釉は青灰色を呈するが白濁しガラス質にならない。11 は約 9 分の 1 程の破片であるが、舶載品の皿である。内面底部と外面に文様が施される。推定口径 12.6 cm を計る明の製品である。図版 40 下の 1 は信楽焼の壺か甕の破片である。内面灰白色、外面はあわい黄褐色を呈し焼成は良好である。胎土に含まれる長石? が溶け外面に気泡状になって白斑をつくる。2 は表採品であるが、鉄釉が施される。胎土は黄白色で比較的粗く、やわらかい感じがする。図版 41 の大窯期のものに胎土が近似する。3・4 は唐津の製品で胎土は独特のレンガ色、あるいは灰色を呈する。5~7 は淡い黄白色の胎土にくすんだ青緑色の釉が施される。6 はやや高めに削りだされた高台の内部を半球状にくり抜くように成形している。8 は瀬戸地方の 19 世紀頃の皿で内部に鉄釉で草花文を施す。重ね焼の痕が 3ヶ所残る。9 はうすい緑がかかった透明釉を施すもので皿と思われる。胎土は灰白色で底部高台内にも釉がかかる。10 は外面に薄く鉄釉を施すもので胎土は灰色で薄手である。体部下端に粘土を豆粒大にして貼り付けている。底面及び体部下に厚く煤が付着し、内面には砂のかかりが認められる。11 は外面に鉄釉が施される。胎土は黄白色で硬い。体部と底部の境がヘラで整形される。新しい時期の瀬戸地方のものであろう。12 は香炉の破片である。黄白色的素地に黄褐色の釉が掛けられるもので、指でつまんでつくられた足が 3ヶ所につく。体部に、花文の彫刻のあるもので 18~19 世紀に瀬戸地方で大量につくられたものである。図版 41 の上は 1~6 が天目茶碗である。7、8 は黄白色あるいはやや灰色がかかった胎土に鉄釉で花文を表わしたものである。



第157図 陶磁器実測図 (2)



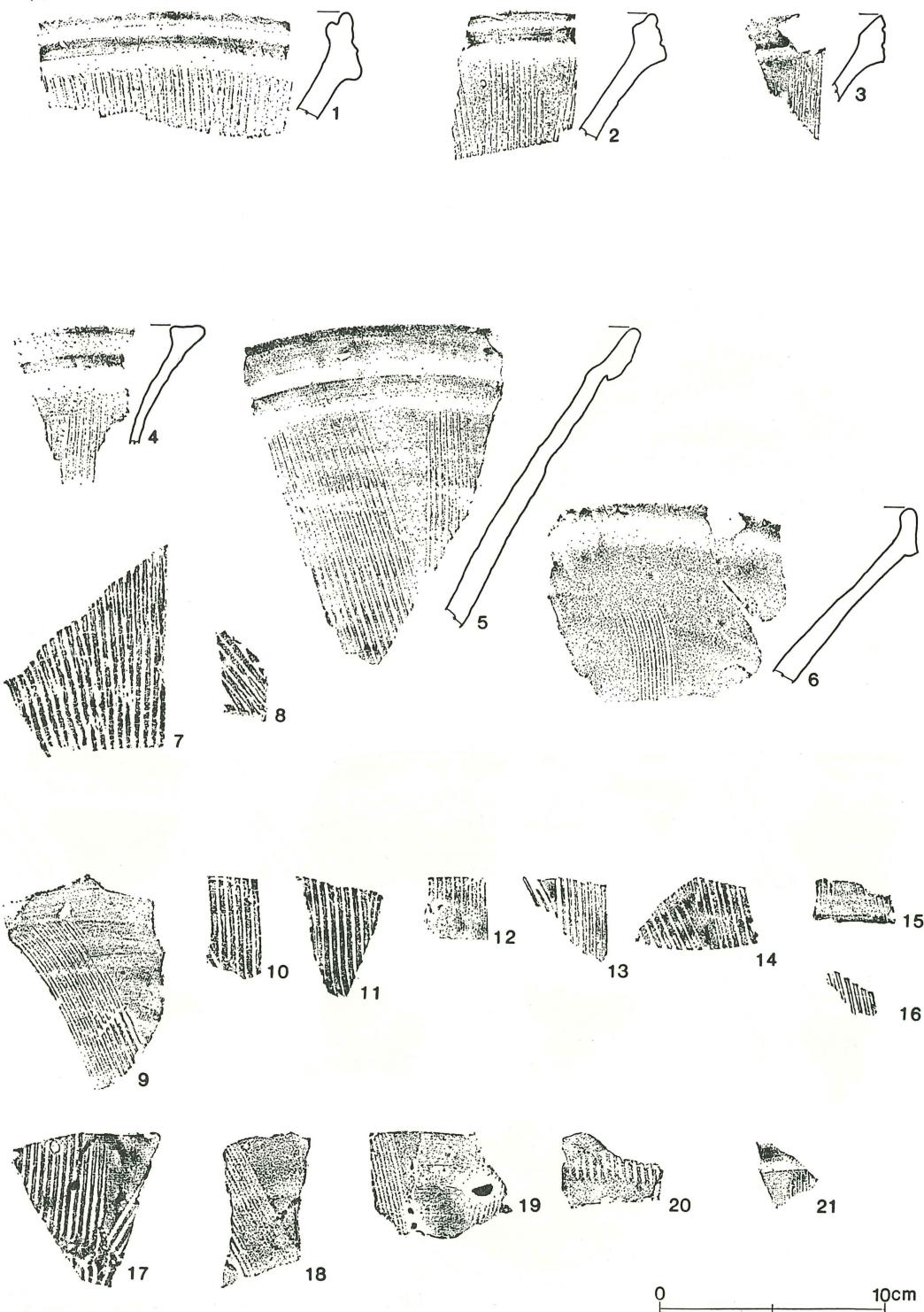
第158図 陶磁器実測図（3）

7の高台は断面が三角形となる。10、11は同一個体であるが接合しない。底部を欠失するがゆるやかに内彎したあと段をもって外傾する。胎土は黄白色で粗い。釉は淡緑色透明釉である。外面の段のところで釉が厚く溜まっている。外面下半で釉はされる。12、13は青磁である。12は小型の香炉と思われる。胎土は白色で緻密である。底部には円錐形の小脚が3ヶ所につく。釉は底面と内面にはかかるない。13は胎土灰白色であるが破片の大きさに比して軽い。内面及び高台内幅1.7cmで蛇目状に赤褐色の化粧土が施される。釉は全面に塗られて高台にも施工されるが全体に薄くかけられている。14は白磁の皿である。胎土は白色でわずかに灰色がかっている。釉は全体に薄く高台接地部を除いて全面に施される。15、16は10、11と似ているが釉が若干青みがかっている。15は碗、16は皿になると思われる。ともに釉は高台、底部にはまわらない。図版41の下1～4はともに徳利類の破片と思われるが1は灰色の胎土で内面によく轆轤痕を残す。釉は外面のみで淡緑色透明釉である。2は黄色味を帯びた灰白色の胎土で黒色粒子を多量に含むのが特徴である。外面には、0.6cm程の沈線状の窪みが三本あり、その線にかかるように不明瞭な刻印状のものが彫られその部分は内面が張り出している。釉は青みがかった透明釉である。5～13は染付である。11は徳利、その他は碗である。いずれも江戸後期～末頃の伊万里系のものである。14は小皿である。外面に頬唐草模様が彫られているが白色の釉は内面と口縁部にかかっており外面は口縁部から流れたものがわずかにかかるのみである。

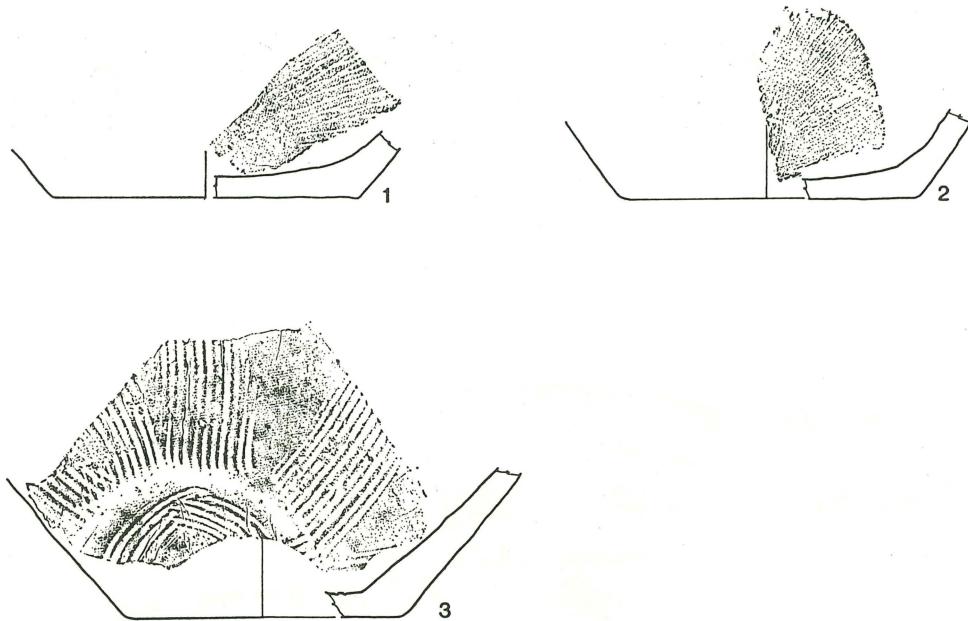
擂鉢（第159図、第160図）

第159図及び第160図の3まではⅡ区、それ以下はⅢ区からの出土である。159図1、2、160図4はレンガ色の胎土で口縁端面及び口縁部外面に沈線が入る。1の櫛目は8本1単位で深く刻まれしっかりとししている。胎土に小礫と若干の雲母を含む。2は11本1単位で上の方は櫛目があり、櫛目は比較的狭い。159図4は櫛目9本以上でやや斜めに引きおろされる。この種の擂鉢は動坂遺跡等で出土しており新しい時期のものと思われる。159図5、9、160図3などは黄白色の比較的粗い胎土で茶褐色の鉄釉が施される。159図5は比較的薄い造りで口縁部内面に段をもち、その段の直下から幅の広い1単位16本以上の櫛目がひかれる。櫛目は角がやや丸味をおびてよく使用されたことが窺える。9は口縁部下からの破片である。1単位10本以上の櫛目が斜めに引かれる。160図3は底部の残存しているものである。鉄釉が薄く刷毛状のもので塗られその上に部分的に鉄釉が厚くかかる。体部の櫛目は1単位12本、底面の櫛目は6本程と思われる。磨耗が激しく丸くなっている。これらは瀬戸・美濃地方の製品である。159図6、18、19は青白色の柔らかい胎土で黒褐色の鉄釉が施される。櫛目は非常に細かく6で14本である。これらは大窯Ⅱ期に相当する。160図6は灰黒色の胎土で表面は暗赤褐色あるいは灰色を呈し、小礫を含む。造りは薄手で口縁端部をつまむようにして内面に段をつけている。櫛目は口縁部からやや下がった所から引かれる。1単位7本である。常滑産のものか？7は明るい黄褐色の釉が施されているもので胎土は白の強い灰白色である。長石？粒を含みそれが器面に吹き出で白色の気泡状に斑点となる。櫛目は口縁下から引かれ单位は11本以上である。信楽系のものと思われる。尚、この破片は砥石として転用されたとみられ断面が一部研磨されている。10は底部片で8条の櫛目が深く引かれている。胎土は赤味をおびた淡褐色の赤色粒、小礫を含む。8は瓦質の擂鉢である。表面黒色、胎土灰白色で砂粒を多く含み軟質である。

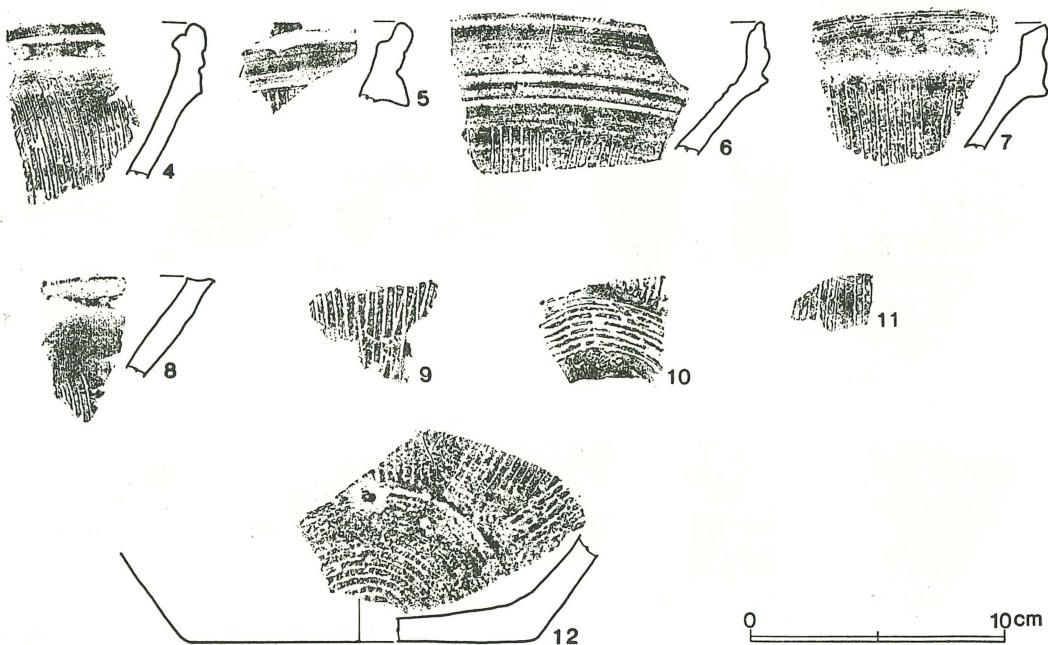
II区



第159図 標鉢実測図（1）



III区



第160図 挖鉢実測図(2)

轤轤成形の後、内外面ヨコナデし櫛目を入れる。(木戸春夫)

内耳土器(第161図～第163図)

久台遺跡出土の内耳土器はその大部分が、ほうろく形で鍋形はわずか1点だけである。内耳部分がすべて器内に入っている、口縁直下から配されるもの(I)と、口縁下に若干の間隔を置くもの(II)の二種類認められる。(I)は最大径部が口縁取り付け部より下方、(II)は同位かそれより高い。口径は27cm～30cmの小形品と36cm～40cm前後の大形品に分別される。尚、大形片が少ないためかなり無理して口径を推定している部分がある。従って、口径が大きく40cmを越えるものも含まれているが、あえて図化し、そのまま掲載した。これらについては36cm～40cmの口径グループに換算して考えていただきたい。器高はいずれも5cm内外である。調整・手法は内面、体部中央までがナデ、体部中央部下に指頭状の押圧があり、底部付近をケズリで仕上げる。大部分がII・SD1、II・SD9の出土である。

II・SD9(第161図、第162図1～3、5、9) 1、3は口縁下に若干の間隔を置いて内耳を付する。いずれも大形タイプ。口縁部形態には4種認められる。a.平坦なもの(第161図1、3、4、5、第162図3)、b.内削ぎ状のもの(第161図2、5、7、8)、c.平坦であるが外方に大きく張り出すもの(第162図1、2)、d.丸いもの(第162図9)である。第162図1、2はcタイプで器高—5.7cmと深めである。体下部の押さえは認められるがケズリはない。この2点だけの出土であった。9は口径—26cm、器高—2.5cmと小形でcタイプ、内彎気味に立ち上がる。調整は前述の各種認められる。

II・SD1(第162図4、5、7、8) 4はaタイプの口縁、5、7はbタイプである。内耳部分が判かる7は(I)である。8は小型で口縁形態もdタイプに近い。調整は、前述のとおり。

III・SD2(第163図5、6) III区表採(第163図1、3、4) 口縁部形態はほぼaタイプで内耳部分の取り付けも(I)タイプ1種類である。調整も各種認められる。第163図2はIII区表採。

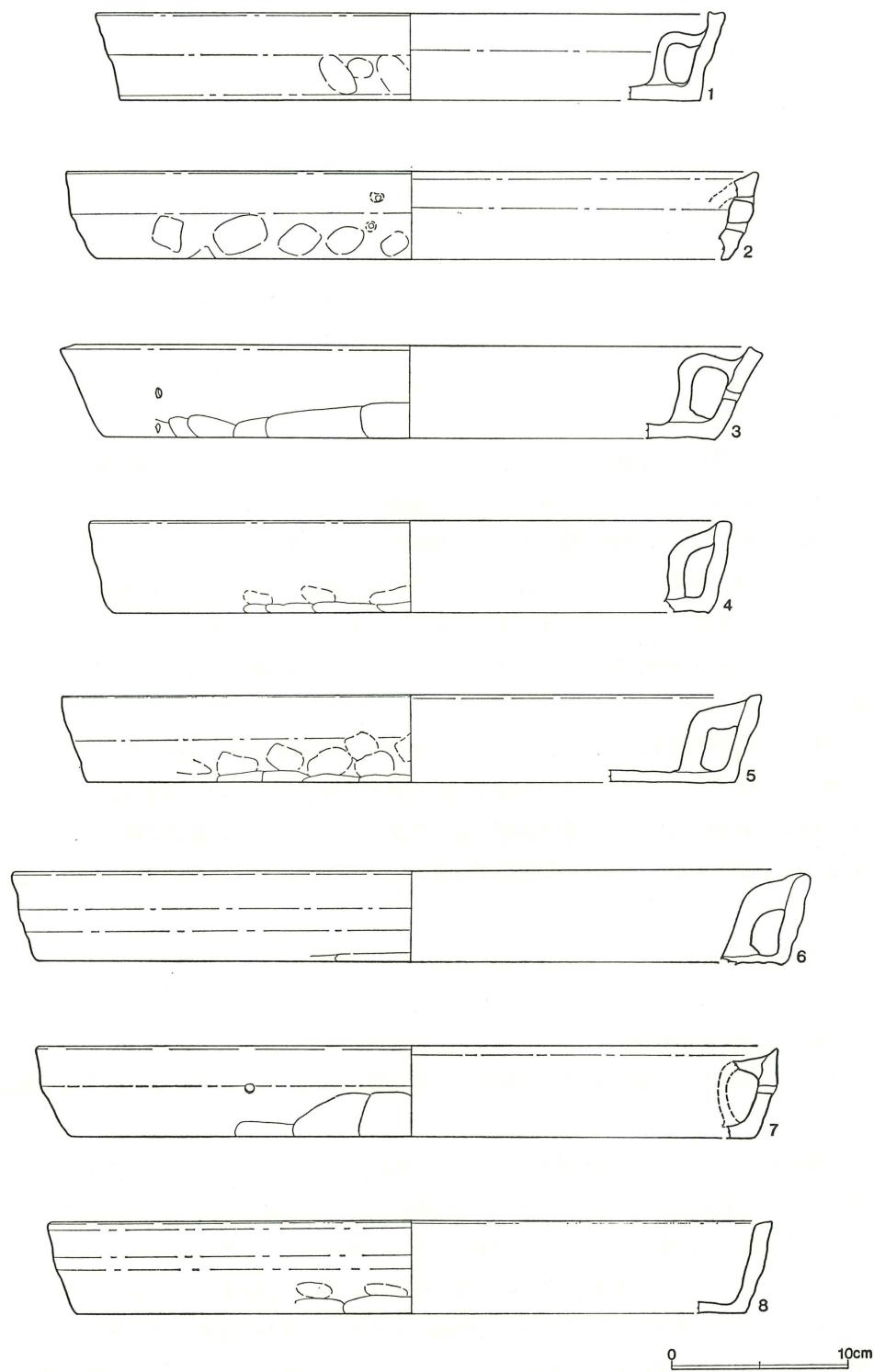
5—2 近世石器(第164図～第168図)

砥石(第164図～第166図)

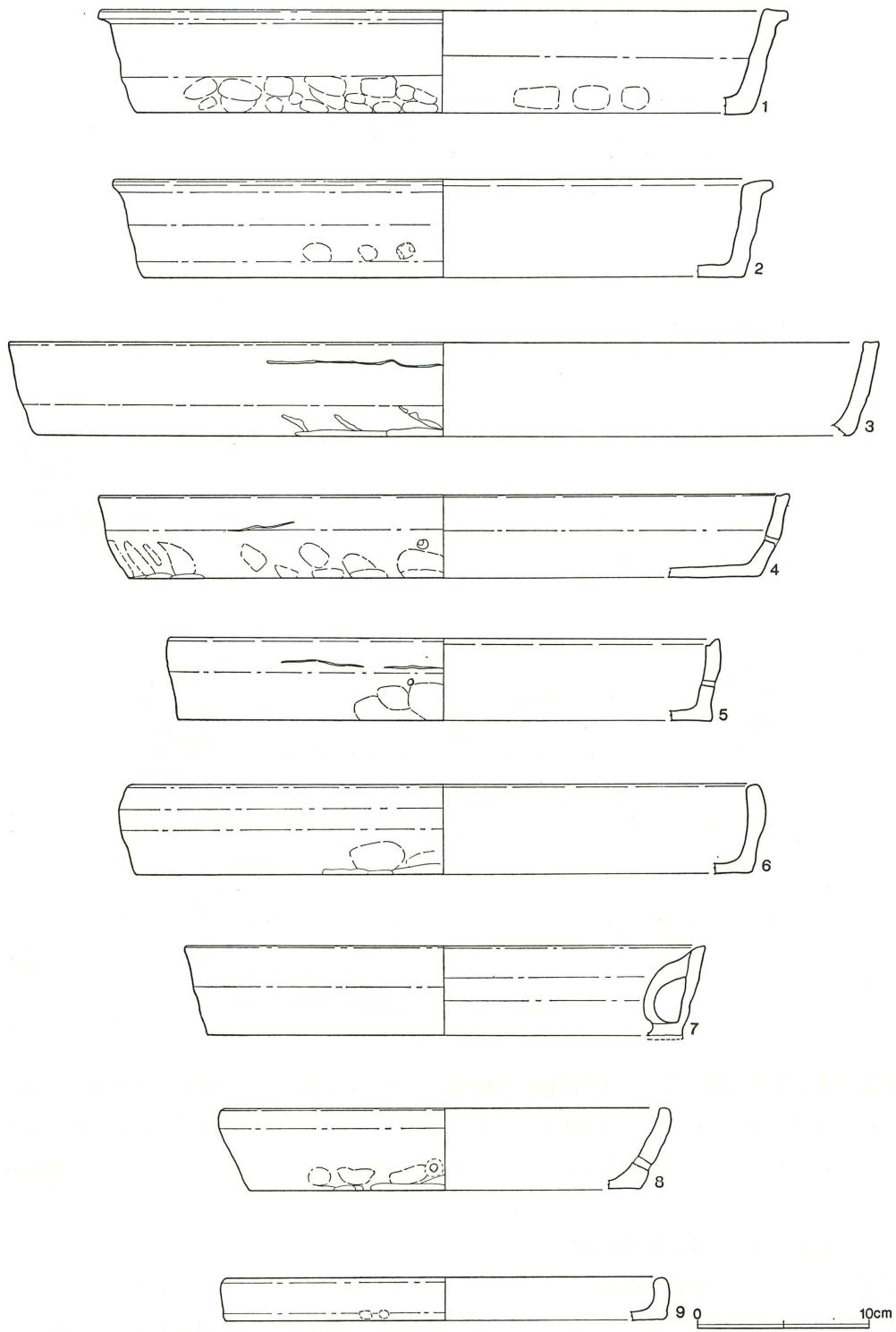
砥石は、A、断面が三角形状を呈する仮称「三角形砥石」と、B、長方形形状を呈する平砥石に分けられる。

A. 三角形砥石(第164図、第165図1～8) 長軸断面が三角形状を呈する。使用部分は正面の山形部分が主な使用面であり、底面部分にも使用痕が認められる部分が多い。側面部は「タガネ」等によると思われる切断痕が認められる。彎曲する主使用面は3～6程度の使用面を有し使用する方向、角度が異なっているが大体主軸と斜方向の使用痕が多い。第164図1～8、第165図1～4はほぼ完存品の典型的な三角形砥石で、長さ—12cm前後である。第164図9は下半部を欠失する。第164図5～7は長さ—8cm前後の小型品で7は下半欠失する。側面部を含み全面に使用痕が観察される事を特徴とする。8は断面三角形で本類の中では特異である。石材はいずれも凝灰岩。

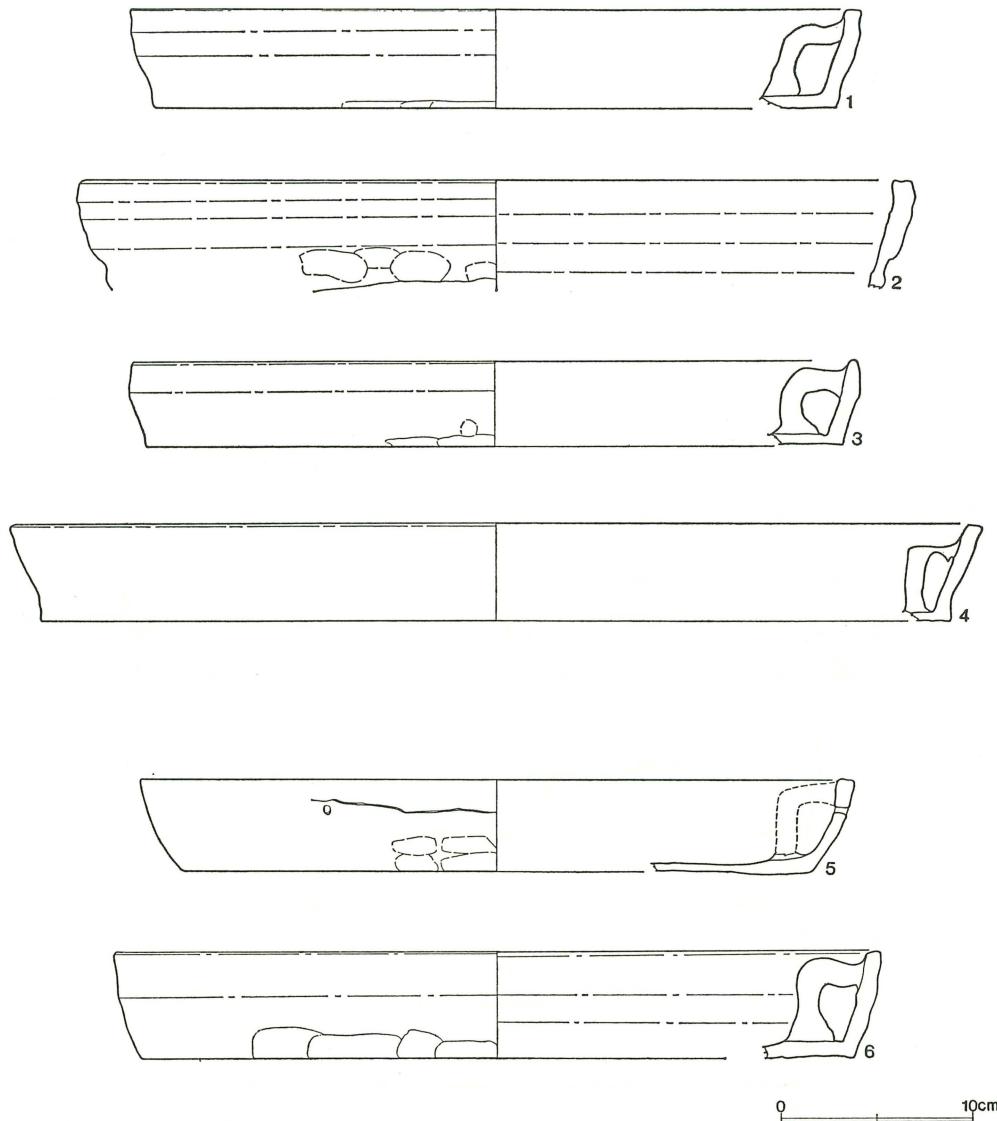
B. 平型砥石(第165図8、9、第166図) 断面形状が四角形の長方体の砥石である。いずれも



第161図 内耳土器実測図（1）



第162図 内耳土器実測図（2）

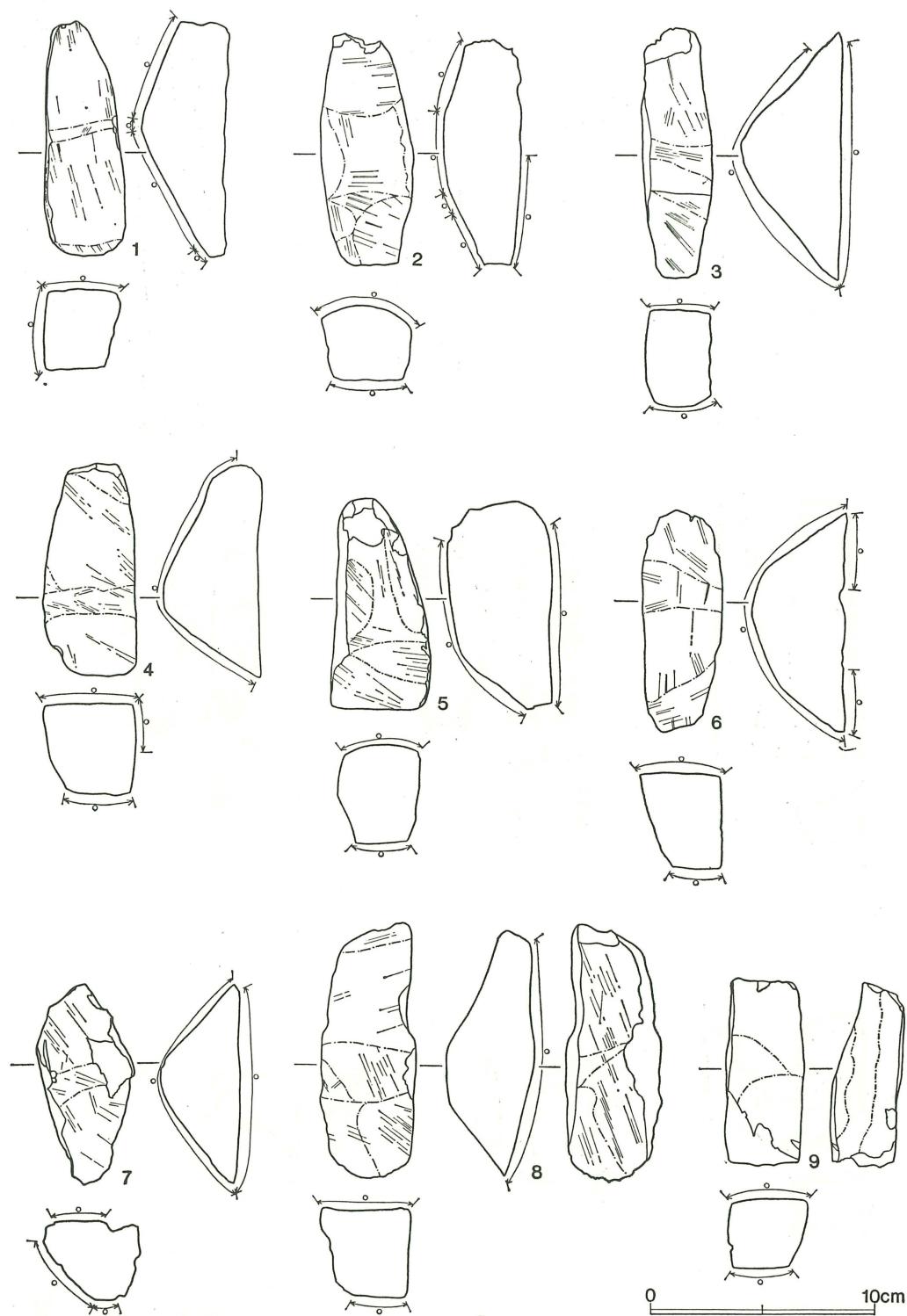


第163図 内耳土器実測図（3）

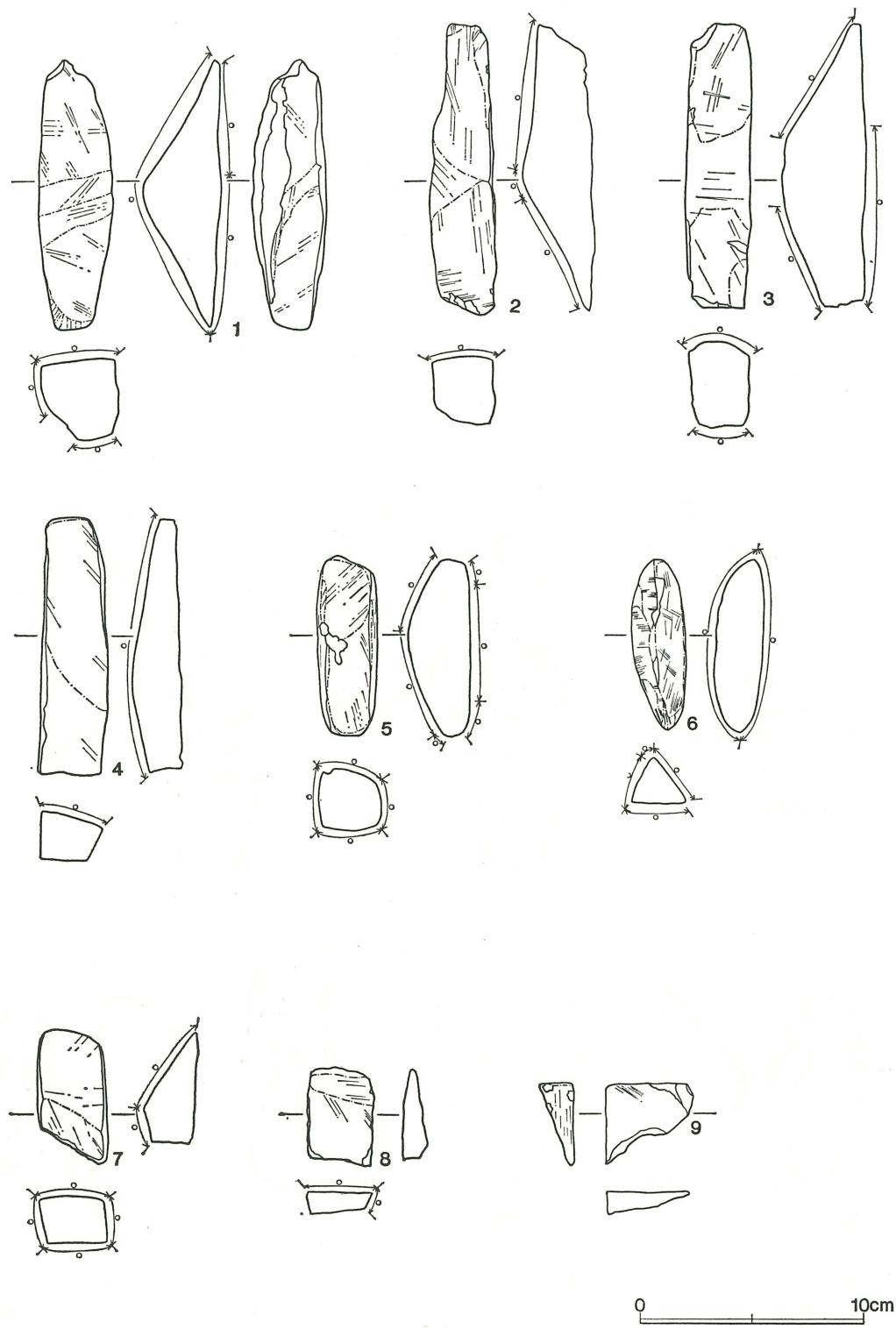
欠損品である事を特徴とする。Aと同様に側面部に「タガネ」等による切断痕を残すものが多い。基本的には表裏両面使われるが第166図3、5、6のように表面だけに使用痕の認められるものもある。本類も大型品と小型品の別がありそうであるが子細は不明である。石材はいずれも凝灰石である。

石臼（第167図1～4、第168図10）

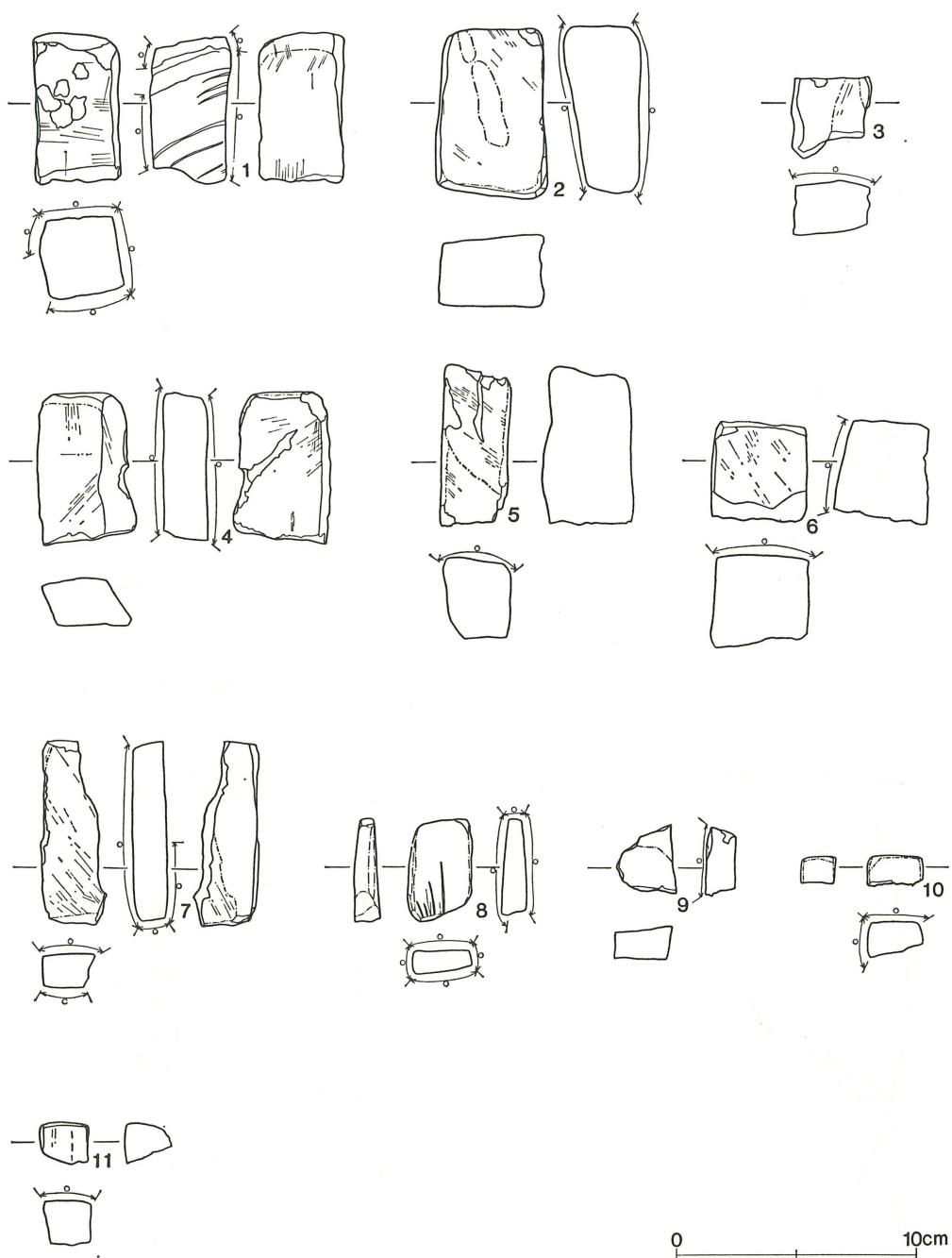
穀磨臼の上臼、下臼両者が出土している。1、2は上臼部分である。「引き手孔」、「こくくばり孔」等々の部分は不明である。1は推定直径—26.0cm、2は推定直径—34.4cmである。使用面は磨滅しており、溝は明確でない。3は側面部分のみで部位は明らかでない。4は下臼部分で側面、下面部を欠失するが上面部の溝は明瞭に観察される。第168図10は上臼で帽子状の突出部がある。



第164図 近世石器実測図（1）



第165図 近世石器実測図（2）



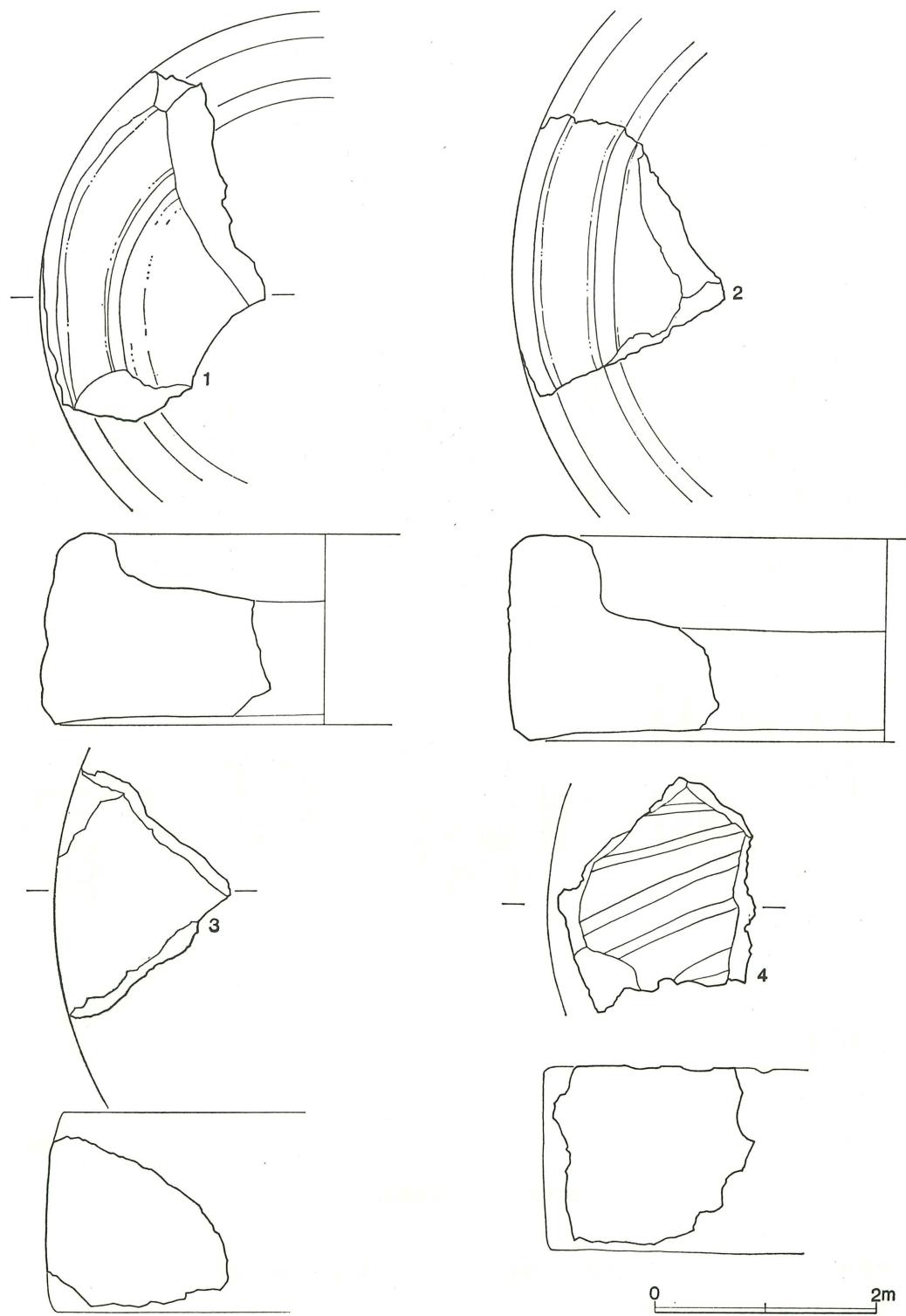
第166図 近世石器実測図（3）

浮石（第168図1～9）

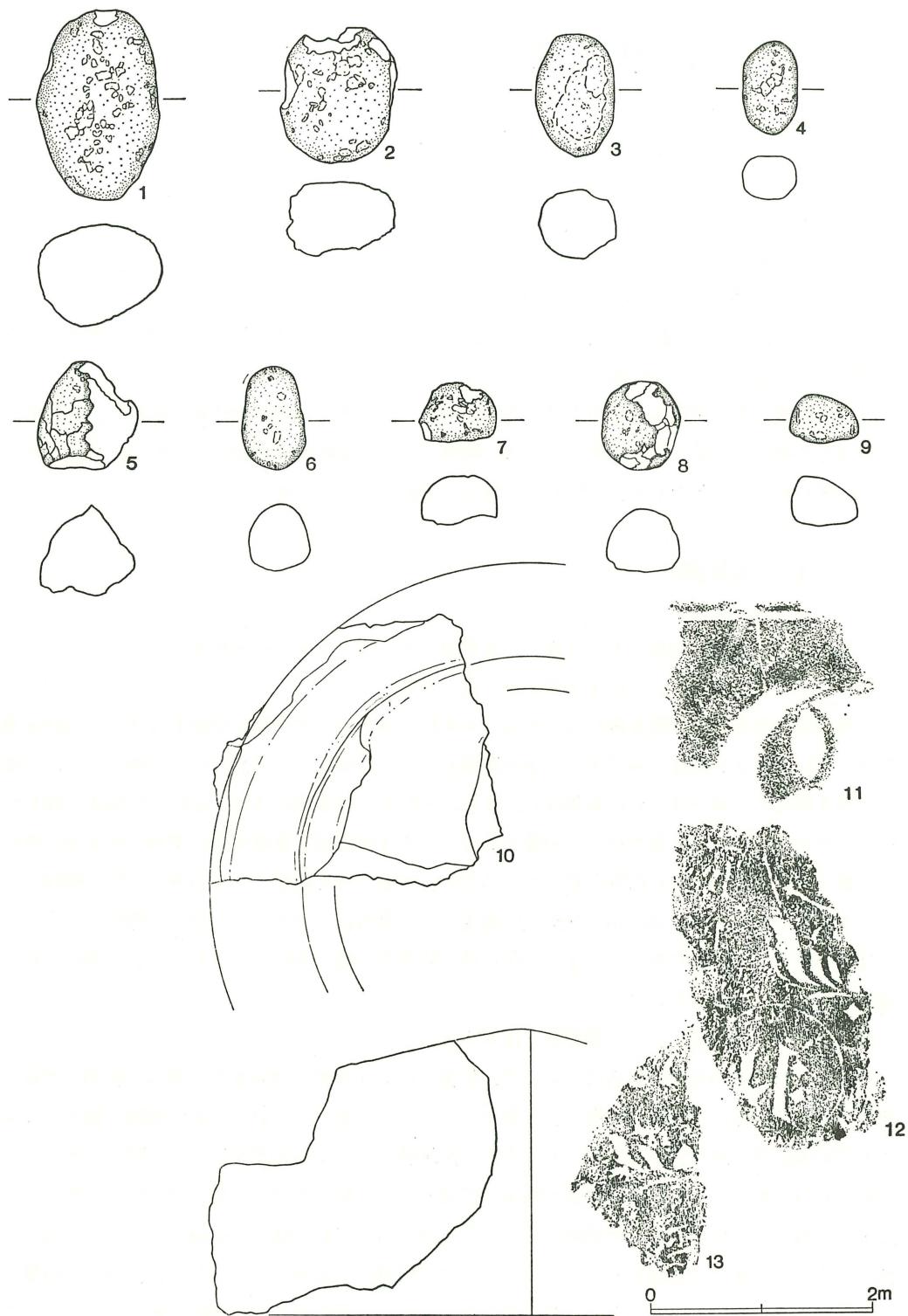
性格不明の浮石を一括する。長径一9cm前後のものから長径一3cm前後のものまで存する。

板石塔婆（第168図11～13）

刻印が判断できるのは3点だけであった。緑泥片岩製である。刻印の様相からして新しいものと思われる。他に緑泥片岩の破片はかなり多く出土している。



第167図 近世石器実測図(4)



第168図 近世石器実測図（5）、板石塔婆

V 結 語

1 縄文時代の遺構について

久台遺跡において確認調査された26軒の住居跡について最初に分析する。ここでは、個々の住居跡について遺構構造からグルーピングし、グループごとに遺構、遺物分布両面から記述する。このレベルでは時間軸の分析、及び各遺構の関連性を保留する、次に、集落全体の遺物分布図を基本的データとして、時間的問題、住居間の関連性、住居跡と土壌の関係、集落内の遺物の動性等々筆者の考えうる分析項目について記述したい。

尚、本遺跡のデータ提出と分析を主目的とするため他遺跡との比較論は極力省略し、必要最底限の部分のみ取り上げる。又、紙面スペースの関係上分布図は多少手が加わっており、最も効果的なものに限定せざるを得なかった。同時に、文章も簡結なものとした。

1—1 住居跡について

平面プラン、主柱穴配置、入口部構造の有無等より、大きく4つに分類する。

A. 方形プランを有し、入口部施備を持たないもの。

この類は、第5号住居跡1軒だけである。4本柱穴であり、中央部に炉址を有する。入口部施備を持たない方形住居跡は特異であり、他遺跡例を見ても少ない。位置付けには苦慮するが、土器編年で第1期としたR→J系が比較的多い点から、東関東に例を求めるに、近年、中期末～後期初頭にかけてのR→J系の変遷が序々に明確となって来た北部地域、茨城県側に求められよう。特に砂川遺跡（渡辺1981）では同時期と想定される方形住居跡が多く検出されており、土器の動向とともにとりあえず関東・東北部の住居跡形状と関係有りと推量しておきたい。又、特異性という点で、本住居跡を切って構築されている第7号住居跡も特異性の強いものである点から、占地についても留意しておかねばならない。

B. 円形プランを有し、入口部が張り出すもの。

本遺跡の住居跡の大部分を占めるもので、集落の成立から終了直前まで一貫して採用され続けた住居跡構造である。当集落の特徴は、①敷石を全く持たぬ事、②入口部付近の埋設土器も全く検出されない事、③炉址は、全く存在しないもの、炉址状のピットはあるが焼土の堆積が認められないもの、通常の炉址を有し焼土の堆積が極端に良好なもの別がある、④床面は全体的に軟弱であり、焼土の堆積しない住居跡にその傾向が強い。⑤大部分の住居跡が壁孔、壁溝を所有している。⑥主柱穴は4本と多柱穴の2種類有り、入口部に対する面に特徴がある。⑦入口部は、長方形の張り出しが長いもの、短いもの、ほとんど張り出さないものの3種類有り、原則的に壁内に対ピットを有する。⑧入口部と住居跡床面とのレベルは同一である。

以上、住居跡の諸特徴を列挙した。これらの住居跡については、すでに村田（1975、1976、1979）、

山本（1976、1980）、郷田（1982）、笹森（1976、1977）等に論考されている。東部関東の後期初頭と対比すれば、大きなちがいは主柱穴の配置と張り出し部の形状の違いである。及び、主柱穴外側に壁孔、壁溝が存在する点である。又、笹森の論考とは、主柱穴外に壁溝、壁孔が存在する点で大きく異なっている。

次に前述の諸特徴に分布図等を加えてさらに分析を加える。

②炉址について

焼土が堆積する炉址を有するものは第一第11号住・第19号住・第20号住である。炉址状ピットを有するものは第一第6号住・第10号住・第12号住・第14号住・第16号住・第26号住であり、他は設備を持っていない。比率は、3:6:6である。

張り出しの入口部構造を有する住居跡は第11号住・第19号住・第20号住を除いてすべて焼土が堆積しないか、炉址施設のないものである。これらの完備した住居構造を有しながら炉址がきわめて貧弱な内容である点に、本集落の称名寺式～掘之内1式直前の住居跡の特色がある。この事は、逆に第11号住居跡に見られるように巨大な炉址を持つ住居跡と不可分の関係にあるものと思われる。

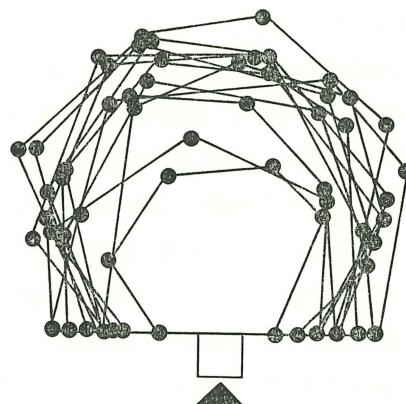
⑤壁孔、壁溝、及び壁外について

一部の住居跡を除いて壁孔、壁溝を有する。これらの設備を遺物分布図と対比させて検討すると①前述V章で見たように住居跡壁下はリング状に遺物の分布が少ない。②分布図（1）には色々な要素が含まれるが住居跡壁外にも遺物の希少な部分がリング状に広がる傾向がある事がうかがえる。それぞれ若干の遺物の出入が認められるが、第3号住居跡、第10号住居跡等では住居跡壁外が0.80m～1.00mにかけてかなりきれいにぬけている点が理解出来る事と思われる。この点で、笹森氏の指摘する外帶を明瞭に確認出来る事となろう。ただし最も少ない数値とした1.50mよりはかなり小さい数値である点が本住居跡の特色である。これは後述する主柱穴との関係によって理解しうる事と思われる。

次に、本集落の住居跡に特徴的な主柱穴外の壁孔、壁溝について見ていく。張出し構造を有する住居跡が主柱穴ライン外で存在した例はきわめて少ない。貫井2丁目遺跡一J2号住居跡（吉田格他、1984）は本例にきわめて近似する。時期は称名寺式期でもそれほど古くない段階である。当住居跡と一部一致する。称名寺式の中頃から掘之内1式直前の段階にかかる住居跡の検出例が少ない現在、主柱穴と壁孔が分離するこうした型が特殊なものか否かの検証は、当時期の住居跡の検出例を持たねばならないだろう。

⑥主柱穴の構造

張り出しを有する円形住居跡の上屋構造を



第169図 主柱穴分布図

含めた検討は笹森氏（笹森1977）の論考がある。氏の論考を参考としつつ久台遺跡検出の住居跡を見て行きたい。

1. 柱穴配置 久台遺跡では、主柱穴が壁から比較的離れており、志久第8号住、板東山、例に近似する。主柱穴の配置は、第169図に示した。張り出し部、及び出入口部に面する線で基本線とした。6～8本前後の多柱穴であるが、入口部に面する部分が広く開く事に特色がある。この事は入口部の上屋構造と深く関連があると思われる。すなわち、入口部の上屋構造を規定する対ピットと張り出しの関係である。笹森氏は対ピット部分にまで円Oの範囲として主柱穴と同様のものを想定し、垂木を傾向させているが、入口部施設関係のピットと主住穴を分離して考えたい。

2. 志久8号住、板東山B地点2号敷石住、金楠台2号住、木戸作29号住、小金沢13号住等、円Oの入口部に面した下端がスパット直線で切られ「ㄣ」状を呈する状況が見られる。時間的に見ても加曾利EⅣ式の段階から堀之内式の段階まで共通に認められる現象である。

3. この入口部に面する部分がカットされる状況について、主柱穴最終ラインに横位に長軸に直交する梁、桁が存在すると相定される。主柱穴に連動する強固な軸が単純に設定されるものと思われ、入口部の上屋構造が規定される。

4. 笹森氏の計算法で円錐形状の上屋構造を推定して見た。個々のデータを記すスペースはないがやはりかなり天井の低いものとなる傾向が認められた。第Ⅱ期～第Ⅲ期の本集落の住居跡は、所論外帶が前述した分布図の検討から1.00m内で笹森氏のデータより少ない。これは、円Oが極端に大きい訳ではないため（本住居跡が多少大型である傾向は強いが）次の傾向がうかがえる。すなわち、外帶にあたる部分に対して、掘り込み壁面を拡大して竪穴内に取り込む工夫がなされたと推定しておきたい。

5. 張り出し部は第Ⅲ期→第Ⅳ期にかけて縮少化がうかがえる。第Ⅱ期では竪穴内が対ピット及びそれに対応したものが大部分であるが、第Ⅲ期では長方形状の掘り込みが住居内にまで連続するものが多い。裏慈恩寺東第3号住（並木、1978）もこうしたものと思われる。第11号住はこうした規制によって炉址がかなり右側に寄っている。前原遺跡8号住（青木、1983）でも炉址が若干右側に寄っている。

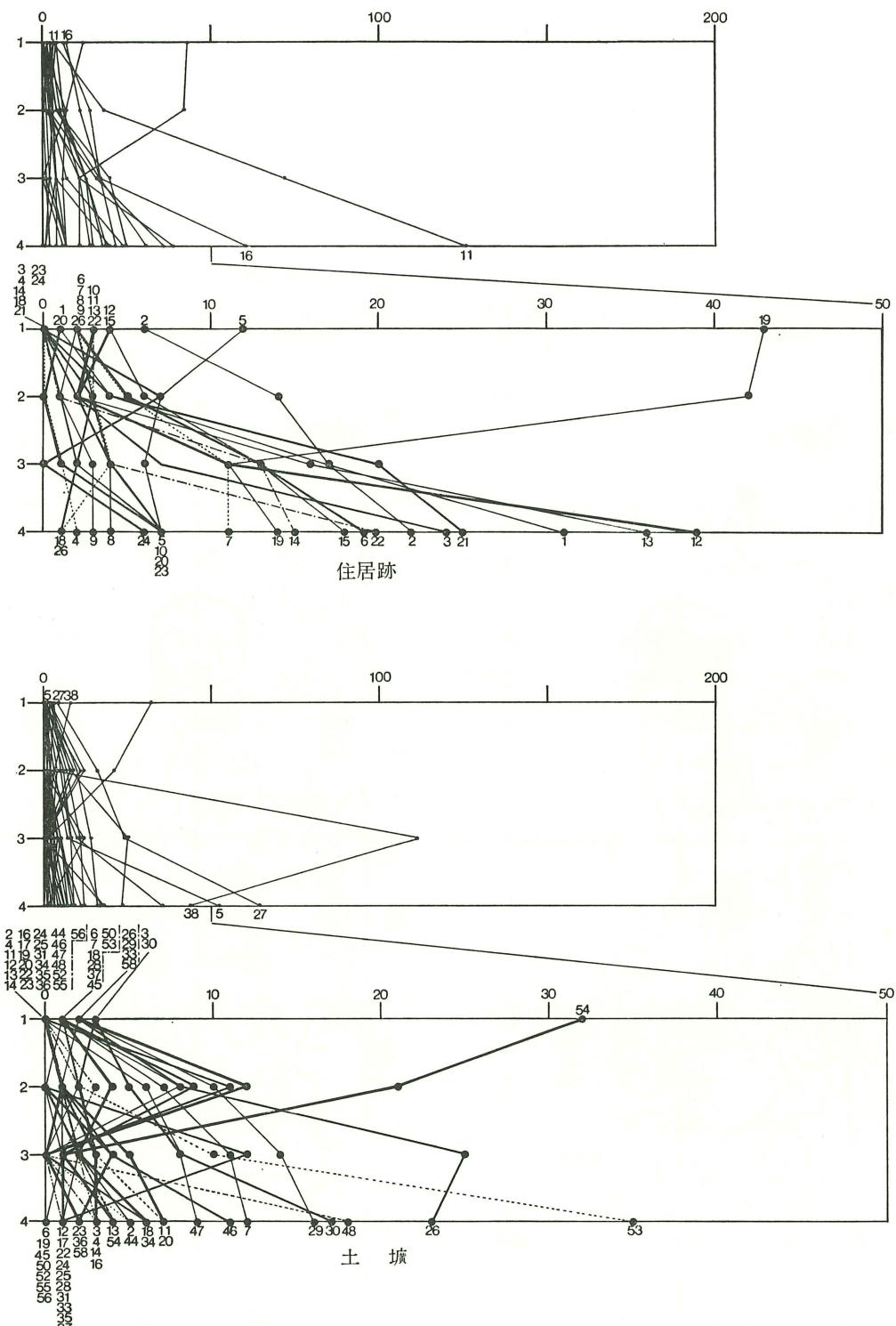
C. 円形で入口構造を有するが張り出さないもの

第1号住、第21号住、第22号住であり、いずれも第Ⅳ期に限定される。炉址を有する。主柱穴は多柱穴で第1号住、第22号住が第Ⅲ期に近い構造を有する。第21号住は主柱穴が壁にかなり近づいている。これらの上屋構造はCの住居跡に比して天井の高いものと思われる。

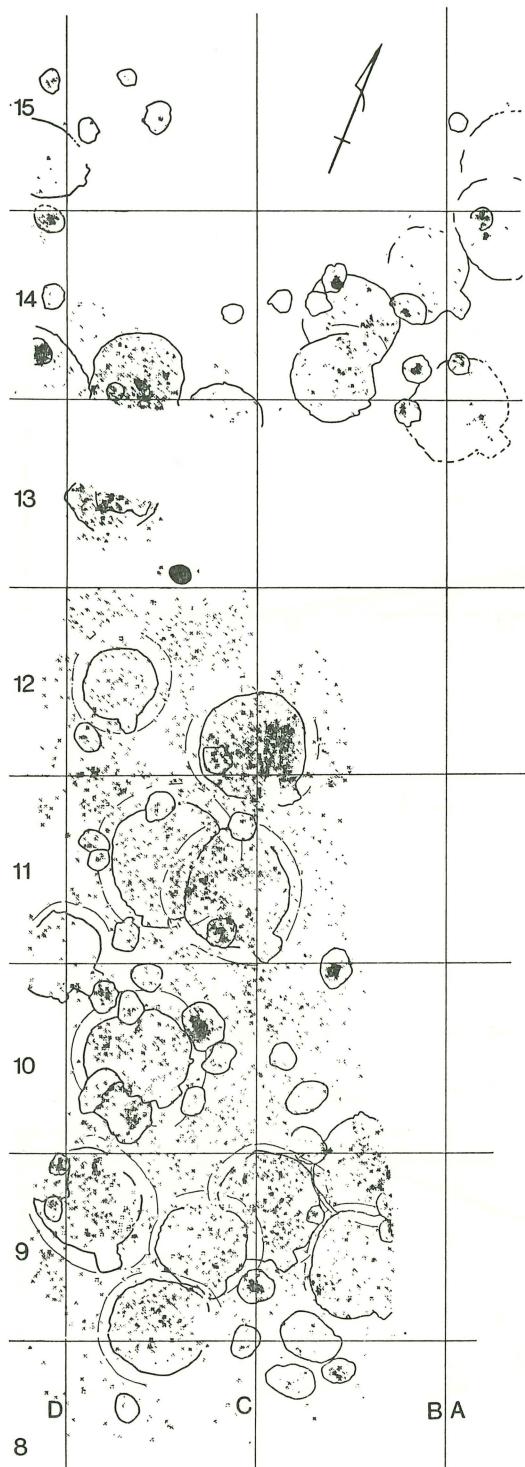
D. 楕円形状のプランを有し大型のもの

第2号住、第24号～27号住で第Ⅳ期に限定される。第2号住、第26号住は第Ⅲ期に近いごく短かい張り出しが付する。第24号・25号住だけに炉址が検出された。主柱穴は、第2号住、第24号住では壁に沿って楕円形に配されている上屋構造は不明である。これらは、Cの住居跡と対応関係を有する。

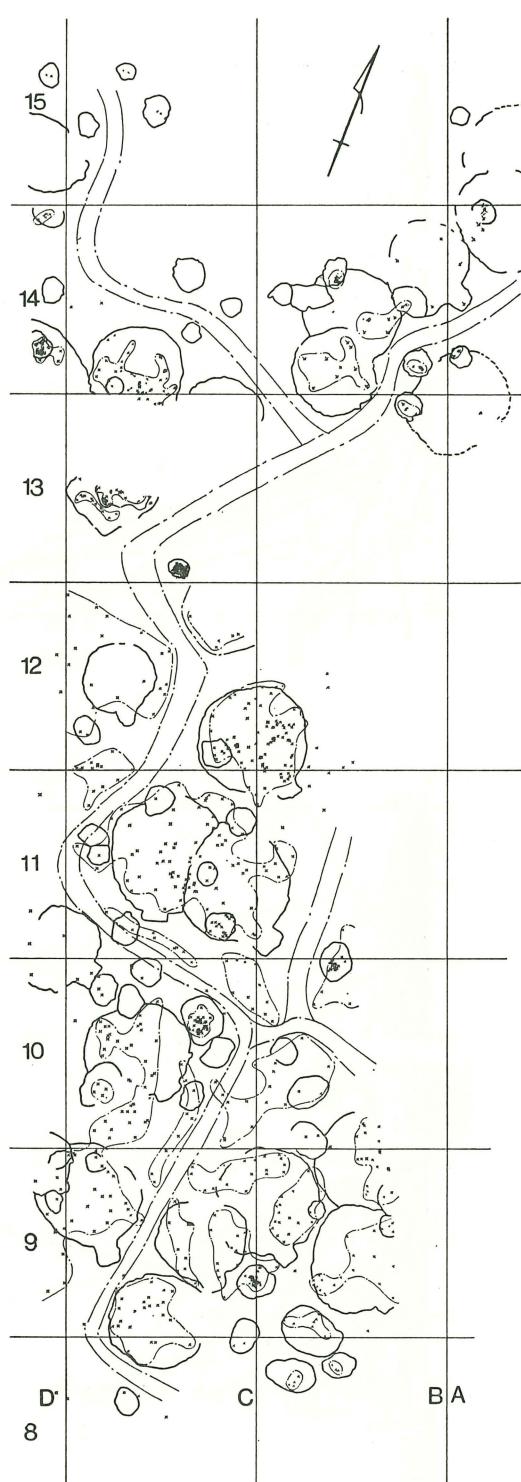
以上、住居跡について簡単にまとめた。第Ⅰ期の円形住居跡は従来の張り出し付きの住居跡に近いが全掘していない。特色を有する点は、第Ⅱ期、第Ⅲ期に属する称名寺式中ごろ～堀之内1式直



第170図 遺構出土土器分布図

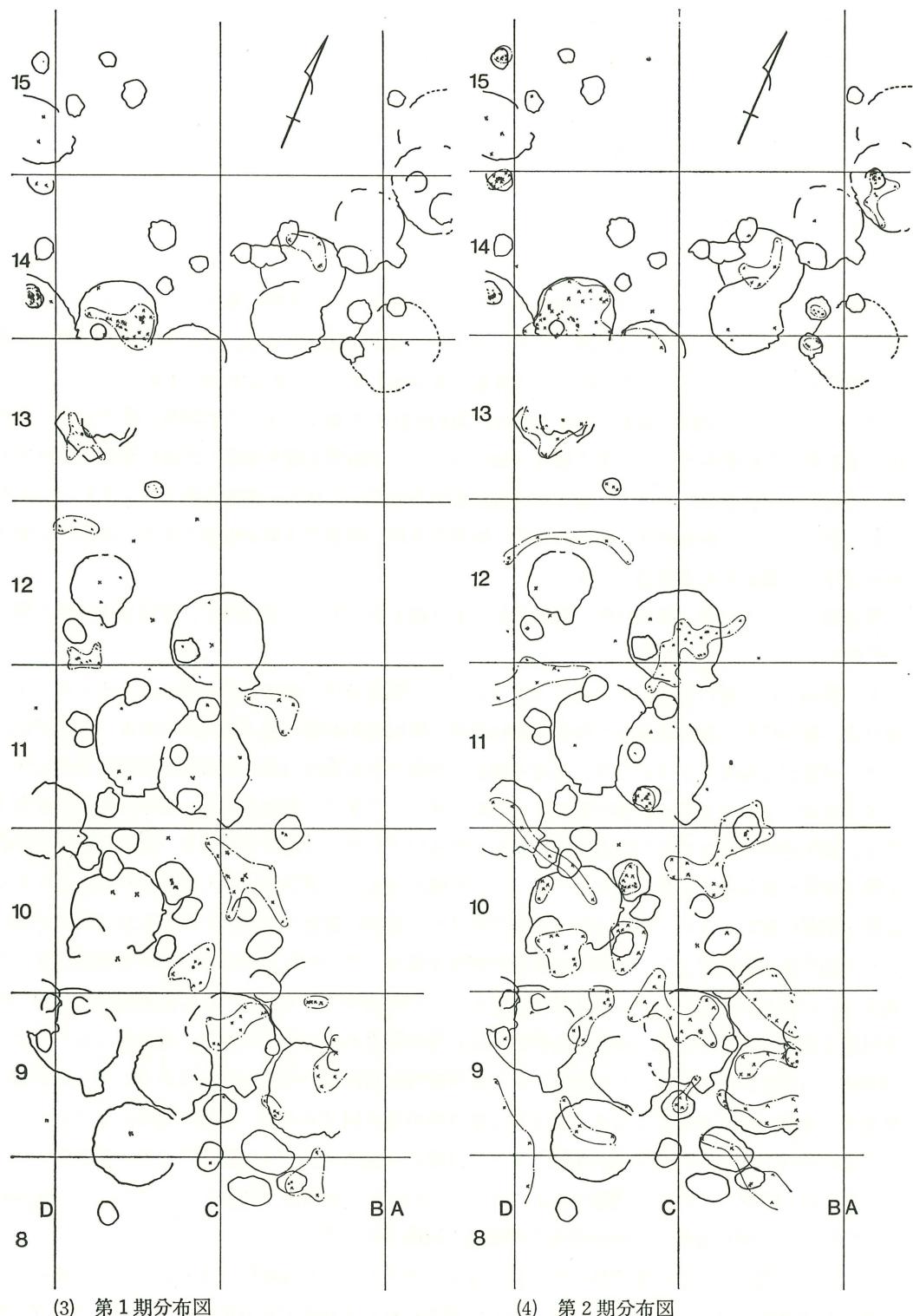


(1) 全点分布図



(2) 20g-29g土器片分布図

第171図 遺物分布図(1)、(2)



第172図 遺物分布図（3）、（4）

前段階の住居跡である。これらは類例が少なく、現状ではくわしい分析ができない。今後の資料の增加を持ってさらに検討する必要があるものと思われる。

1—2 縄文時代の集落について

第1期——第15号住（？）、第19号住、第5号住

1 第5号住、第19号住を中心とするブロック、第5号住をブロックとする2ブロックに分れる。この2つのブロックは、12C区で南側に曲がり、11C区でさらに東側に曲がるクランク状の道路で結びついている。その状況は分布図（3）、（4）で明瞭に観取される。ここでの分析の基礎は遺物の絶対量の不足と集落成立期という点で従来の遺物集中部分の分析が有効である。

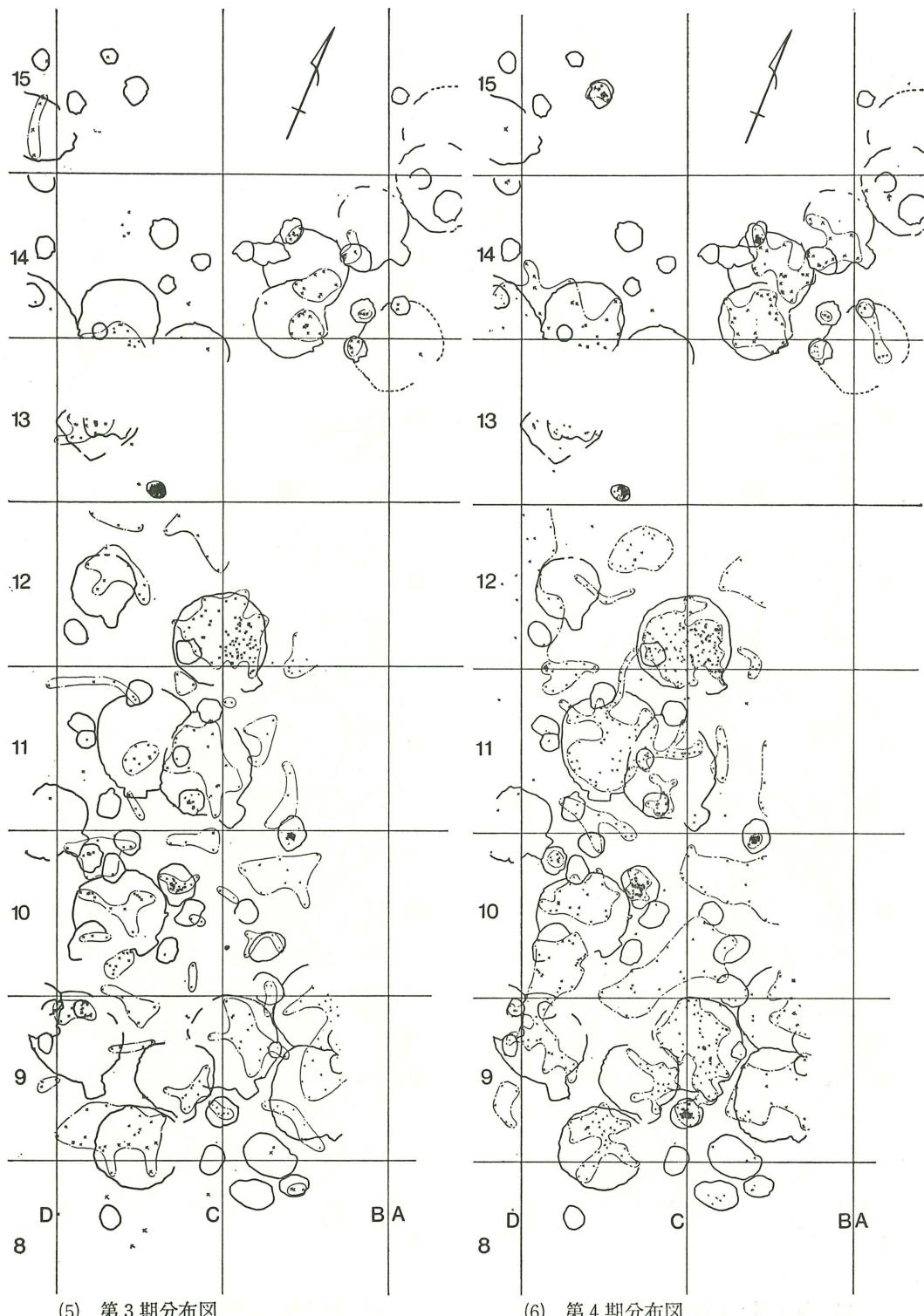
2 この成立期に明瞭に構築される土壙は、第19号住の西側に存在する第54号土壙である。その後、第1期の存続期あるいは、第2期成立期にかけて、第54号土壙と連動し北西に延びる第58号土壙、第50号土壙、北東にかけて、第56号土壙が構築される。これらと第19号住ブロックを結ぶ線が道路と推定される。南側では、同様の時期に第29号土壙、第28号土壙が構築される。第27号土壙は、第6号住との関係から否定的である。

第2期——第3号住、第10号住、第13号住（第3期と接続的）、第14号住、第18号住（第1期と接続的）

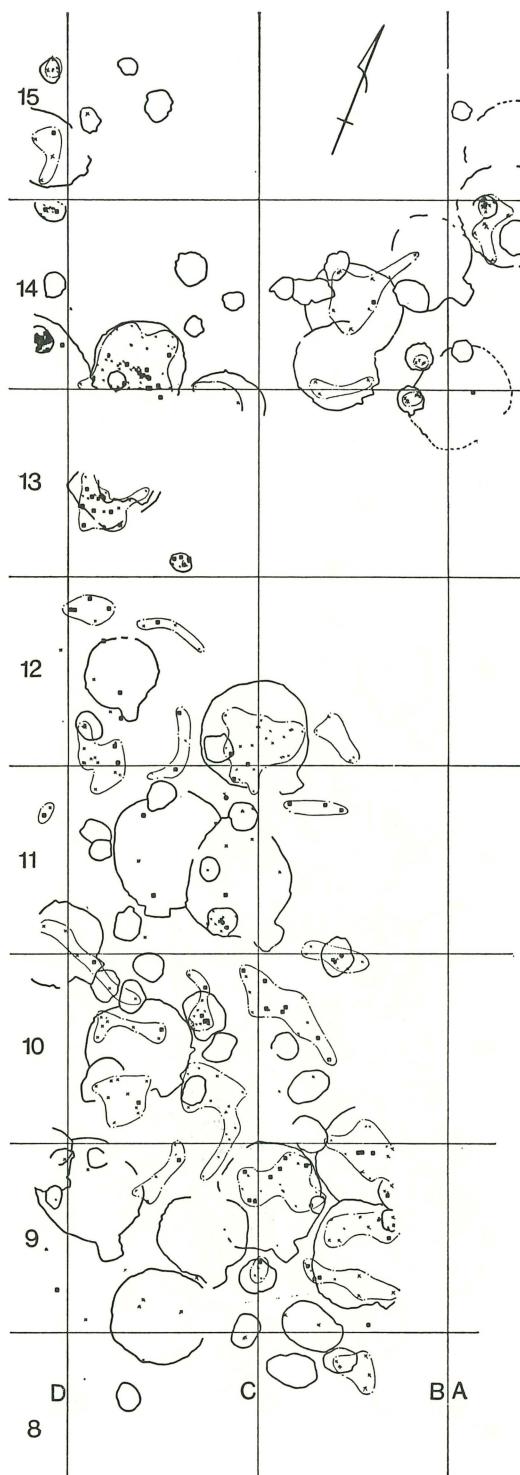
1 第10号住、第13号住、を中心とするブロック、第3号住、第14号住を中心とするブロックに分れる。第10号住、第3号住が先行し、第13号住、第14号住が第3期と接続的である。ここでは、全面に遺物が分布するようになり、従来の視点と逆転する遺物空白部分分析理解が基礎的視点となる。まず分布図（4）を見ると、第10号住が理想的パターンである。北側と南側、東側に遺物帶を有するが、第10号住付近はきれいに遺物空白部としてぬけている。（この空白部を一住居跡構成員の最少限・基本生活エリアと規定できるだろう）。同様な分布は、第14号住にも認められる。これも空白部が明瞭に観取される。第3号住も同様であるが、北側の遺物帶が貫入する。これは第14号住によって起りえる廃棄であり、一部第3号住の埋没が始まっていたと思われる。逆に分布図（3）を見るとこの状況が明瞭である。第3号住付近がきれいにぬけている。又、11C区第12号住、第13号住付近も遺物空白部である。両者の前後関係は以降の埋没過程で決定される。分布図（5）では第13号住での埋没が観取され、分布図（6）では第12号住居跡への埋没が明確である。さらに子細に見ると分布図（8）が参考となる。第2類と第3類の複合図であるが、西側の状況、すなわち、第3号住の埋没と住居外の遺物帶が明瞭である。同様に分布図（9）でも確認できる。分布図（11）では逆に第12号住への埋没が理解されるであろう。われわれが現場で理解しようとした先後関係と逆になった。第14号住と、第16号住との関係も同様であった。

2 では、第1期とした住居跡の埋没状況はどうであろうか。分布図（4）、（5）に明らかである。第19号住では、分布図（4）では全面に認められた遺物分布が分布図（5）では中央部に集中する典型的レンズ状の堆積を示している。第15号住も同様である。

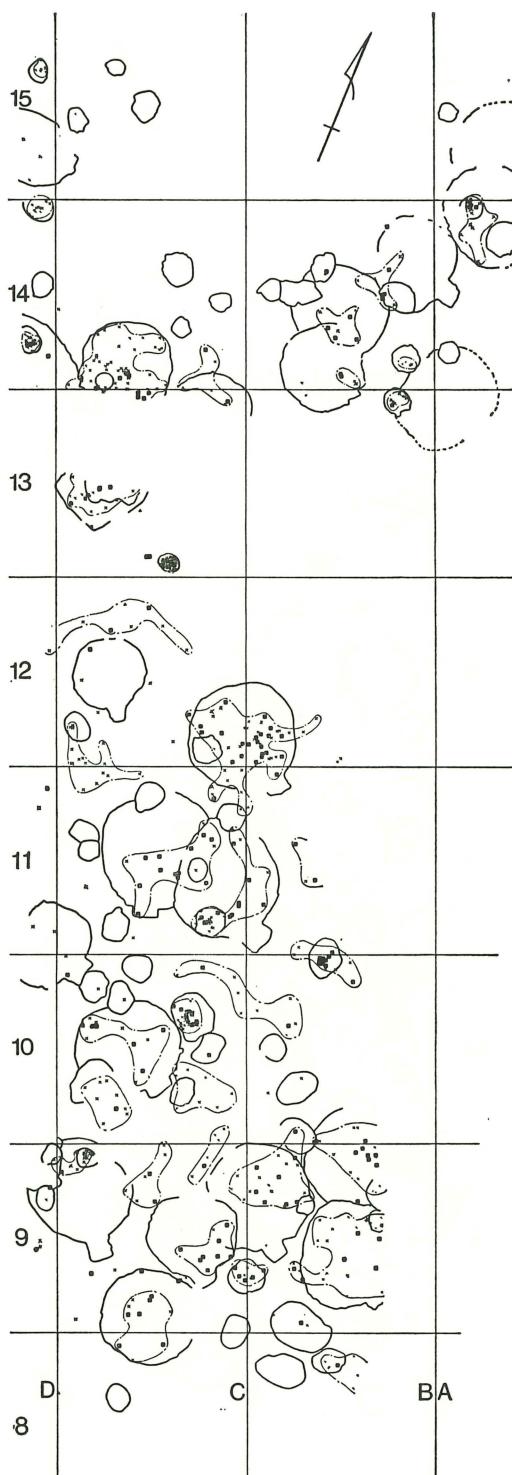
3 土壙の状況は、分布図（4）で第1期終末～第2期初頭の状況を述べている。次に第2期終



第173図 遺物分布図(5)、(6)

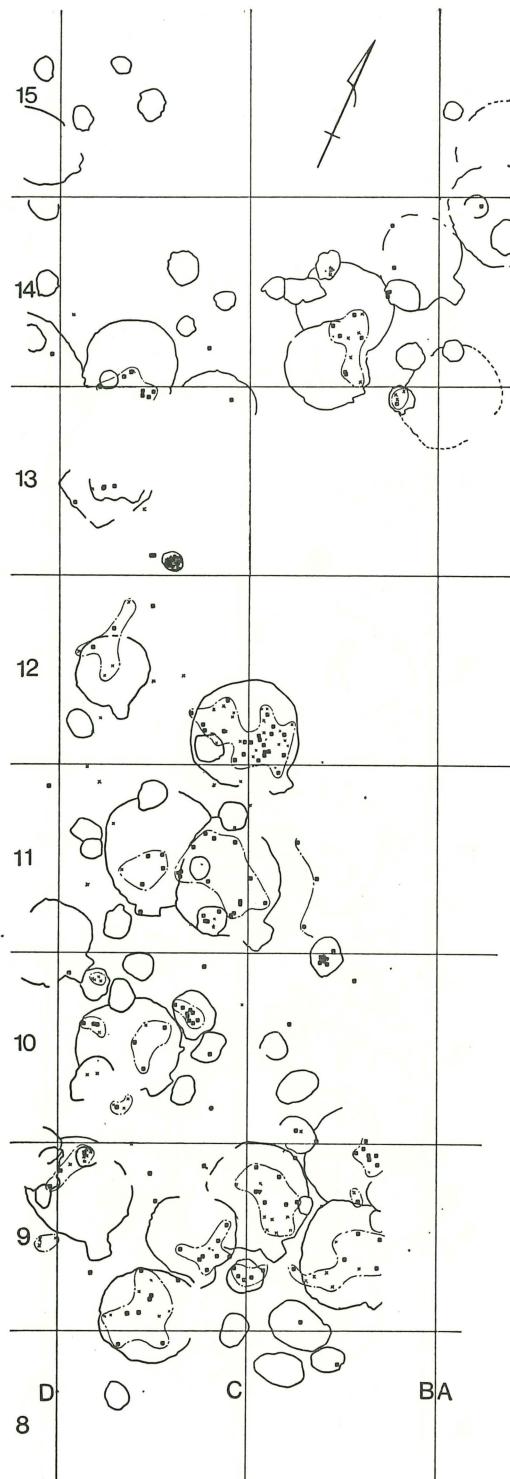


(7) 第1類・2類分布図

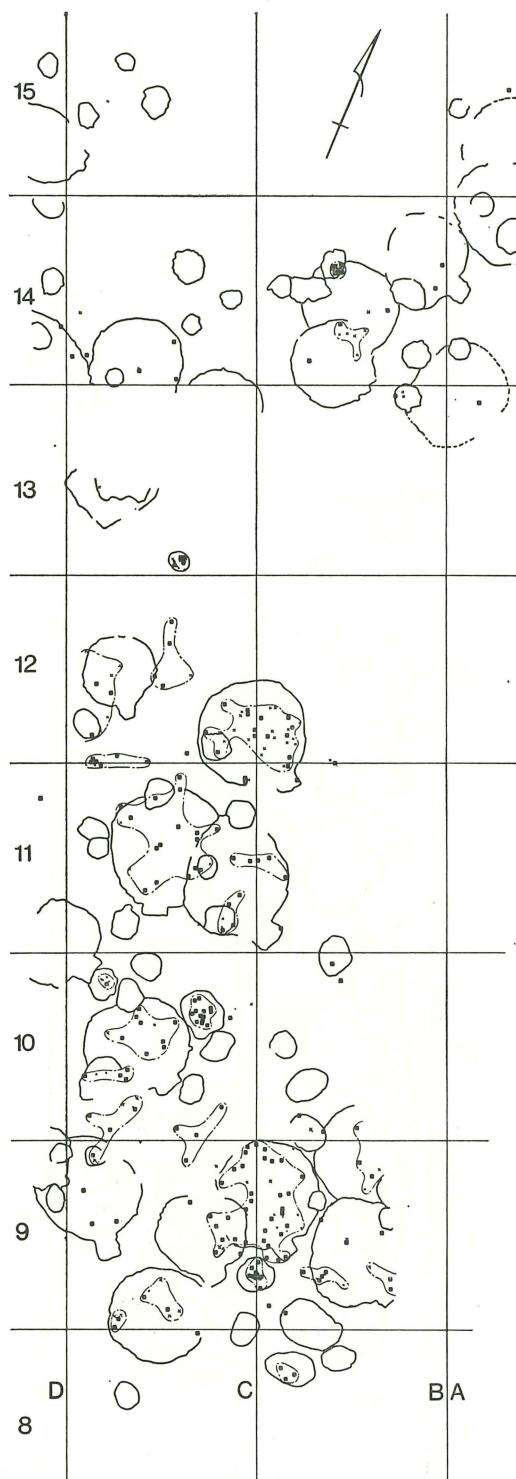


(8) 第2類・3類分布図

第174図 遺物分布図(7)、(8)

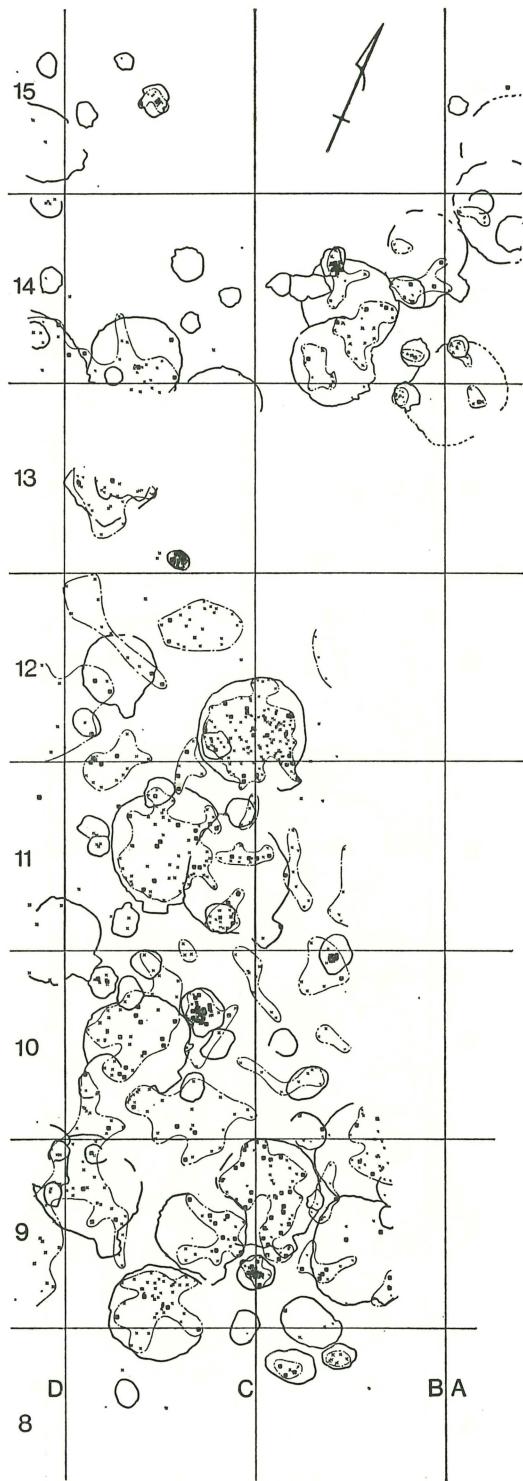


(9) 第3類・5類分布図

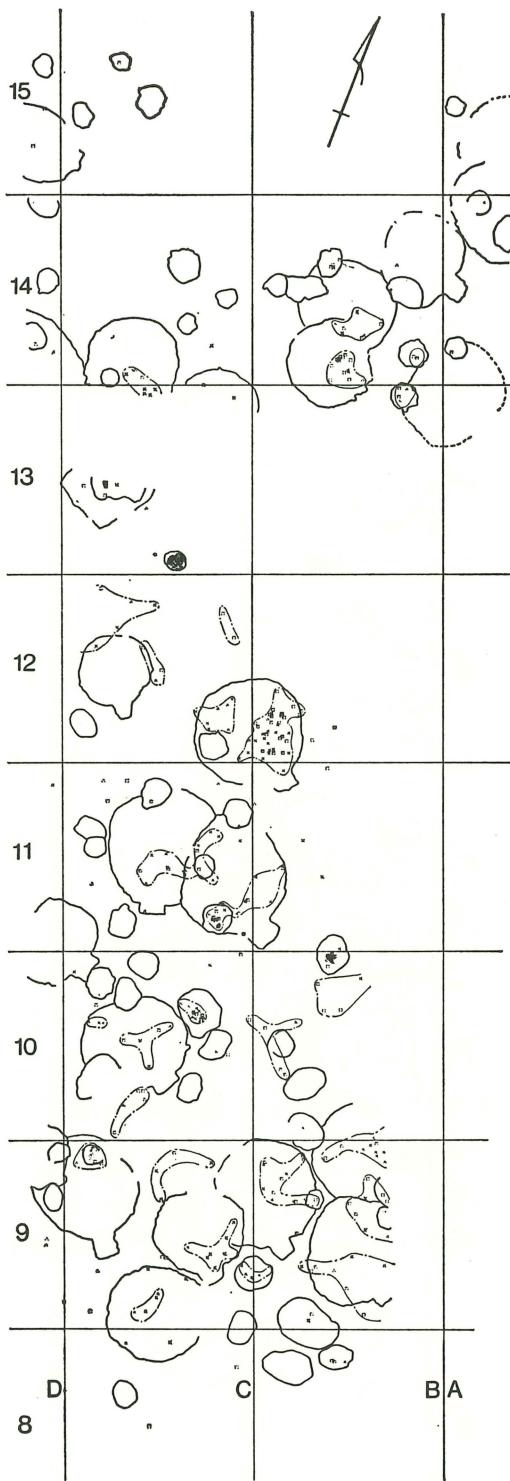


(10) 第5類・6類分布図

第175図 遺物分布図(9)、(10)



(11) 第 6 類・9 類分布図



(12) 第 3 類・9 類分布図

第176図 遺物分布図 (11)、(12)

末～第3期初頭を見る。分布図（5）では、第54号土壙、第58号土壙、第50号土壙、第56号土壙、第28号土壙の埋没が終了している事を物語る。第2期に構築されたものとしては、第26号土壙、第35号土壙である。それぞれ第13号住、第12号住と関連する。

第3期——第4号住、第6号住、第7号住、第8号住、第11号住、第12号住、第16号住、第20号住、第23号住、第26号住

本集落で最も多くの住居跡が分布する。最盛期である。まず北側では、第26号住が1ブロック、第20号住、第23号住が1ブロックである。これらは決定的ではないが、張り出し部形状より第Ⅲ期とせざるを得ない。次に第7号住が1ブロック、第11号住、第12号住が1ブロック、第6号住、第8号住が1ブロック、第4号住、第16号住がそれぞれ1ブロックである。

次に個々に見ていく。分布図（5）では第11号住、第12号住、第6号住、第4号住、第16号住の周辺部に遺物空白部が認められる。第12号住は空白部が多くほぼ明瞭にこの時期と想定されるが、第11号住はかなり遺物が入っており、第12号住に先行する。この状況は分布図（9）、（10）、（12）によっても明らかである。第6号住、第16号住も分布図（5）によってわずかに遺物が入るがほぼこの時期である事がうかがえよう。さらに分布図（9）～（12）によってその過程が明らかにされよう。第4号住、第8号住は遺物が少なく明らかでない。第7号住は、完形に近い土器が出土し炉址中心に分布する。

2 第2期の埋没過程は第10号住、第14号住でわずかではあるが確認される。第3号住の遺物が少ないが新たに第36号土壙が設置され廃棄が始まっている。分布図（9）、（10）

3 土壙は分布図（5）で明らかなように第38号土壙、第35号土壙が新たに分布図に登場する。第29号土壙、第26号土壙も機能していたものと思われる。

第4期——第1号住、第2号住、第21号住、第22号住、第24号住、第25号住、第27号住

1 第4期になると北側に第21号住、第22号住、第24号住、第25号住のブロックと南側第1号住と第2号住のブロックに分化し、本集落の終幕を向える。本期は、入口部張り出しの退化傾向期として取られ時期決定は明瞭である。まず北側のブロックを見る。分布図（6）では第22号住中に第21号住に属するリング状の遺物空白部が存在する。これは現場での認識通り、第21号住が新しい事を物語る。これに対応するように第24号住が第25号住を切っており、第21号住と第24号住、第22号住と第25号住が対応する事が明らかである。次に南側ブロックを検討する。分布図（6）で明らかなように第1号住、第2号住の周囲が明瞭に遺物空白部になっていることが理解し得ると思われる。

2 第3期の埋没状況は分布図（6）によって第20号住、第23号住でもわずかに確認される。第6号住、第7号住、第12号住、第16号住においてそれぞれ遺物分布が拡大している事が理解される。ただ第11号住は第3期～第4期にかけてかなりの遺物分布が認められる点注目される。

3 土壙は第4期になるとかなり多くなる。分布図（6）で見ると第5号土壙、第11号土壙、第26号土壙、第30号土壙、第41号土壙、第46号土壙、第47号土壙、第48号土壙、第56号土壙等が新たに構築される。同時に第27号土壙、第38号土壙は第3期から継続していたものと思われる。第41号・47号・56号土壙は、第20号住を切っている事から、かなり継続して分布が認められるが当時期と

した。

以上、分布図を通して久台遺跡の時間的推移を遺物の廃棄と遺物空白部の推移から見てきた。次に空間的状況を見ていきたい。

1 第1期では遺物集中部分（分布図（3））、第2期～第4期で遺物空白部分（分布図（4）～（12））を分析すると各期を通じて変化の少ない部分がある。分布図（6）を例とすると第1号住北西部分から第12号住を回り、第12号・13号住の南側を通り、第15号住北側に到る部分と第26号土壙付近で屈曲し、第16号・14号・1号住北側の部分である。これらは当集落における道路と考えるかも知れない。さらに第19号住の北側を通加する部分と、第21号～25号住の南側に通づる部分に延びている。

2 1を介在とすることによって、各住居跡が道路で区画される事になる。区画内をA→Eブロックと仮称すると

Aブロック—第1号住、第2号住、第14号～16号住で構成される。第1期は第15号住1軒、第2期も1軒（第14号住）、第3期も1軒（第16号住）、第4期が2軒（第1号、2号住）に増加し、第1期～第4期まで継続する。

Bブロック—Aブロックと道路を隔てた西側に位置し、第3号住、第4号住、第6号住、第8号住より成る。第2期が1軒（第3号住）、第3期が3軒（第4号住、第6号住、第8号住）であり第2期・3期の2時期である。

Cブロック—Bブロックと道路を隔てた北側に位置し、第11号～13号住より成る。第2期が1軒（第13号住）、第3期が2軒（第11号住、第12号住）の2時期である。

Dブロック—Cブロックと道路を隔てた西側に位置する。第5号・7号・18号・19号・27号住より成る。第1期は2軒（第5号住、第19号住）、第2期は1軒（第18号住）、第3期は1軒（第9号住）、第4期は1軒（第27号住）で、第1期～第4期まで継続する。

Eブロック—Dブロックの北東側に位置する。第20号～25号住より成る。第3期が2軒（第20号住、第23号住）、第4期が4軒（第21号住、第22号住、第24号住、第25号住）であり、第3期、第4期の2時期である。

以上であり、第1期～第4期まで継続するブロック—A、D、第2期～第3期のブロック—B、C、第3期～第4期のブロック—Eである。これらの各ブロックは時期的断絶がない事から一家族の占地状況と考えられなくはない。

3 各グロックを除外して各住居跡の対応関係を見ると、

第1期—第5号住と第19号住が対応する。南関東系と、北関東系住居跡の対応関係である。土器様相にも明瞭に表われている。第15号住は不明。

第2期—第3号住と第14号住、第10号住と第13号住が対応関係にある。小型と大型の組み合わせで、大型のものは炉址ピットを持たない。第18号住は不明。

第3期—第16号住と第4号住、第6号住と第8号住、第11号住と第12号住、第20号住と第23号住が対応関係にある。第7号住は唯一完成品に近い土器を出土した特殊な小型住居跡である。第11号

住と第12号住の関係を除けば、大型と小型の対応であり、小型は特殊な形状である。又、第11号住居跡に巨大な炉址が出現する。小型には炉址状ピットがない。

第4期—第1号住と第2号住、第21号住と第24号住、第22号住と第25号住が対応関係にある。円型と大型楕円形住居跡の組み合わせが明瞭である。第2号住には炉址がなく前段階的対応関係であるが他は各住居跡に炉址が付される。

以上の内、ブロックを越えた対応関係はAブロックとBブロックに関する2例だけであり、原則的にはブロック内の対応関係である。

4 土壙は一見乱雑に配置されているように見えるが、1で検討した、道路の概念を通して見ると主要土壙がいずれも道路際に配置されていることがうかがえる。

5 土壙は、各時期の住居跡と対応関係を有しており、それぞれ2~3個が存在する。

以上、当集落における構造を時期的側面と空間的側面から遺物分布図を通して検討した。本項では具体的データを提出する事を目的とした。今後さらに各面からの検討が必要であろう。又、これらのデータに対する意味付けも必要とされるであろう。今後の課題としたい。

2 繩文時代後期初頭の土器について

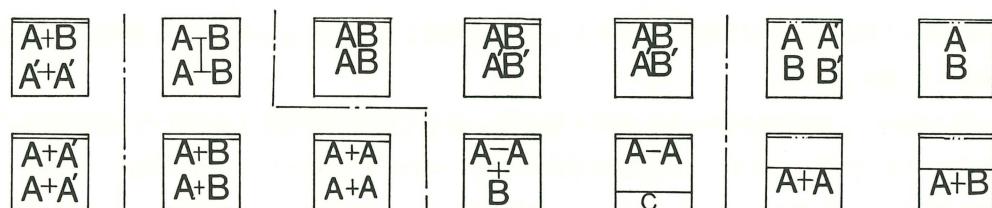
本項では土器分類の基準と第1期~第4期の大枠を把握する事を目的とする。

2-1 土器分類の基準

本遺跡では、分析に耐える完形品が少なく、いきおい分類の基準を細片に置かざるを得ない状況であった。以下、分類の基準と位置付けを行なう。尚、R—隆起線、J—縄紋、C—沈線、Ct—刺突の略号を行い、それぞれの配列が先後関係を示す。

第1類—R→J系列のもの。加曾利EⅣ式隆起線文系列にその系譜を求められるもので本遺跡では大部分が後期段階のものである。第19号住、第54号土壙、第58号土壙で出土している。第1期~第2期にかけて称名寺式と伴出する。

第2類—C→J系列のもの。この類は2系統を含む。第1の系列は加曾利EⅣ式沈線文系列であり、第19号住、第54号土壙でわずかに出土する。第2の系列は称名寺式土器である。本遺跡では細片のため大部分を第2期とした。



第177図 繩文時代後期初頭土器系統図

第3類——C→Ct系列。沈線文中に刺突文を充填するもので称名寺Ⅱ式にあたる。充填手法、文様モチーフ等で第2類と連続的である。第3期。

第4類——Ct系列。沈線に区画されない刺突文が配されるもの。三十稻場系統に近いもの。

第5類——J→C→研磨系列。狭義の磨消繩紋を胴部に配するもの。称名寺Ⅱ式に伴行するものから堀之内Ⅰ式最古までの幅があるが一応第3期とする。

第6類——J→C系列。繩紋を地文として沈線文を配するもの。東関東系の堀之内Ⅰ式である。第5類の新しい部分と接続的である。第4期。

第9類——C系列。沈線文を唯一の文様とするもの。2系列ある。第1は櫛状工具による沈線文を有するもの。口縁部を無文とし、沈線、隆起線文で口縁を区画し胴部に櫛状工具による沈線文を配するものが大部分である。第3期、第4期である。第2は沈線文を主体とする西関東の堀之内Ⅰ式土器である。この系列は称名寺Ⅱ式と接続的である。第3期、第4期。

以上、主要な分類基準を示した。尚、第7類は繩紋だけのもの。第8類は現状で無文のものである。

2—2 第1期～第4期の置付け

久台遺跡の分析に際して、第1期～第4期の大枠を定めて行なった。この大枠について簡単に説明しておきたい。当遺跡では前述したように細片が多いため全体を見通す事が出来ない。従って、代表的な他遺跡の土器を補足して位置けたい。

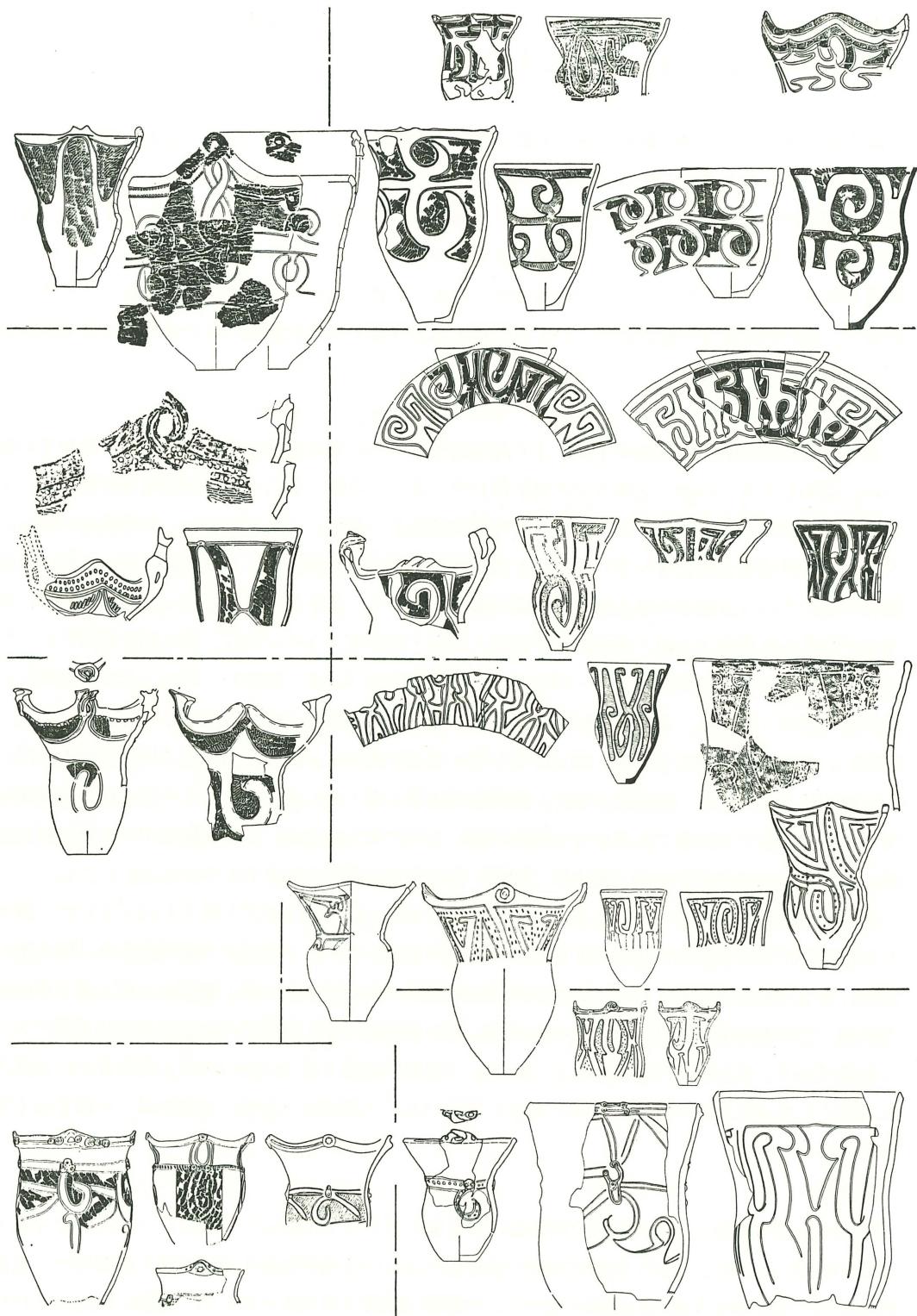
第1期

称名寺式の古い段階、今村編年Ⅰa、Ⅰb式を目安とした。久台遺跡では第5号住、第19号住、第54号土壙等がこの時期である。残念ながら分析できる資料は少ない。この期の称名寺式の原則的文様構造は、①文様の2段構成、②構方向に連結する(a+b)の対立構造(異なった2種の文様、例えば「J」字状文と「I」字状文を交互に配する)、③上限閉鎖、下限開放型(上限一部突出開放、下限開放型を含む)である。従って在地化される称名寺式は上述3点が加曾利EⅣ系統の分立・相同構造・上限開放、下限開放型と交換される事によって行なわれる。

この期最古、又は前段階と思われる東京・前原第4号住(伊藤 1976)、新山第21号住(山崎 1981)等は、加曾利EⅣ式・CJ系列の分立・相同構造・上限開放、下限開放型が②の(a+b)対立構造に交換されたものである。この段階以後、CJ系は称名寺式に交換されていく。

次段階、①～③を有する称名寺式は 称名寺、大蔵(今村 1977を参考)、東庄内A(谷本 1970)、皿沼第7号住(青木 1983)、古作貝塚第1号住(岡崎 1982)、廻り地A第959号土壙(瓦吹 1982)等で出土しており、従来の南関東中心から確実に北関東東部地方に延びており、大木10式の相同構造・上限開放、下限閉鎖型を②の対立構造に交換し、さらに分立型とした網取C(金子 1968)の土器に達する。

以上と同時か、やや後出的な称名寺式土器が①～③を在地の文様構造と交換する土器群である。志久第8号住(筮森 1976)、馬込第10号住(庄野 1973)、金楠台第1号住(沼沢 1974)、砂川第2号埋設土器(渡辺 1982)等がある。志久例は②について図と地を反転させる事によって加曾利EⅣ系列の分立・相同構造とし、③を上限開放、下限開放型とする。砂川例も同様にして分立構



第178図 繩文時代後期初頭土器系統図

造とするが $(a + b)$ の対立構造を残している。馬込例は②の対立構造を有するが、③を上限開放、下限開放型とする。金楠台例は横位連結を残すが②を相同構造とし、③を上限開放、下限開放型とする。

以上の称名寺式に加曾利EⅣ系列の土器が伴出する事は明らかとなった。（笛森 1976）、（谷井 1976）、（青木 1977）、（今村 1981）。さらに、廻り地A、砂川といった中心地である北関東東部地域の状況が判明するに到って増え明瞭化しつつある。とりあえず、志久第8号住、野伝場第1号住（岡崎 1982）を上げておく。分析は始まったばかりであるが、加曾利EⅣ系列の文様構造を残すもの（志久）、ほとんど称名寺式の構造に交換されるもの（野伝場）がありそうで、隆起帶文、横位刺突帶等が配される。いずれにせよ称名寺式との伴出関係、中心地である東関東地域での分析が急務であろう。

第2期

称名寺式中位段階、今村編年Ⅰb、Ⅰc式を参考とした。当遺跡では良好な資料が出土していないが、第56号土壙、第58号土壙等で内容把握ができる。この期の称名寺式の原則的文様構造は、①2段構成の崩壊と縦位連結、② $(a + b)$ の対立構造を一体化し $(a b)$ とし、相同構造へ持ち込もうとするが完全分立とならずに各接点が結合する、③ほぼ上限開放、下限開放に統一され、分立傾向の強いものは文様中の無文部と上限開放部が結びつく。清水が丘第2号住（坂詰 1984）、貫井2丁目J—2号住（玉口 1984）、小豆沢・宮台・向井町（今村—1977、第6図を参考とした）、坂東山A地点称名寺式第14号土壙・同第12号土壙・同甕棺（谷井 1972）、柵谷（青木 1976）、丸ヶ崎（下村 1976）、湯坂・楓沢・上長井等（海老原 1980を参考とした）、吹上（上川名 1972）、廻り地A第186号土壙・第444号土壙・第493号土壙、砂川第107号土壙等で出土している。概して、 $(a b)$ 一体傾向が強く、南関東では第4期とした堀之内Ⅰ式まで引き続く文様構造である。北関東でも同様であるが分立傾向の強いものに吹上有る。又、北関東では、廻り地A第493号土壙、八日市泉藤倉山（海老原 1980）等の独自の構造を有するものがある。

この期の加曾利EⅣ式系列の土器は清水が丘第2号住、砂川第107号土壙を上げておいた。清水が丘例は志久第8号住例の加曾利EⅣ式系列本来の構造を有するが各接点で結合化され、図と地の反転によって称名寺式化される。砂川例は横走刺突帶が口縁部に上がり、胴部の上位文様が横帶化される。この胴部上位文様の横帶化はこの期、及び第3期（古）段階での加曾利EⅣ式系列の大きな特徴であり、砂川遺跡で多く出土している。今村氏の指摘する（今村 1981）隆起帶上に沈線に入る例として沼尾原例（橋本 1980）を示しておいた。上布田例（赤城 1979）はこの期が第Ⅰ期後半であろう。

第3期

称名寺Ⅱ式を相定した。原則的文様構造は第Ⅱ期と変わらずに決定的な差はC→Ct手法に変換する事である。しかし、（古）段階では分立化を強めるC→J系も存在する。（新）段階では、沈線化が始まり加曾利EⅣ系列の変動を受けて、口縁部文様帯を取り入れるもの、頸部に無文部を持つもの等が出現する。この期最古、又は第2期と接続的なものは、馬場（青木 1969、1971）、宮代町前原第8号住（青木 1983）、砂川第107号土壙、中野僧御堂第41号土壙等がある。この期は称

名寺式にあまり変化なく、馬場例のように分立化が強まるC→J系がある。前原第8号住ではC→J系とC→Ct系が出土する。砂川では馬場と同じく分立化の強いC→J系である。この段階の加曾利EⅣ系列は、横走刺突帶の退化と胴部上位の横帶化が認められ、胴部下位とは分断する。砂川例では上限開放、下限閉鎖型となっており、中野僧御堂例も下限閉鎖型であり東北南部との関連が深い。再度強調しておきたいのは胴部文様が上位と下位に完全に分離する点で、称名寺式には全く認められない構造である。これは、第3期終末の金楠台、北の内等と深く関係する。以上、前原第8号住をさほど時期差のないものと想定したため第3期（最古）としたが砂川全体を通してC→Ct系の土器が全く出土していない点、愛谷（馬目 1982）でも第2期の称名寺式が出土するらしい点等々を考えるとこの段階までを第2期とするのが妥当なのかも知れない。

中位段階、典型的称名寺Ⅱ式が位置する。称名寺B（吉田 1960）、鉈切洞穴（金子 1958）、北袋（下村 1974）、裏慈恩寺東第3号住（並木 1978）、足利埋甕2（鈴木 1980）、馬込大原第2号住（鈴木 1983）、北の内Ⅲ区第1号埋甕、第2号埋甕（岩上 1979）等で出土している。称名寺式の文様構造を引継ぎC→Ct手法となる。このCt化については種々の見解があるが、当期における関東～東北地方の状況によると三十稻場式系統の影響とするのが妥当であるが、今後の課題である。又、この段階の加曾利EⅣ系列の土器群も明らかでない。網取Ⅰ式との関係が当然予想されるがもう一步各系列との関係が明らかでなくこれも今後の課題であろう。

（新）段階。沈線等による口縁部文様帯が見られ、南関東での沈線化が進む。胴部で屈曲する器形を有するものに横走区画が入る。各地に類例があるが、平尾（安孫子 1971）、貝の花（関根 1973）、堂原（増田 1974）、北塚屋第107号土壙（市川 1983）、金楠台、北の内Ⅱ区第2号土壙、さら遺跡第19号・26号・35号土壙（鈴木 1983）等を上げておく。本遺跡では第7号住、第11号住、第38号土壙等で出土している。貝の花、堂原例は口縁部文様帯がある。特に貝の花は分立化が強い。北塚屋例は称名寺式の文様構造を持つものと胴部文様が上下に分断されるものがそろっている。金楠台、北の内例は加曾利EⅣ系列第3期（古）の胴部上位横帶文が消失した結果、頸部無文部が成立したものと思われる。J→C→研磨手法である。本遺跡第7号住例に影響が及んでいる。

第4期

堀之内Ⅰ式（古）段階である。C系とJ→C系に分離する。C系は称名寺式の文様構造を守っている。J→C系は、第3期（新）北の内、金楠台等から胴部で屈曲し横区画、頸部無文とする深鉢Bが生じる事は明らかである。又、称名寺式の文様構造はさらに分立化を強め網取系の文様構造をも受けて（鈴木 1980、1982）堀之内Ⅰ式に変化する。以上、基本として3つ系列が存在し、それに網取系列の土器が加わり複雑な状況を呈する。第3期（新）～第4期はかなり煩雑で小スペースでは説明し切れないので割愛する。本遺跡第59号土壙、皿沼第8号住が若干新しいが良好な資料である。

以上、今村編年を参考として、文様構造の面から概観して第1期～第4期の大枠を見て来た。目安として図示したものは第4期を割愛した。細部記述や各部時で混乱している部分もあるが、文中で指摘した問題点とともに今後の課題として追求していきたい。尚、文末に示す引用参考文献は、縄文時代後期初頭の土器群に関する部分のみ掲げ、他の大部分を省略した。御寛容願いたい。

引用・参考文献

- ⑦会田 明他 1977 「関沢遺跡第2地点」 富士見市文化財報告XII
青木秀雄 1977 「称名寺式土器の再検討」 埼玉考古第16号
青木秀雄他 1983 「前原遺跡」 宮代町文化財調査報告書 第1集
青木秀雄他 1983 「皿沼遺跡発掘調査報告書」 白岡町文化財調査報告書 第1集
青木義脩他 1969 「馬場遺跡発掘調査概報」 浦和市教育委員会
青木義脩他 1971 「馬場遺跡第2次調査報告」 浦和市教育委員会
青木義脩他 1976 「門谷遺跡」 東北自動車道浦和市内発掘調査報告書
安孫子昭二他 1970 「神明貝塚」 庄和町文化財調査報告 第2集
安孫子昭二他 1971 「平尾遺跡調査報告 I」 南多摩郡平尾遺跡調査会
赤城高志 1979 「調布市上布田遺跡第II地点(仮称)の調査」 東京都・遺跡調査研究発表会 V
④今村啓爾 1977 「称名寺式土器の研究(上)、(下)」 考古学雑誌 第63巻1・2号
今村啓爾 1981 「柳沢清一氏の『称名寺式土器論』を批判する」 古代第71号
今井啓爾 1981 「主要遺跡・図版解説」 縄文土器大成 —3—後期
伊藤富治夫他 1978 「前原遺跡」 国際基督教大学考古学研究センター
泉 拓良 1982 「西日本縄文土器再考」 考古学論考一小林行雄博士古稀記念論文集—
岩上照郎他 1979 「北の内遺跡」 栃木県教育委員会
市川 修 1983 「塚屋・北塚屋」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第25集
②海老原郁雄他 1980 「栃木県内の称名寺式土器」 栃木県考古学会誌 第5集
④大宮市史編さん室 1968 「大宮市史—第1巻—」
岡崎文喜他 1980 「古作貝塚」 船橋市遺跡調査会、古作貝塚調査団
岡崎完樹他 1982 「野伝場遺跡・東野遺跡」 川口市遺跡調査会報告 第3集
小川良祐他 「前島・島之上・出口遺跡」 埼玉県遺跡調査報告書 第12集
折原 繁 1977 「関東地方における縄文時代中期末の土器群」 研究紀要2 千葉県文化財センター
折原 繁 1976 「千葉市中野僧御堂遺跡」 千葉県文化財センター
⑦柿沼修平 1973 「いわゆる称名寺式土器に関する二、三の疑義」 史館 創刊号
柿沼修平 1981 「称名寺式土器」 縄文文化の研究 一縄文土器II—
金子浩昌他 1958 「鉈切洞穴遺跡」 千葉県教育委員会
金子浩昌・和田 哲 1968 「網取C地点貝塚の発掘」 小名浜 いわき市教育委員会
上川名 昭 1972 「大洗吹上遺跡」 大洗吹上遺跡調査団
瓦吹 堅他 1982 「廻り地A遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告 XV
⑦栗原文蔵 1959 「河原塚貝塚」 『松戸市河原塚古墳』 松戸市誌編さん委員会
栗原文蔵 1962 「大蔵遺跡」 新修世田ヶ谷区史付編
④笛森健一他 1976 「志久遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告 第31集
笛森健一 1977 「縄文時代住居の一考察」 情報2、3 埼玉考古学会
坂誌秀一・中野良一 1984 「府中市清水が丘遺跡」 東京都・遺跡調査研究発表会 IX
⑦下村克彦 1973 「称名寺式土器の意匠」 埼玉考古第12号
下村克彦他 1976 「丸ヶ崎遺跡発掘調査報告」 大宮市文化財調査報告第10集
庄野靖寿他 1972 「加倉・西原・馬込・平林寺」 埼玉県遺跡調査会報告第14集
⑦鈴木保彦 1972 「東正院遺跡調査報告」 神奈川県教育委員会
鈴木保彦 1977 「下北原遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告 14
鈴木敏昭他 1980 「足利遺跡」 久喜市埋蔵文化財調査報告書

- 鈴木徳雄 1980 「縄文後期文化の成立（予察）」 土曜考古 第2号
- 鈴木敏昭・藤原高志他 1983 「さら・帆立・馬込新屋敷・馬込大原」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第24集
- ②関根考夫 1973 「貝の花貝塚」 松戸市文化財調査報告 第4集
- ⑦谷井 彪他 1973 「坂東山遺跡」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第2集
- 谷井 彪 1977 「称名寺式土器の推移について」 埼玉県立博物館紀要 3
- 谷井 彪・宮崎朝雄他 1982 「縄文中期土器群の再編」 『研究紀要』 埼玉県埋蔵文化財調査事業団
- 玉口時男・小金井靖他 1984 「練馬区貫井2丁目遺跡」 東京都・遺跡調査研究発表会 IX
- 谷本銳次 1970 「東庄内A遺跡」 三重県埋蔵文化財調査報告 5
- ⑤寺村光晴 1961 「武藏野市御殿山遺跡調査報告」 武藏野市史資料編
- ④中島庄一 1981 「土器文様の変化—称名寺様式を中心として—」 神奈川考古 第12号
- 中島庄一 1982 「和田・百草遺跡群」 多摩市埋蔵文化財調査報告 3
- ③沼沢 豊 1984 「松戸市金楠台遺跡」 房総資料刊行会
- ①能登 健 1973 「狛江市坂上遺跡」 東京都教育委員会
- ⑤橋本 勉他 1980 「沼尾原遺跡」 鹿島町の文化財第11集 茨城県鹿島町教育委員会
- ⑤増田 修 1974 「堂原遺跡発掘調査報告書」 太田市教育委員会
- 馬目順一 1968 「網取第四地点発見の堀之内I式土器の考察」 小名浜 いわき市教育委員会
- 馬目順一他 1975 「大畑貝塚調査報告」 いわき市教育委員会
- ③宮崎朝雄・井上 肇他 1976 「岩槻市黒谷田端前遺跡」 黒谷田端前遺跡調査会
- 宮崎朝雄・鈴木秀雄他 1980 「卜伝」 埼玉県遺跡発掘調査報告書 第25集
- ②村田文夫 1975 「柄鏡形住居址考」 古代文化27
- 村田文夫 1979 「続・柄鏡形住居址考」 考古学ジャーナル 170
- ⑤山本暉久 1976 「敷石住居出現のもつ意味（上）・（下）」 古代文化 №205、206
- 山崎 丈他 1981 「新山遺跡」 東久留米市埋蔵文化財調査報告 第8集
- 柳田敏司 1965 「下加遺跡」 大宮市教育委員会
- ③吉田 格 1960 「横浜市称名寺貝塚」 東京都武藏野郷土博物館調査報告 第1冊
- 米田耕之助 1980 「縄文時代後期における住居形態の一様相」 伊知波良 3
- 米田耕之助他 1977 「西広貝塚」 上総国分寺台遺跡調査報告 III
- ⑦渡辺俊夫他 1982 「宮部遺跡・鹿の子A遺跡・砂川遺跡」 茨城県教育財団文化財調査報告 X VI
- 神奈川考古同人会 1980 「縄文中期後半の諸問題—加曾利E式と曾利式土器の関係」 神奈川考古 10号
- 市立市川考古博物館 1982 「シンポジウム堀之内式土器資料集—各地の堀之内式土器とその変遷」・「シンポジウム堀之内式土器の記録」
- 郷田良一他 1979 「木戸作遺跡（第2次）」 千葉東南部ニュータウン 7
- 郷田良一他 1982 「小金沢貝塚」 千葉東南部ニュータウン 10
- 郷田良一 1982 「いわゆる『柄鏡形住居址』について」 研究紀要 7 千葉県文化財センター
- 並木 隆 1978 「裏慈恩寺東遺跡」 埼玉県遺跡調査会報告書 第33集

VII 附 編

1 久台遺跡出土土器の胎土分析結果報告

井 上 厳

目 次

1 実験

1-1 試料

1-2 X線回折分析

1-3 電子顕微鏡観察

2 実験結果の取り扱い

2-1 組成分類

I) Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム

II) Mo-Ch、Mi-Hb菱型ダイヤグラム

2-2 焼成ランク

2-3 タイプ分類

3 実験結果

3-1 タイプ分類

3-2 石英(Qt) 一斜長石(Pl) の相関について

3-3 まとめ

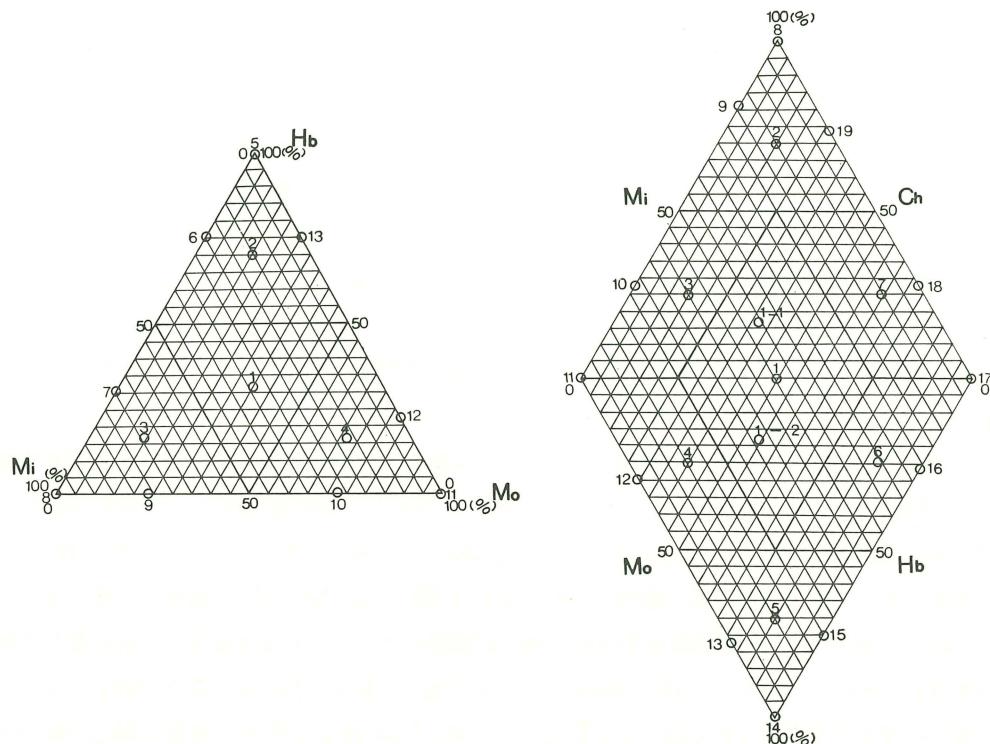
1 実験

1-1 試料

分析に供した試料は第5表胎土性状表に示すとおりである。X線回折試験に供する置物試料は洗浄、乾燥した後に、メノウ乳鉢にて粉碎し、粉末試料として実験に供した。電子顕微鏡観察に供する置物試料は断面を観察できるように整形し、 $\phi 10\text{mm}$ の試料台にシルバーペーストで固定し、イオンスパッタリング装置で定着した。

1-2 X線回折分析

土器胎土に含まれる粘土鉱物および造岩鉱物の同定は、X線回折分折法によった。測定には理学電機製X線回折装置を用い、X線管球、銅対陰極、フィルター、ニッケル、印加電圧—電流、30KV—15mA、スリット系、 1° —0、 15% — 1° の条件で行った。走時速度は、 $2^\circ/\text{mm}$ 、フルスケールは800カウントとした。なお、胎土の分析に先だって、原土と思われるローム質粘土の分析を行った。X線回折試験は原土・電気炉において700°C、900°Cで各々1時間焼成した試料（同一試料を石英ガラスに定着し、原土、700°C、900°Cと順次実験を行う）の3段階で実施した。その結果、組成上に大きな変化のないことを確かめた上で胎土分析を行った。ただ、900°C以上になった場合の組成に



第179図 三角ダイヤグラム、菱型ダイヤグラム位置分類図

について明らかでなく、今後の検討が必要である。

1—3 電子顕微鏡観察

土器胎土の組織、粘土鉱物およびガラス生成の度合についての観察は、電子顕微鏡によって行った。観察には日本電子製T-20を用い、倍率はX45、300、700、1500、4500の5段階で行い、写真撮影をした。45～300倍は胎土の組織、700～4500倍は粘土鉱物およびガラスの生成状態を観察した。

2 実験結果の取り扱い

実験結果は胎土性状表に示すとおりである。第5表右側には、X線回折試験に基づく粘土鉱物および、造岩鉱物の組成が示してあり、左側は各胎土に対する分類を行った結果を示している。X線回折試験結果に基づく粘土鉱物および造岩鉱物の各々に記載される数字はチャートの中に現れる各鉱物に特有のピークの高さ（強度）をmm単位で測定したものである。ガラス量は大略 $2\theta=10^\circ \sim 20^\circ$ の範囲にあって、チャートが全体に腫れあがるプロードな現象を示す部分に対する面積で表示し、ガラス量の比較の材料とした。電子顕微鏡観察によって得られたガラス量と、X線回折試験におけるガラス量と比較対比し、さらにムライト(Mu)、クリストバライト(Cr)、などの組成上の組み合わせによって焼成ランクを決定した。

2-1 組成分類

I) Mo-Mi-Hb三角ダイヤグラム

第179図に示す様に三角ダイヤグラムを①～⑬に分割し、位置分類を各胎土について行い、各胎土の位置を数字で表した。Mo、Mi、Hbの3成分の含まれない胎土は記載不能として⑭に含め、別に検討した。三角ダイヤグラムは、モンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、角閃石(Hb)のX線回折試験におけるチャートのピーク高を、百分率(%)で表示する。モンモリロナイトはMo/Mo+Mi+Hb×100で百分率として求め、同様にMi、Hbも計算し、三角ダイヤグラムに記載する。三角ダイヤグラム内の①～④はMo、Mi、Hbの3成分を含み、各辺は2成分、各頂点は1成分よりなっていることを表している。位置分類についての基本原則は第179図に示すとおりである。

II) Mo-Ch、Mi-Hb菱形ダイヤグラム

第179図に示す様に菱形ダイヤグラムを①～⑯に分割し、位置分類を数字で表した。記載不能は⑰として別に検討した。記載不能はモンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、緑泥石(Ch)、角閃石(Hb)のうち、⑮2成分以上含まれない、⑯Mo、Ch 2成分が含まれない、⑰Mi、Hbの2成分が含まれない、の3例がある。菱形ダイヤグラムはMo-Ch、Mi-Hbの組み合わせを表示するものである。Mo-Ch、Mi-Hbの各々のX線回折試験のチャートの高さを各々の組み合わせ毎に百分率で表すもので、例えば、Mo/Mo+Ch×10と計算し、組み合わせ百分率を記載したものである。菱形ダイヤグラム内にある①～⑯はMo、Mi、Ch、Hbの成分を含み、各辺はMo、Mi、Ch、Hbのうち3成分、各頂点は2成分を含んでいることを示す。①～②と①～③は現在のところ大きな意味はないが、胎土分析の量が増えてくると位置分類上の区分が必要なものとなるかもしれない。しかし現在は①として一括して取り扱った。位置分類についての基本原則は第179図に示すとおりである。

2-2 焼成ランク

焼成ランクの区分はX線回折試験により鉱物組成と、電子顕微鏡観察によるガラス量によって行った。ムライト(Mu)は、磁器、陶器など高温で焼かれた状態で初めて生成する鉱物であり、クリストバライト(Cr)はムライトより低い温度、ガラスはクリストバライトより更に低い温度で生成する。これらの事実に基づき、X線回折試験結果と電子顕微鏡観察結果から、土器胎土の焼成ランクをⅠ～Ⅴの5段階に区分した。

①焼成ランクⅠ…高温を示すムライトが多く生成し、ガラスの単位面積が広い。

②焼成ランクⅡ…ムライトとクリストバライトが共存し、単位ガラスの面積が狭くなる。

③焼成ランクⅢ…ガラスの中にクリストバライトが生成し、ガラスの単位面積が小さく、葉状断面を成し、ガラスのつながりが欠ける。

④焼成ランクⅣ…ガラスのみが生成し、原土の組織をかなり明瞭に残す。ガラスは微小な葉状を呈する。

⑤焼成ランクⅤ…原土に近い組織を有し、ガラスはほとんどできていない。

以上のⅠ～Ⅴの分類は原則ではあるが、胎土の材質、すなわち粘土の良悪によってガラスの生成量は異なるので、電子顕微鏡によるガラス量も分類に大きな比重を占める。このため、ムライト、

クリストバライトなどの組み合わせといくぶん異なる焼成ランクが出現することになるが、この点について第5表の右端の備考に理由を記した。

2-3 タイプ分類

タイプ分類は各々の土器胎土の組成分類に基づくもので、三角ダイヤグラム、菱形ダイヤグラムの位置分類による組み合わせによって行った。同じ組成をもった土器胎土は、位置分類の数字の組み合わせも同じはずである。タイプ分類は三角ダイヤグラムの位置分類における数字の小さいものの組み合わせから作られるもので、便宜上、アルファベットの大文字を使用し、同じ組み合わせのものは同じ文字を使用し、表現した。例えば三角ダイヤグラムの①と菱形ダイヤグラムの①-1の組み合わせはA、三角ダイヤグラムの②と菱形ダイヤグラムの⑯はB、という具合である。各文字の後の()内の数字は、三角、菱形ダイヤグラムの位置分類の数字を合計したものである。近い組織を示しながら、位置分類上隣接するタイプ分類に入る場合には、試料数の多いものの類似としてA'などとダッシュをつけて分類した。なお、タイプ分類のA、B、C等は便宜上であり、今後試料数の増加に伴って統一した分類名称を与える考えである。

3 実験結果

3-1 タイプ分類

土器胎土は第5表胎土性状表に示すように、第181図三角ダイヤグラム、第181図菱形ダイヤグラムの位置分類、焼成ランクに基づいて、A～Hの8タイプに分類される。久台遺跡周辺の原土は①～⑪タイプすなわちAタイプと⑫～⑯の2タイプに大別される。Aタイプはモンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の4成分を含みさら遺跡の土器胎土(昭和57年度分析)の在地性のものと一致している。さら、久台遺跡の土器胎土の中で比較的多いものはGタイプであり、モンモリロナイト(Mo)1成分を含む。実際には⑪～⑯の位置分類にあたるGタイプはモンモリロナイト(Mo)と緑泥石(Ch)の組成のものも同じ位置、分類にあたるため、便宜的に後者をGタイプとして記載した。土器胎土の中に生成しているガラスは全体に葉片状あるいは微小であり、焼成ランクはⅢ～Ⅳとあまり高くない。

Aタイプ…HK-4、7、8、19、20

モンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の4成分よりなる。中～粗粒の石英(Qt)、斜長石(Pl)を混入する淘汰の悪いローム質粘土によって構成される。久台遺跡周辺で採取した原土と組成が一致し、さら遺跡の土器胎土とも一致することから在地性であると判断される。ガラスは微小のものが多く、原土の組織をよく残しており、焼成ランクはⅣと低い。

Bタイプ…HK-3、18

モンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、角閃石(Hb)の3成分を含み、緑泥石(Ch)に欠ける。中～粗粒の石英(Qt)、斜長石(Pl)を混入する淘汰の悪いローム質粘土で構成される。ガラスは微小で原土の組織をよく残しており、焼成ランクはⅣと低い。

Cタイプ…HK-6

角閃石(Hb)1成分のみを含み、モンモリロナイト(Mo)、雲母類(Mi)、緑泥石(Ch)に欠

ける。細粒で材質的に均質な粒径のそろった碎屑性粘土で構成される材質のよさ、粒径の均一さはあたかも水簸しているようである。これらの胎土は角閃石(Hb)と $n\text{Al}_2\text{O}_3$ 、 $m\text{SiO}_2$ 、 $l\text{H}_2\text{O}$ で構成される粘土と推定される。ガラスは微小であり、原土の組織を残しており、焼成ランクはⅣと低い。

D タイプ…HK-1

雲母類(Mi)、角閃石(Hb)を含み、モンモリロナイト(Mo)、緑泥石(Ch)に欠ける。粗粒の石英(Qt)、斜長石(Pl)を混入する濁汰の悪いローム質粘土で構成される。ガラスは、細粒で、焼成ランクⅢ～Ⅳといくぶん高い。

E タイプ…HK-12、16

雲母類(Mi)、緑泥石(Ch)の2成分を含み、モンモリロナイト(Mo)、角閃石(Hb)に欠ける。細～粗粒の石英(Qt)、斜長石(Pl)を混入する濁汰の悪いローム質粘土で構成される。HK-12は微小ガラスが生成し原土の組織をよく残しており、焼成ランクはⅣと低い。HK-16も同様に微小ガラスが生成し、原土の組織を残しているが、クリストバライト(Cr)が生成しており、焼成ランクはⅢ～Ⅳといくぶん高い。

F タイプ…HK-17

雲母類(Mi)を1成分のみ含み、モンモリロナイト(Mo)、角閃石(Hb)、緑泥石(Ch)の3成分に欠ける。中～粗粒の石英(Qt)、斜長石(Pl)を混入する濁汰の悪いローム質粘土で構成される。ガラスは葉片状のものが生成し、焼成ランクはⅢ～Ⅳといくぶん高い。

G タイプ…HK-2、5、9、10、14、15 (G' タイプ…2、5、10)

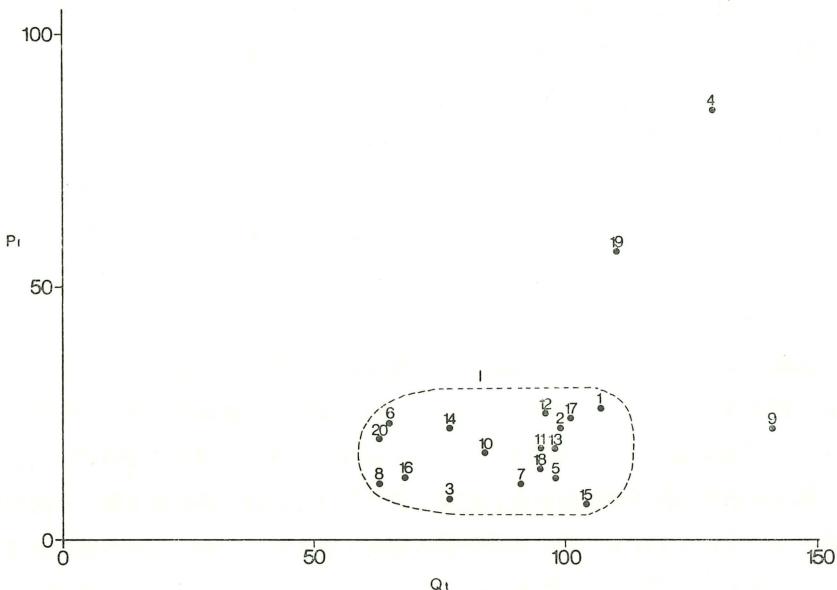
G タイプは位置分類の⑪～⑫にあたるもので、⑫は記載不能を意味する。G タイプにはモンモリロナイト(Mo)と緑泥石(Ch)の2成分を含むものと、モンモリロナイト(Mo)1成分のみを含むものと2種類が存在する。前者をG' タイプ、後者をG タイプとして区別し、記述する。G タイプはHK-9、14、15の4試料があり、モンモリロナイト(Mo)1成分のみを含む。粗粒の石英(Qt)、斜長石(Pl)を混入する濁汰の悪いローム質粘土で構成される。HK-15のみは粒径のそろった均質な粘土であり、水簸されているようであり、HK-2、9、14と区分する必要がある。ガラスは葉片状のものが生成し、焼成ランクⅢ～Ⅳといくぶん高い。HK-15はクリストバライト(Cr)が生成し、葉片状ガラスも生成し、焼成ランクⅢと高い。

G' タイプ(HK-2、5、10)はモンモリロナイト(Mo)、緑泥石(Ch)の2成分を含む。粗粒の石英(Qt)、斜長石(Pl)を混入する濁汰の悪いローム質粘土で構成される。HK-2、10は微小～細粒ガラスが生成し、焼成ランクはⅢ～ⅣであるがHK-5は発泡ガラスが生成し、焼成ランクはⅢと高い。

H タイプ…HK-11、13

モンモリロナイト(Mo)、角閃石(Hb)の2成分を含み、雲母類(Mi)、緑泥石(Ch)にかける。粗粒の石英(Qt)、斜長石(Pl)を混入する濁汰の悪いローム質粘土で構成される。HK-11は微小ガラスが生成し、原土の組織をよく残しており、焼成ランクはⅣと低い。HK-11は葉片状ガラスでクリストバライト(Cr)を生成し、焼成ランクはⅢ～Ⅳといくぶん高い。

3-2 石英(Qt)一斜長石(Pl)の相関について



第180図 Qt—Pl相関図

第180図Qt—Pl相関図はX線回折試験によって得られた石英(Qt)と斜長石(Pl)の強度高を単純にグラフ化したものである。実験はFull Scole 800 countに条件設定したものであり、この条件下におけるチャート上の強度高をミリメーター単位であらわしてある。

石英、斜長石は砂の主成分であり、土器製作過程で粘土中に混入される。砂における石英、斜長石の量比は後背地の地質および運搬過程における流速などの条件によって変化し、ある地域においては大まかにある一定の比率を有するものと推察される。ある地域におけるある比率を有する砂をどの程度粘土中に混入するかは各集団における技術上の問題である。例えば同一集団において使用する粘土は若干異っても砂の粘土に対する混合比はある一定の量比にあると考えられる。すなわち、各集団における土器焼成温度は燃料の相違、燃焼のさせ方など異っていたであろうし、燃料の原材料となる木材の相違、いいかえれば、植生によっても異ったであろう。粘土に対する砂の混合比は各集団が維持した土器焼成温度と密接な相関をもつたであろうと推察される。すなわち、維持した土器焼成温度において良質の土器を焼きあげるために、粘土の材質と砂の混合比を経験的に決定したものであり、砂の混合比は純然たる土器焼成上の問題であると推察される。

蓮田、久台遺跡におけるQt—Plの相関は第180図に示すとおりである。土器はIグループに集中し、その他のものは3個と少ない。

Iグループ…HK—1、2、3、5、6、7、8、10、11、12、13、14、15、16、17、18、20
石英(Qt)は60～110、斜長石(Pl)は5～25の範囲にある。これらは個体数も多く、集中度も高いのが特徴である。Iグループ内では石英(Qt)が60～85、90～110の範囲のものと2分される可能性は考えられる。

その他…HK—4、9、19

I グループと比較して、斜長石 (Pl) の量においてHK-4、19は2～3倍と高く、明らかに異なる砂の混合比を示している。また、HK-9の斜長石 (Pl) の量はI グループとほぼ類似するが、石英 (Qt) の量は約1.5倍と高く、砂の混合比は前2者と同様に異なる。

これら個体数20のうち19個が集中するI グループとその他のものは前記の前提条件に従えばI グループのものはある時代の同一集団で製作された土器であり、その他の3個の土器は各々異なる集団で製作されたものであると推察される。I グループは細分が可能であり、各土器の出土層準による時代の決定、土器の形態による分類などの対比によって、細分化等の検討が必要である。

3-3まとめ

蓮田、久台遺跡の土器胎土はささら遺跡の土器胎土および原土と対比するとAタイプのものが在地性であると判断される。これらはモンモリロナイト (Mo)、雲母類 (Mi)、角閃石 (Hb)、緑泥石 (Ch) の4成分を含有するものであり、元荒川によってもたらされた碎削性の粘土である。これらは、秩父山系の三波川結晶片岩を供給源とするもので、同じ供給源を擁する河川の流域では類似に組成する。Gタイプは⑪～⑯の位置分類に相当するもので、⑯は記載不能に該当する。このため、モンモリロナイト (Mo) 1成分のものと、モンモリロナイト (Mo) と緑泥石 (Ch) の2成分のものがGタイプに所属するので前者をGタイプ、後者をG'タイプとして分類した。Gタイプはモンモリロナイト (Mo) と $n\text{Al}_2\text{O}_3$ 、 $m\text{SiO}_2$ 、 $l\text{H}_2\text{O}$ で構成され、比較的、均質な粘土によってつくられた土器である。G'タイプは粗粒の石英 (Qt)、斜長石 (Pl) を混入する濁汰の悪いローム質粘土であるが一般に緑泥石 (Ch) はローム中に含まれることはまれであり、Aタイプと同様に元荒川の堆積物の一部であるかもしれない。Bタイプはモンモリロナイト (Mo)、雲母類 (Mi)、角角閃石 (Ch) の3成分よりAタイプの組成に相当近く、Gタイプと同様に元荒川の堆積物の一部であるかもしれない。

第5表 胎土性状表

試料 No.	タイプ 分類	焼成 ランク	組成分類		粘土鉱物および造岩鉱物 (mm)								ガラス量 (mm ²)	備考	
			Mo-Mi-Hb	Mo-Ch Mi-Hb	Mo	Mi	Hb	Ch	Ka(Ha)	Au	Hy	Qt	Pl		
HK-1	D	III~IV	⑥	⑩		2	3					107	26		粗粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪いローム質粘土、細粒ガラス
2	G	III~IV	⑪	⑩	4			2				99	22		粗粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪いローム質粘土、葉片状ガラス
3	B	IV	①	⑯	3	3	2					77	8		中粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪いローム質粘土、細粒ガラス
4	A	IV	①	①~2	4	2	3	4		4	2	129	85		粗粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪い碎層性粘土、微小ガラス
5	G	III	⑪	⑩	3			3			2	98	12		粗粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪い碎層性粘土、発泡微小ガラス
6	C	IV	⑤	⑩			2			2		65	23		細粒、材質的に均質な良質の碎層性粘土、微小ガラス
7	A	IV	①	①~2	4	3	2	2			2	91	11		粗粒、Qt·Pl混入、比較的均質な碎層性粘土、微小ガラス
8	A	IV	①	①~2	2	2	3	2		2	2	63	11		中粒、Qt混入、淘汰の悪いローム質粘土、微小ガラス
9	G	III~IV	⑪	⑩	4					2	3	141	22		中~粗粒、Qt混入、淘汰の悪いローム質粘土、葉片状ガラス
10	G	IV	⑪	⑩	3			3		2	2	84	17		粗粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪いローム質粘土、微小ガラス
11	H	IV	⑫	⑭	3		2				3	95	18	13	粗粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪いローム質粘土、微小ガラス
12	E	IV	⑧	⑧		3		3			2	96	25		粗粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪いローム質粘土、微小ガラス
13	H	III~IV	⑫	⑭	4		3		4	4		98	18	9	粗粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪いローム質粘土、葉片状ガラス
14	G	III~IV	⑪	⑩	3					7		77	22		粗粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪いローム質粘土、細粒ガラス
15	G	III	⑪	⑩	3				3			104	7	12	細粒、均質な粒径のそろった粘土、葉片状ガラス
16	E	III~IV	⑧	⑧	3		3			2	2	68	12	7	細粒、淘汰の悪いローム質粘土、微小ガラス
17	F	III~IV	⑧	⑩		2			4			101	24		中粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪いローム質粘土、葉片状ガラス
18	B	IV	①	⑯	4	3	3		3		2	95	14		中~粗粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪いローム質粘土、微小ガラス
19	A	III~IV	①	①~1	3	3	2	3		2		110	57		粗粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪いローム質粘土、葉片状ガラス
20	A	IV	①	①~1	3	3	3	3	4		3	63	20		粗粒、Qt·Pl混入、淘汰の悪いローム質粘土、微小ガラス

焼成ランク

Mu··· I

Mu-Cr··· II

Cr-glass··· III

glass··· IV

Mi··· 雲母類

Hb··· 角閃石

Ch··· 緑泥石

Mo··· モンモリナイト

Ha··· ハロイサイト

Au··· 普通輝石

Hy··· 紫蘇輝石

Ka··· カオリナイト

P1··· 斜長石

Cr··· クリストバライト

Mu··· ムライト

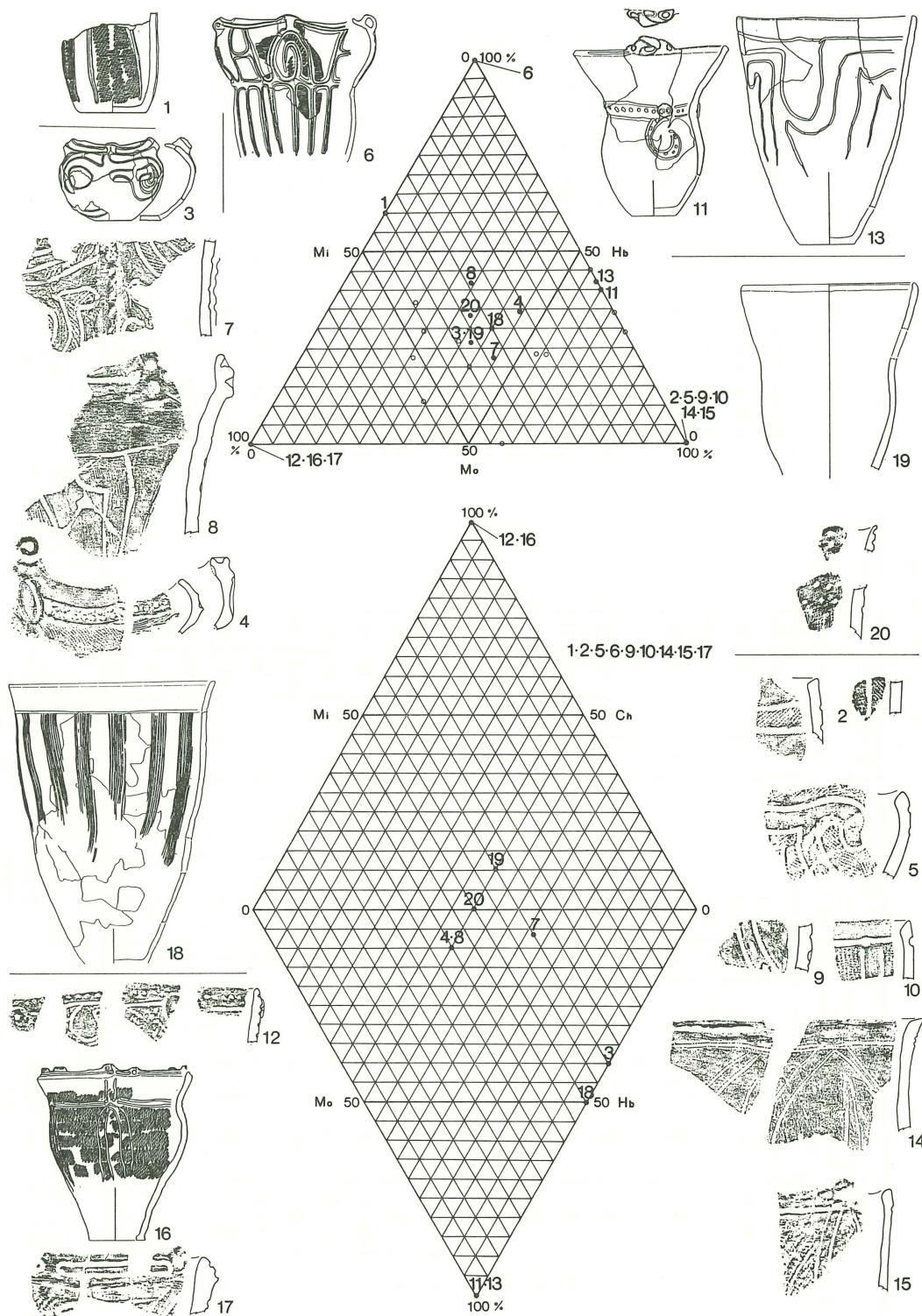
組成分類

(Mo-Mi-Hb

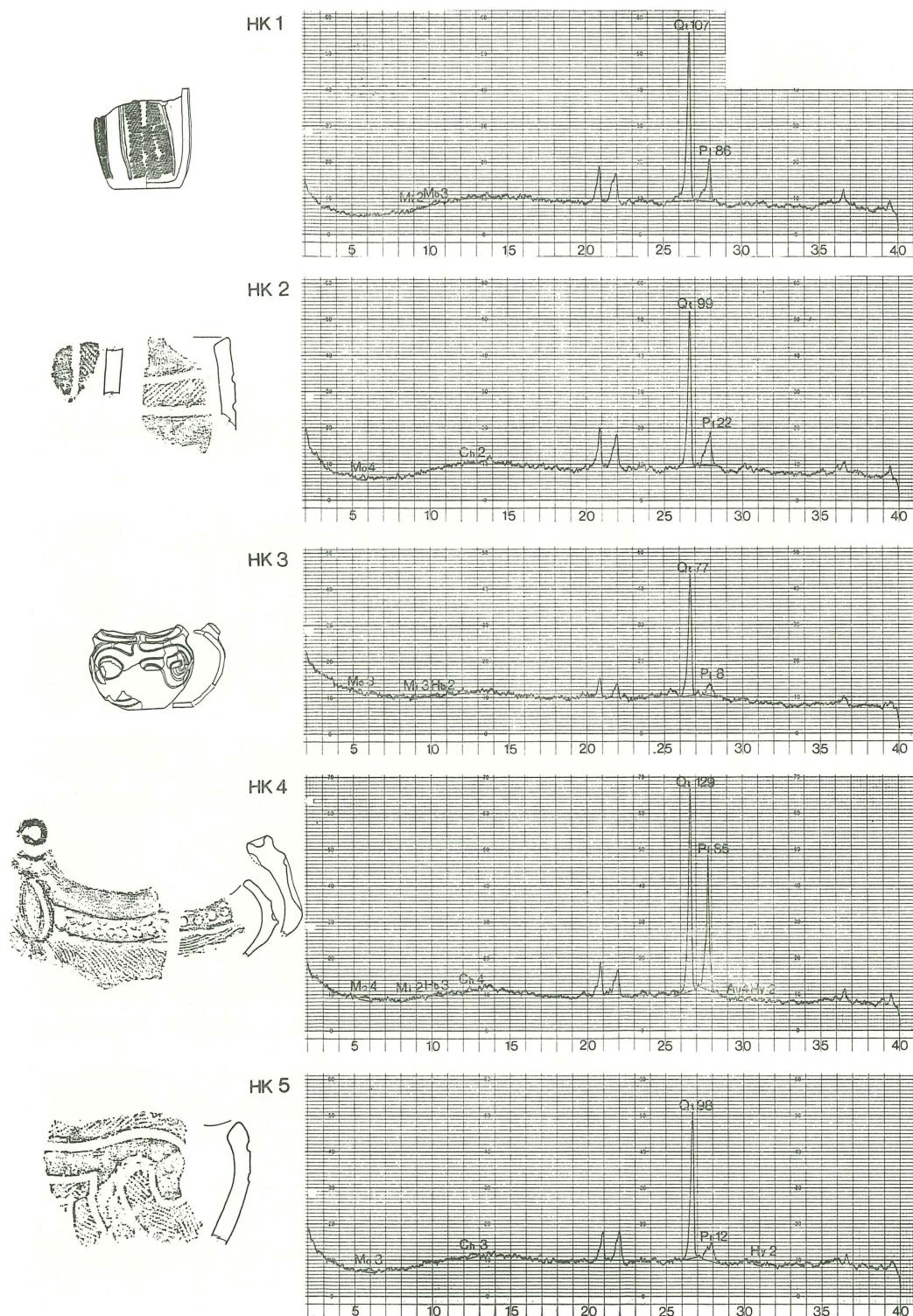
三角ダイアグラム

(Mo-Ch

菱型ダイアグラム



第181図 Mo—Mi—Hb三角ダイヤグラム、Mo—Ch・Mi—Hb菱型ダイヤグラム



第182図 HK 1 ~ 5